益山地域における長舎と鳥形土製品に関する研究

－６～８世紀の日韓宮城の建物配置と寺院出土塑像の比較検討を中心に－

田 庸 昊

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．研究対象と方法
Ⅲ．用語と概念
Ⅳ．主要遺跡と遺物
Ⅴ．長舎と鳥形土製品の現況と特徴
Ⅵ．長舎と鳥形土製品の機能と性格
Ⅶ．まとめ

要　旨　日韓における長舎は、中国の宮殿建築や四合院と呼ばれる伝統建築と関連している。これは王宮や寺院を中心に、王が主管する儀礼や行事をおこなう「祭祀（祭享）空間」、業務を遂行するための「政務空間」、学問や寝食のための「講学空間」、物品を保管する「倉庫や作業空間」の観点からアプローチすることができる。古代には、このような領域が一つの長舎で独立的、または複合的に存在したが、中世以降は、空間的に完全に分離した様相をみせる。

長舎を中心とした建物配置から益山地域の王宮や寺院の内部空間をみると、建物がもつ意味を新たに認識することができる。王宮である益山王宮里遺跡では、様々な類型の長舎が空間を異にして確認される。益山王宮里遺跡の長舎は、古代中国や高句麗の宮城の影響を受けて独特な変貌を遂げ、のちに新羅や日本の宮城、地方官衙にも影響を及ぼした。

益山帝釈寺から出土した鳥形土製品は、残存状態が良くなく、関連遺物との比較・検討をする上で、非常に独特な形をしているため、それが何であるかを断定するのは難しい。しかしながら、残存する形態や製作技法などを総合的に考えると、百済末の塑像である可能性が高いと考えられる。

韓国で、「塑像」と関連するもっとも重要な遺跡として、扶余定林寺と益山帝釈寺を挙げることができる。この二つの寺院は、金堂左右にある南北に長い長舎が東・西回廊に取り付く点で共通する。このような点から、６～８世紀の古代文化相を解明する上で「長舎」と「塑像」は密接な関連をもつと考えられる。また、「長舎」と「塑像」は、韓国と日本でやや異なる展開をみせる。これら糸口を順序よく解き明かしていければ、「長舎」と「塑像」は、６～８世紀の日韓文化相を捉える新たな鍵になると期待している。

キーワード　長舎　建物配置　鳥形土製品　塑像　安置　起源と系統　文化相

国立中原文化財研究所

Ⅰ．はじめに

６～８世紀において、古代日韓の宮城や寺院関連遺跡でみられる、一方向に長い形の建物は、かねてから知られていた。このような建物は、韓国では「回廊形、あるいは長廊形建物址」もしくは「長廊址」、日本では「長舎」と呼ばれてきた[1]。近年、百済泗沘期の王宮と推定される益山王宮里遺跡の大型建物前面西方から、南北に長い建物が発見された[2]。これに類似する建物配置は、日本の飛鳥宮、難波宮、大津宮などで既に発見されている[3]。この発見により、「一方向に長い細長方形」建物が宮城内で担う機能や役割について関心が高まった。

寺院での長舎は、講堂や僧房、東・西回廊に取り付く長い建物などであるが、これまで付属建物として扱われてきた。百済泗沘期の寺院である扶余王興寺や定林寺、益山帝釈寺などで、東・西回廊に取り付く長い建物が新たに発見されるにつれ、その構造や変遷について様々な調査と研究がなされるようになった。また、益山帝釈寺では、東回廊と東建物の取付部付近から鳥形土製品が出土した。このような資料は、百済地域での出土は極めて稀で、その機能や用途について本格的に論じられたことはなかった。

2016年におこなわれた益山帝釈寺址廃棄遺跡の発掘調査により、遺跡の形成過程の全容があきらかになり、さらには、既存の試掘調査ではみられなかった新資料の発見があった[4]。遺跡の様相は、日本の川原寺裏山遺跡との類似性が指摘された[5]。これにより、鳥形土製品は、日韓両国で出土する塑像とみなすことができ、その機能や用途が長廊とどのような関わりをもつのかに関心が高まった。

しかも、６～８世紀における日韓両国の寺院遺跡からも、塔や金堂を囲む「一方向に長い細長方形」建物が確認されている。近年では扶余や益山地域の寺院遺跡で、塔や金堂など中心建物の左右で対称をなす付属建物の機能や性格に多くの関心が集まっている[6]。このような南北に長い付属建物は金堂との位置関係や東西に長い講堂との取付状況などから、その重要性が高まっている。

６～８世紀における日韓の宮城や寺院関連遺跡でみられる長舎[7]と鳥形土製品、あるいは塑像[8]は、各々の構造や性格、宮城や寺院内での機能や役割にくわえ、当時の日韓間の文化交流の様相を新たに捉える重要なキーワードとみることができる。そのようななか、韓国国立文化財研究所と奈良文化財研究所は、第４次日韓共同研究を2016年から2020年まで進めてきた。

その一環として、筆者は韓国において、６～８世紀にもっとも多様な様相を呈し、かつ最新の傾向が現れる益山地域の長舎と鳥形土製品について、過去５年間、日韓両国で現地調査をおこなった。本稿では、現地調査で収集した資料を中心に、その機能と性格に焦点

を当てて述べることとする。特に益山帝釈寺における代表的な長舎の東建物と東回廊の取付部付近で出土した鳥形土製品について、帝釈寺の寺域中心部および廃棄遺跡から出土した塑像と同一の性格としてみることができるのか、あるいは、使用場所を長舎と関連づけることができるのか、という点は大変重要な問題である。このような問題を解明するためには、６～８世紀における日韓の宮城や寺院で確認される長舎と塑像に関する比較・検討が何より重要である。言い換えれば、長舎と鳥形土製品、あるいは塑像は、６～８世紀における日韓の文化交流を紐解く重要な手がかりになるということができる。

Ⅱ．研究対象と方法

共同研究における筆者の研究テーマは、「６～８世紀における日韓宮城の建物配置と寺院出土の塑像に関する比較研究」で、研究期間は、2016～2020年までの５年間である。李恩碩（当時、国立扶余文化財研究所 学芸研究室長、現 国立羅州文化財研究所所長）、黄仁鎬（当時、国立文化財研究所 考古研究室 学芸研究官、現 国立扶余文化財研究所所長）、田庸昊（当時、国立扶余文化財研究所 学芸研究士、現 国立中原文化財研究所 学芸研究官）の３名で研究を進めた。

研究対象は、６～８世紀の韓国において、宮城や寺院関連遺跡から確認される「長舎」を中心にした建物配置と「塑像」である。特に日本では、長舎が主に宮城や地方官衙[9]で非常に独特な建物配置をみせている[10]。一方、韓国では、三国～統一新羅時代の地方官衙やそれに類する遺跡の調査および研究がほとんどおこなわれていない。このことから、韓国に関しては、主に宮城や宮城関連遺跡で確認された長廊を中心に論じ、日本に関しては、地方官衙にまで広げて検討をおこなった。

研究計画は、次の通りである。韓国における６～８世紀の宮城や寺院関連遺跡のなかで、長舎を中心にした建物配置と塑像が共伴するもっとも代表的な地域は益山である。近年、塑像が出土して注目を浴びた遺跡が、益山帝釈寺および廃棄遺跡である。これと関連して、寺域中心部から出土した鳥形土製品については、破片のため全体形はわからないが、残存状態や製作技法、類似事例などを塑像と比較し、より綿密に検討する必要がある。

研究方法は、次のような過程でおこなった。まず、益山地域の長舎と鳥形土製品と関連して、比較検討が可能な６～８世紀の日韓宮城と寺院関連遺跡の最近の調査と研究の現況を把握した。次に、そのなかで直接実見、または関連資料の収集が必要な韓国と日本の研究対象を設定し、現地調査をおこなった。さらに、追加調査をおこなうことで、６～８世紀の日韓資料を比較検討した。

このようにしておこなった資料の収集と現地調査の内容を分析し、６～８世紀における日韓の長舎を分類した。さらに時代や地域による変遷を検討し、最終的には、益山王宮里

遺跡を中心とした益山地域の長舎が占める位相や意味を把握した。そして、益山帝釈寺の寺域中心部で出土した鳥形土製品については、６～８世紀の日韓塑像のなかで類例調査をおこない、その用途、意味や性格をあきらかにすることに努めた。

何よりも日韓研究者の間で持続的な研究交流をおこなったことにより、共通した問題意識が生まれ、多角的な協力を通じて支援を受けた。多大なご支援をいただいた、奈良文化財研究所の渡辺晃宏（当時、都城発掘調査部　副部長および史料研究室長）、馬場基（現史料研究室長）、桑田訓也、山本祥隆、高田祐一、方国花をはじめ、「木簡を中心とした出土文字資料の日韓比較と研究交流」チームにも、この場をかりて感謝の言葉を述べたい。このような日韓両国研究者のパートナーシップと、最新の調査と研究資料による持続的な交流によって最大限の研究成果を得ることができた。

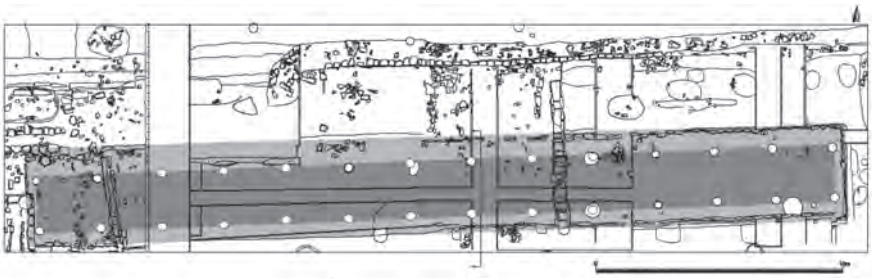
Ⅲ．用語と概念

１．長舎

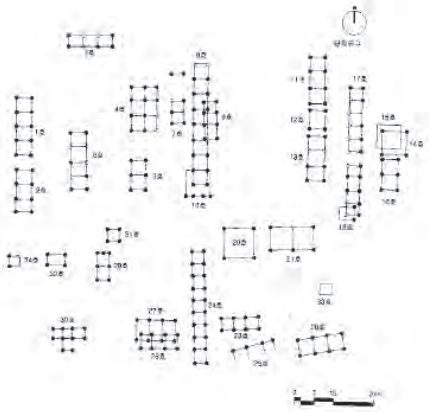
韓国では、「一方向に長い形の建物」について広義的に概念化するのみで、建物の機能や性格について検討をくわえることは皆無であった。むしろ、扶余官北里遺跡と益山王宮里遺跡でみられる間口７間、奥行４間の大型建物と一棟二室構造の建物、寺院でみられる講堂両脇の付属建物の構造や機能、性格などについては、比較的活発に論じられてきた[11]。一方日本では、奈良文化財研究所が中心となって、古代の官衙や集落に関する研究会を1996年から開催し、様々な研究がなされてきた。そのなかで「長舎と官衙の建物配置」というテーマで検討を進め、日本全国にわたる資料の集成および分析をおこなった。この成果は2013年度の研究集会を通じて公開されており、2014年には書籍として発刊された[12]。

本研究の対象である建物は、韓国では長廊址、あるいは回廊形建物と称し、日本では長舎と呼ばれている（第１図）。このような建物がもつ機能と性格は、回廊とはまったく関連のない事例も多く、「回廊形建物」という用語は適切ではないと考える。したがって本稿では、長舎という用語を用いることとする。

日本では、長舎を「桁行が７間以上で、梁行が２間ほどの細長い平面形状を持つ建物」と定義する[13]。一方、韓国では、長廊址または回廊形建物を「東西、または南北方向に長い建物」と漠然と捉えている。今回の日韓共同研究の研究対象である長廊址、または長舎については、比較的論議が進んでいる日本側の見解に依拠することとする。ただし、奥行については、１間から４間までと比較的広く設定する。また、間口についても７間に満たなくとも、複数の建物が造営方位を揃えて連なることで、全体として７間を超える場合にも、広い意味での長舎に含めることにした。また、平面形態は、「細長い」というあいまいな表現ではなく「間口（桁行）：奥行（梁行）の比率が２：１以上」という条件を付け



①益山王宮里遺跡（韓国／百済）



②慶州瞻星台南辺（韓国／新羅）

③大阪難波宮（日本）

第１図　韓国と日本の長舎（国立扶余文化財研究所2008、국립문화재연구소 2010、林部2014）

くわえた。しかし、この条件を満たしている回廊については、建物を囲むという役割が明確であるため、長舎から除外した。以上を整理すると、本稿で論じる長舎は、「間口（桁行）が７間以上、奥行（梁行）が１～４間ほどで、間口（桁行）：奥行（梁行）の比率が２：１以上の細長い建物、または造営方位を揃えて連なる複数の複合建物」と定義することとする。

２．鳥形土製品

（１）鳥

鳥は空を飛ぶため、早くから人間よりも神に近づくことのできる、媒介的な存在として認識されてきた（第２図）。渡り鳥は、季節の変化にあわせて人間との生活と神の場所とを移動する存在であると考えられた[14]。すなわち、鳥は「天の種族」、「神の使者」とみなされ神聖視されてきた[15]。ソッテは、木や石で作った鳥を竿や石柱の上に飾り信仰の対象にしたもので、マウル（村）の安寧と守護、豊穣を祈る象徴物であった。ソッテがいつから作られたかは定かではないが、三韓時代に神を祀る場所であるソド（蘇塗）に由来することが知られている[16]。蘇塗に立てる木がソッテ（立木）であり、ソドの発音もソッテの音が変化したとする説がある。これと関連して、韓国では論山麻田里遺跡、光州新昌洞遺跡で鳥形木製品が出土している。ソッテに飾る鳥は鴨が大部分を占めるが、一部でカラス、

①益山帝釈寺（韓国／百済）

②慶州財買井址（韓国／新羅）

③川原寺裏山遺跡
（日本／飛鳥時代）

④康津月南寺（韓国／高麗）

第２図　鳥形土製品と塑像（国立扶余文化財研究所2013、복천박물관2006、飛鳥資料館1985、국립나주박물관・국립나주문화재연구소・한국문화유산협회2020）

雁、カモメ、トキ、カササギなどもみられる。特に、東アジアのシャーマニズム文化圏では、鴨は天上、地上、水中を行き来しながら、周期的に地域を移り住む渡り鳥でもあり、超越的に世界を往来する存在として認識されている[17]。このように、鳥は人間と天神の世界をつなぎ、人間の世界から天神の世界へ導く存在と考えられてきた。

中国では、鳥を「太陽の化身、神使、象徴物」などと表現してきた。人類は、朝早く出て夜遅く帰る、空を飛ぶ鳥の習性を太陽と同一視してきた。すなわち、鳥は太陽を象徴する円形と結びつくことで、太陽崇拝思想の重要な存在でもあった。紀元前5000年頃の仰韶文化の代表的な遺跡である半坡遺跡からは魚と鳥が結合した文様が確認され、紀元前3300年頃の良渚文化では、玉石に刻まれた鳥の造形物が発見された。漢代以降は、鳥を太陽に描き入れたものや鳥の腹部を太陽の形に描いた文様も登場した。

（２）塑像

韓国で塑像について本格的に論じられ始めたのは、扶余定林寺や慶州四天王寺から出土した塑像の分析を通じてであった[18]。最近では、益山帝釈寺址廃棄遺跡で新型式の塑像が出土したことで、日本や中国資料との比較研究も活発になった。また、益山帝釈寺の寺域から遠く離れた地点に別途廃棄施設を設ける形は、日本の川原寺裏山遺跡でも確認されて

いる[19]。廃棄と関連する特別な儀礼行為との関連性も注目を集めている。

塑像は土で作られた仏像で、塑像、泥塑像、泥像、泥灰像、磚像、素などと呼ばれる[20]。また、土で作った彫刻像は、スタッコ像（石灰）、泥像、テラコッタ像に大別される[21]。東アジアの仏教彫刻では、主に泥像とテラコッタ像が多く作られた。両者の大きな違いは、焼成の有無である。泥像は土で成形した後、焼かずに乾燥させて作る。一方、テラコッタ像は素焼きである。しかし、韓国ではこのような違いを区別することなく、塑造像、または塑像と称している。

塑像の製作技法は、型づくりと手づくねがある。前者は浮彫像や同一仏像を大量に生産する際に用いられ、大部分の磚仏がこの方法で製作されている。新羅四天王寺の緑釉神将壁磚（甓磚）や錫杖寺出土の塑像がこれにあたる。

塑像は、土を材料にするため製作が容易な反面、火災や風雨などに対して耐久性が弱い。そのため、三国時代の塑像が完全な形で残ることは極めて稀であるのが現状である。塑像研究の上で重要な資料である扶余定林寺出土資料も、墳墓に副葬された陶俑として認識されていた[22]。

Ⅳ．主要遺跡と遺物

本稿で重点を置く対象の一つ、「長舎」は、これまで韓国においては、「建物」の範疇として大まかに論じられ、それほど強い関心を集めることはなかった。もう一つの対象である鳥形土製品も残存状態が悪く、全体形が不明であったため、その機能や用途についてはほとんど論じることができなかった。また、「鳥形土製品」と関連する調査や研究現況を考察する必要がある。これが、祭祀や儀礼に使われるものなのか、もしくは、寺院の塔や仏堂に祀る「塑像」、すなわち土製の仏像なのか、あるいはその意味や性格について分析をおこなうものとする。

１．長舎[23]

日韓における長舎は、三国時代から統一新羅時代にかけて宮城関連遺跡で出現する[24]。宮城内の宮殿建築は、大部分が間口７間以上、奥行４間で、間口：奥行の比率が２：１以上であるため、長舎の概念に含まれる。これ以外にも、長舎には東西、あるいは南北方向に二つの建物が並行して対をなす配置もみられる。

（１）朝鮮半島における主要遺跡

①高句麗（第３図）

平壌・安鶴宮　大城山蘇文峰の南山麓に位置する。一辺の長さは約620ｍで、やや湾曲した台形の城壁を巡らす。内部は５つの領域に分かれ、造営時期は高句麗説と高麗説がある。長舎は、間口が７間または11間、奥行が４間または５間、あるいは、間口が３（４）・５・

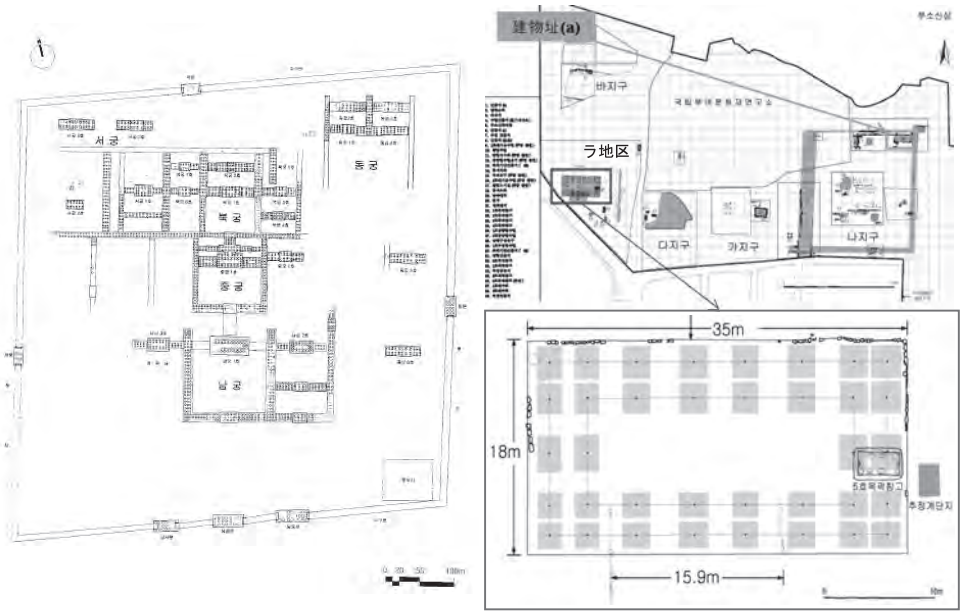
10間、奥行３間が中心建物の東西両脇に、奥行が１・２間、または４間の付属建物が付設された構造であり、東西、または南北に並行して配置される。

②百済（第３～５図）

扶余・官北里遺跡　扶蘇山城南山麓に位置し、道路、石垣、池、工房、大規模な貯蔵施設と倉庫などが確認され、百済泗沘期の王宮と推定されてきた。ラ地区では盛土台地上に間口７間、奥行４間の大型建物があり、サ地区でも建物（a）が発見されている。大型建物の基壇規模は、東西長38 m、南北幅18.5 m、または19.25 m と推定される。建物規模は、桁行７間（31 m）、梁行４間（14.5 m）である。建物（a）は、扶蘇山山麓の石垣前面で東西大路と南北小路に区画された北東隅に位置する。基壇のみが残存し、その規模は東西長18.5 m、南北幅5.6 m である。

扶余・軍守里廃寺　扶余邑から場岩里に向かう低丘陵上に位置し、一塔一金堂の伽藍配置を有する。６世紀前半から中盤の時期に推定される。講堂と東・西回廊があるが、遺存状態が悪いため規模は不明である。講堂両脇の建物は、それぞれ東・西回廊に取り付く。講堂は瓦積基壇で基壇のみが残存する。講堂は東西長45.45 m、南北幅18.18 m であり、回廊は幅６m である。講堂の西建物は南北長15.15 m、東西幅12.42 m、東建物は南北長15.15 m、東西幅13.3 m である。

扶余・陵山里廃寺　陵山里古墳群と羅城との間にあるノンメコル渓谷に位置し、一塔一金



①平壌安鶴宮（韓国／高句麗）　②扶余官北里遺跡（韓国／百済）

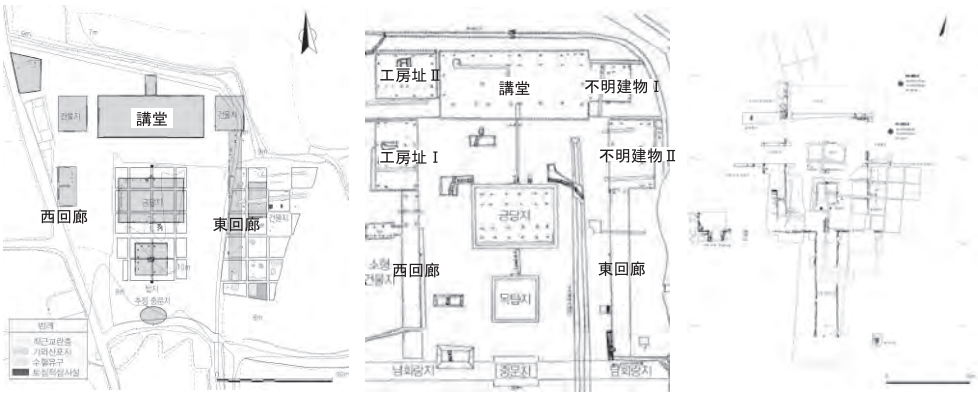
第３図　韓国の長舎関連遺跡１（高句麗と百済）
（국립문화재연구소2010、国立扶余文化財研究所2009）

堂の伽藍配置を有する。威徳王13年（567）に創建された。講堂およびこれと並列する工房Ⅱと不明建物Ⅰ、東・西回廊、東・西回廊および両回廊に取り付く不明建物Ⅱ、工房Ⅰがある。講堂の規模は37.40 m×18.00 m で、東・西施設をもつ一棟二室構造をとる。講堂東の不明建物Ⅰは、13.5 m×9.9 m である。講堂西の工房Ⅱは、15.28 m×11.59 m の規模で、工房Ⅱも一棟二室の構造をとる。東回廊が取り付く不明建物Ⅱは、17.8 m×11.6 m の規模である。西回廊が取り付く工房Ⅰは18.04 m×12.26 m の規模で、一棟三室の構造である。回廊の幅は約4.6 m である。

扶余・王興寺　ドムジェ山麓の南向き台地に位置し、一塔一金堂の伽藍配置を有する。威徳王24年（577）に創建された。講堂、金堂の東・西建物、東・西回廊がある。講堂は46.8 m×19.2 m の規模で、金堂の東建物は東西幅13.7 m、南北長43.05 m、金堂の西建物は東西幅12.6 m、南北長44.55 m である。東建物の西基壇と西建物の東・南基壇は瓦積基壇である。東・西回廊は幅5.3 m であり、一部のみが残存する。

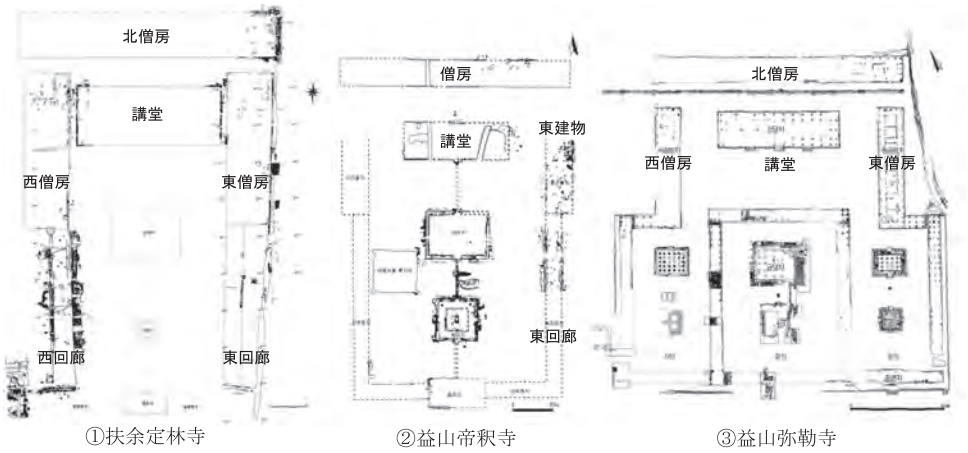
扶余・定林寺　扶余郡邑内の台地上に位置し、一塔一金堂の伽藍配置を有する。７世紀前半の造営だと推定される。講堂、北僧房、東・西・南回廊、講堂の東・西建物がある。講堂は39.1 m×16.3 m の規模で、瓦積基壇である。講堂東方の東僧房は東西幅12.1 m、南北長39.3 m、講堂西方の西僧房は、東西幅12.1 m、南北長39.3 m で、両僧房は瓦積基壇である。北僧房は北東面に基壇の一部が残存し、南北幅が約11.8 m の瓦積基壇である。東・西回廊は東西の幅が約５～６m の瓦積基壇である。南回廊は遺存状態が悪い。

益山・弥勒寺　龍華山尾根の下端に位置し、三塔三金堂の伽藍配置を有する。造営年代は武王代と推定される。講堂、東・西・北僧房、回廊がある。講堂の基壇規模は65.65 m×19.8 m で、建物は間口13間、奥行４間である。東院僧房の基壇は65.5 m×14 m の規模で、建物は18間×４間であり、西院僧房も同規模と推定される。北僧房の残存基壇規模は150 m×14 m で、建物は16間×４間と推定される。東回廊の幅が6.67 m であることから、そ



①扶余軍守里廃寺　②扶余陵山里廃寺　③扶余王興寺

第４図　韓国の長舎関連遺跡２（百済）（国立扶余文化財研究所2012）



第５図　韓国の長舎関連遺跡３（百済）（国立扶余文化財研究所2012・2013）

のほかの回廊も規模に大きな差はないと考えられる。

益山・帝釈寺　始大山南西尾根の末端に位置し、一塔一金堂の伽藍配置を有する。造営年代は７世紀前半に推定される。講堂、僧房、講堂の東・西建物、東・南回廊がある。講堂は51.8 m×18.3 m の規模であり、講堂東方の東建物の東西幅は13.2 m、僧房の南北幅は13.8 m、東回廊の東西幅は7.8 m である。

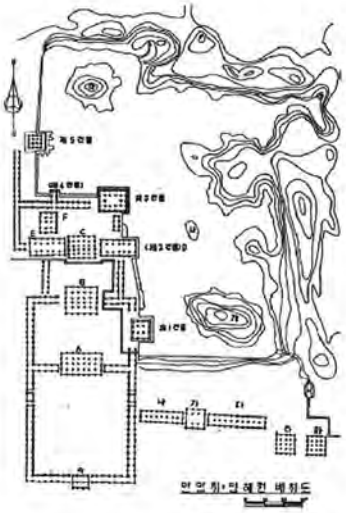
③新羅（第６～７図）

慶州・皇龍寺　月城北東の台地上に位置し、一塔三金堂の伽藍配置を有する。真興王14年（553）に創建された。東西方向に並ぶ３棟の金堂と講堂、東・西建物、東・西回廊、南回廊、中門がある。西金堂は７間×３間、33.86 m×21.90 m、中金堂は９間×４間、45.1 m×20 m、東金堂は７間×４間、30.91 m×15.38 m である。講堂の基壇規模は52.6×21.2m で、建物は９間×４間である。講堂の東方には、建物（１）－建物（２）－根石（１）－根石（２）が並んで位置する。そのなかで、建物（１）の基壇は32 m×13.8 m で、建物は６間×３間の規模である。講堂西方には、建物（１）～建物（４）が並んで位置し、建物（１）の基壇は12.8 m×14.7 m、建物は２間×３間の規模である。中門の基壇規模は26.7 m×12.6 m で、第１次中門は３間×２間である。東回廊は２間で幅は9.1 m、南回廊も同じ２間で幅7.2 m である。

慶州・月城　慶州市仁旺洞に位置する新羅の王宮で、半月の形をしていることから半月城・新月城とも呼ばれ、王が在住することから在城とも呼ばれた。内部からは、物理探査を通じて数多くの建物跡が確認された。これまでの調査によると、Ｃ地区で、南北50.88 m、東西25.44 m に囲まれた内部から多数の長舎が確認された。これらは、８世紀中頃以降の造営と推定される。北塀のすぐ内側にある東西方向に長い建物３は、16間×２間、35.9 m×4.24 m、中央に位置する建物11は７間×２間、19.1 m×5.04 m である。東・西塀からは、

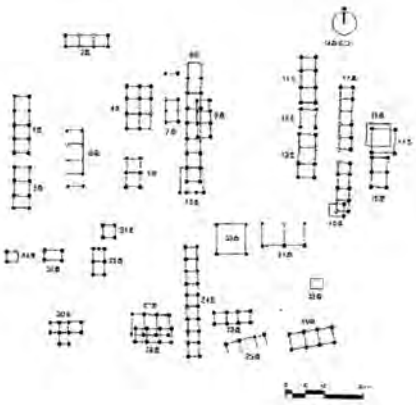
後代の南北方向に長い長舎も確認された。西塀付近の建物規模は、北から順に、17号は６間×２間、12ｍ×5.3ｍ、16号は１間×２間、5.2ｍ×3.2ｍ、14号は６間×３間、22ｍ×6.29ｍである。東塀付近の建物規模は北から順に、４号は5.7ｍ×9.5ｍ、９号は２間×２間、4.85ｍ×4.6ｍ、15号は２間×２間、3.5ｍ×5.2ｍ、12号は５間×２間、4.5ｍ×14.3ｍである。

慶州・城東洞殿廊址　北には北川が流れ、南は月城と南山を正面に眺望する地点に位置する。統一新羅時代の正宮、または北宮と推定される。殿堂５の東に長舎４、西に長舎５が南北に位置する。さらに殿堂５の西に長舎６、殿堂３の東に長舎２が南北に位置している。遺存状態から、長舎６・２は、北端で内側に折れる形態に復元できる。長舎４・５・６・２の前方には、長舎３が回廊のように東西に配置される。長舎２の右側には、殿堂１・２

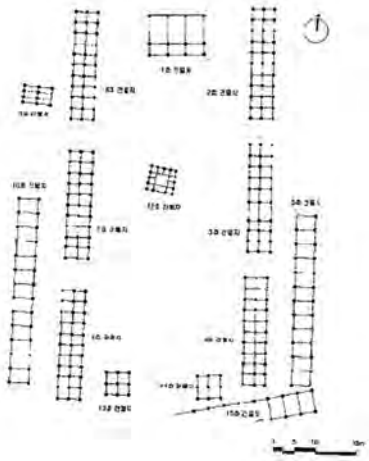


①慶州臨海殿址

②慶州月城



③慶州瞻星台南辺



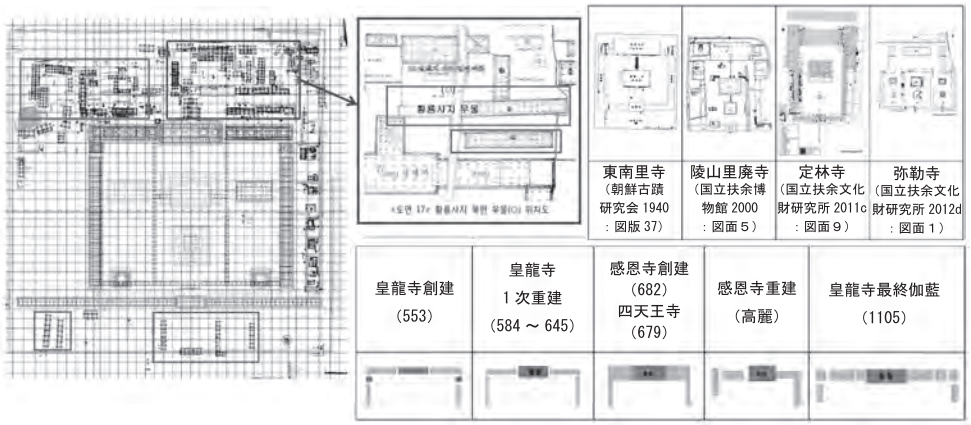
④慶州鶏林北辺

第６図　韓国の長舎関連遺跡４（新羅）

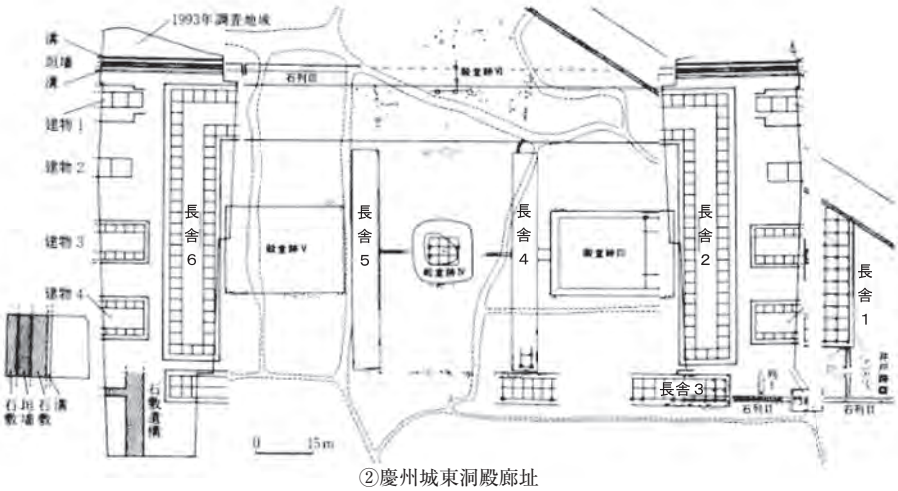
（田有泰1983、문화재청 보도자료2016.3.30、국립문화재연구소2010）

が南北に配され、さらにその右側には長舎１が南北に長軸を向けて位置している。遺存状態が良くないため正確な規模は不明である。ただし、長舎４・５は奥行１間、長舎６・２は奥行４間、長舎３は奥行２間である。長舎１は奥行が２間である可能性があるが、不明確である。

慶州・瞻星台南辺建物址　瞻星台と鶏林を経て月城に至る道路の東方に位置し、西方には鶏林北辺建物址が位置する。道路は後代に造成されたものであるため、瞻星台南辺建物址は鶏林北辺建物址と一つの建物群を形成していた可能性が指摘されている。南北に長い建物が南北に２～３基ずつ並び、東西にも不規則な間隔で配置される。建物８は南北７間、東西１間、建物24は南北９間、東西１間である。２間、または３間の建物11～13は、若干距離をおいて、南北に並ぶ。南北が５間の建物17と南北が４間の建物18も、南北に並んで配置されている。



①慶州皇龍寺と百済寺院の比較



②慶州城東洞殿廊址

第７図　韓国の長舎関連遺跡５（新羅）（이은석2016、한나래2012、李康根2013）

慶州・鶏林北辺建物址　瞻星台南辺建物址と道路を挟んで並んで位置する。鶏林北辺建物址は、瞻星台南建物址と一つの建物群を形成していた可能性が指摘されている。鶏林北辺建物址は、日本の前期難波宮（652～686年）、藤原宮朝堂院（694～710年）、平城宮中宮院（８世紀前半）の回廊式建物に類似する性格を持つと理解されている。後方中央の１号建物を挟んで両脇に、奥行２間の南北に長い建物３棟が一列に位置する。さらにその外側にも、奥行１間の建物が対称をなして位置する。すなわち、建物１の西には南北10間、東西２間の建物６～８、東には南北10間、東西２間の建物２～４が配置されている。さらには、建物７・８の西側には、南北13間、東西１間の建物10、建物３・４の東側には、南北12間、東西１間の建物５が配置されている。

慶州・臨海殿址　雁鴨池、または月池湖岸の南・西岸に隣接し、計30棟の建物が位置する。月池西岸では、FGH－13～14区、FGH－10～11区、FGH－６～７区の建物が南北に並び配される。FGH－13～14区建物の東西に奥行３間のDEF－13～14区建物とHIJ－13～14区建物が、FGH－10～11区建物の東西に奥行１間のEF－10～11区建物とHIJ－10～11区建物がある。FGH－６～７区建物の東西にも奥行１間の建物が配置されており、建物どうしは、奥行１間の東西に長い建物によって連結する。月池南岸では、間口３間、奥行３間のMN－３～４区建物を中心に、その両脇に間口８間、奥行２間の建物（KLM－３～４区）と、間口10間、奥行２間の建物（OPQR－３～４区）が並列して配されている。月池西岸の一番下の中央に配置されたFGH－６～７区は、間口７間（23 m）、奥行４間（13.2 m）の規模である。

（２）日本の主要遺跡

①近畿地方（第８～９図）

飛鳥宮　奈良盆地南部に位置する。東西約0.6 km、南北約1.3 kmの範囲に宮都と周辺施設が立ち並ぶ。遺構と遺物によって大きくⅠ～Ⅲ期に分けられるが、Ⅲ期は、さらにⅢ－A期、Ⅲ－B期に細分される。Ⅰ期は飛鳥岡本宮、Ⅱ期は飛鳥板蓋宮、Ⅲ－AあるいはⅢa期は後期飛鳥岡本宮、Ⅲ－BあるいはⅢb～c期は飛鳥浄御原宮と命名されている。宮は内郭の南区画と北区画に区分され、内郭南区画の中央区には桁行（東西）７間（20.2 m）、梁行（南北）４間（11.2 m）の正殿が置かれ、東区画には南北方向の長舎２棟が東西に並んで配置されている。内郭北区画には、東西方向の長舎が南北に並んで配置され、宮の南東方にあるエビノコ郭の内部にも長方形の正殿建物が配置された。

難波宮　古代日本の主要交通路であった瀬戸内海東端に位置する。1957年におこなわれた発掘調査により南北に長く延びる回廊が確認され、宮殿建築の様相があきらかになった。乙巳の変以後、孝徳天皇が難波に遷都し652年に前期難波宮が築かれた。686年には飛鳥に復帰したが、726年に再び難波に遷都した。それ以来783年まで後期難波宮は存続した。内

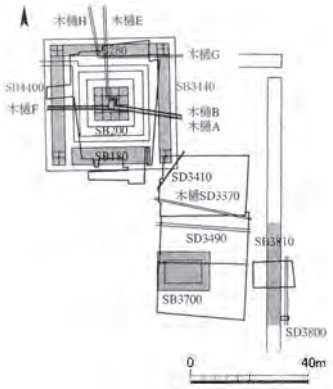
裏の正殿（前殿と後殿）を中心に置き、その両脇前方には南北に長い長舎が向き合うように配置された。その前面に広がる空間の朝堂院および朝集殿にも、南北に長く延びる長舎が対称をなして配置されている。朝堂院では後期になると、長舎の奥行が拡大する。宮の西北方と東方外郭にある西方官衙と東方官衙でも、南北あるいは東西に長く延びる長舎が確認された。

大津宮　天智天皇６年（667）には、大津へ遷都した。遷都の理由は、抵抗勢力が少ない大津で新しい政治体制を構築するためであったと考えられている。大海人皇子が反乱を起こして都を飛鳥に還したため、大津は５年余りで廃都となった。発掘調査が進んでいないため大津宮の全貌はあきらかではない。長舎としては、桁行７間、梁行４間の内裏正殿がある。正殿の背後にある東西に長い建物や、朝堂院区域で南北に延びる建物も長舎の可能性がある。

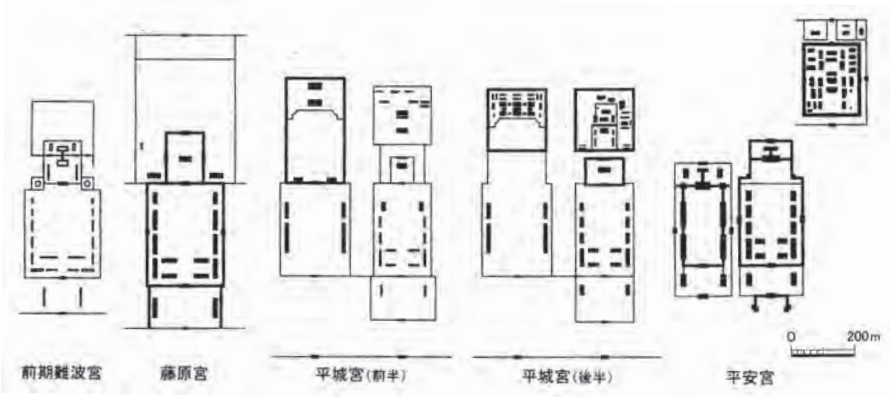
藤原宮　持統天皇が694年に飛鳥浄御原宮から藤原に遷都し、710年に平城に還るまでの宮である。周囲には条坊制が敷かれ、藤原京が造られた。ただ、藤原京という名称は文献記

①飛鳥宮（飛鳥時代）

②石神遺跡（飛鳥時代）



③水落遺跡（飛鳥時代）



④日本における古代宮都

第８図　日本の長舎関連遺跡１（近畿地方）（奈良文化財研究所2014）

録にはなく、『日本書紀』には新益京と記されている。藤原宮は東西約925 m、南北約906 mの大垣に囲まれている。宮の中心建物である大極殿には回廊が巡る。内裏地区の大極殿と、朝堂院および朝集殿の朝堂院地区には南北や東西に長い長舎がある。大極殿は調査がおこなわれていないため正確な規模は不明である。

平城宮　平城京の北端に位置する。天皇が居住する内裏と儀礼がおこなわれる大極殿院、官吏らが政務をおこなう朝堂院で構成され、東南部には宴会などが催される東院庭園が造られる。大極殿や大安殿といった正殿建物と朝堂院地区には、南北や東西に長く延びる長舎がある。内裏や宮内部の一部空間からも東西や南北方向の長舎が確認されている。特に奈良時代後半の第２次大極殿では、背後に位置する内裏空間で、中心建物を中心に置き、その両脇と前面に南北方向の長舎が対称をなして位置する。

五條野向イ遺跡　県道多武峯見瀬線の北に接する丘陵上に位置する。調査区域の西では、７世紀後半の掘立柱建物および周囲の一本柱塀、南門などが確認された。正殿と後殿、東脇殿の位置関係から、飛鳥時代から藤原期の貴族の建物と推定される。南門－正殿－後殿が南北一直線上に位置する。正殿の南東側で東脇殿も確認され、これと対称となる地点には西脇殿が存在すると推定される。

石神遺跡　飛鳥寺の北西方にあり、水落遺跡と隣接する。斉明期や天武期など、複数期の遺構が確認された。大きく東西に区画され、西には日常生活の場が置かれ、東区画には掘立柱建物、井戸、石組溝があり、迎賓館や饗宴施設と推定されている。東西辺や南北辺は長舎によって囲まれ、その内部中央にも、南北に長い建物と東西に長い建物が位置する。西区画でも、SB1900を中心に四周を区切る建物群がある。民家があるため調査が難しく全体を把握するのは困難であるが、建物の機能や性格、門施設などについて検討が必要である。

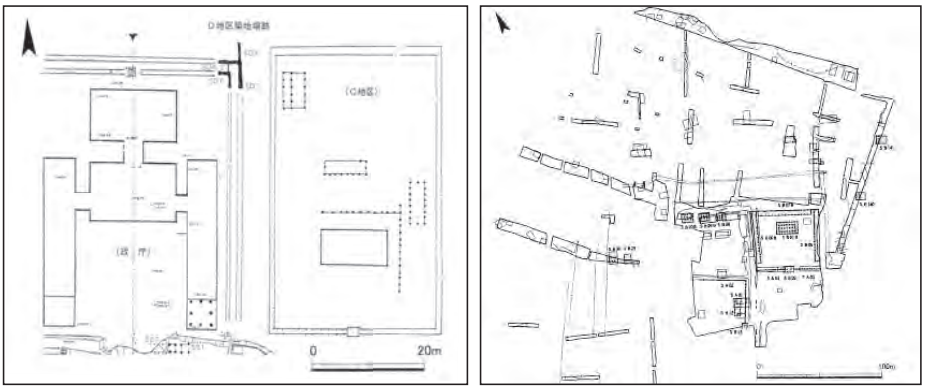
水落遺跡　飛鳥盆地の中央を流れる飛鳥川東岸に位置し、東南方には飛鳥寺が位置する。1981年以降から本格的な調査がおこなわれた。調査の結果、建物の規模や性格について『日本書紀』に登場する天智天皇十年四月二十五日条に記された楼閣とその付属施設であることが判明した。水と関連した桁行４間、梁行４間の祭祀関連建物の周囲を梁行２間の長舎が「ロ」字形に囲む。南の長舎を除く東・西・北の長舎は東北・西北隅で連結する。中央の建物内部は、木桶で引き込んだ水をラッパ状の銅管を用いて上方へ吸い上げ、最終的には黒漆塗りの木箱に流れ込む構造をなす。この南東地点でも、SB3700を中心に長舎が確認されている。

上人ケ平遺跡　古墳時代中期から後期にかけての円墳と方墳16基が確認された。奈良時代に平城宮に瓦を供給するための大規模な瓦生産工房も発見されている。工房は、古墳時代の古墳を一部壊して造られている。比較的平坦な台地上に、東西方向に延びる長舎４棟が

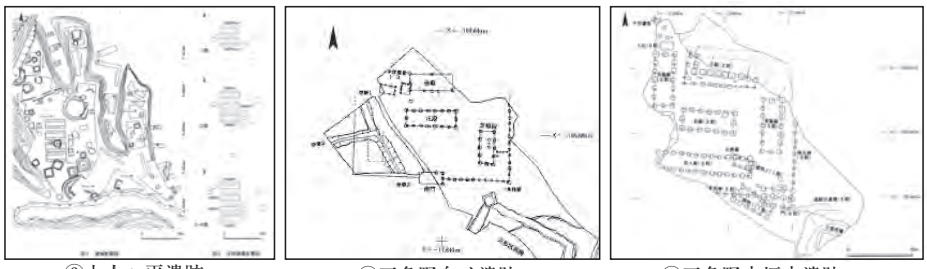
北から南に、近接して並ぶ。瓦窯は長舎形建物の南西斜面に造営された。配置の形態から考えると、長舎形の建物は、瓦成形後の乾燥場所として使用されたと推定される。

紫香楽宮　聖武天皇の天平14年（742）に営まれた宮で、藤原広嗣の乱によって聖武天皇が恭仁宮から急遽還った離宮である。天平16年（744）には再度難波宮に遷都している。1930年の調査当時は、現在の甲賀寺跡を宮推定地としていたが、のちに寺院跡であることが判明し、宮と関連する施設は、宮町遺跡で検出された。紫香楽宮の建物群は、中央にある正殿と推定される建物を中心に、その両脇に南北方向に長く延びる東・西脇殿を配する構造である。正殿と推定される建物の背後には建築を中断した跡があり、その際、門と塀が追加されたと思われる。ただし、東・西脇殿をはじめ、北門や塀も一部のみの確認のため、全体的な配置は若干異なる可能性がある。宮町遺跡から南に約１km 離れた東山遺跡の第２次発掘調査からも、東西４間であるが、南北に長い大型の長舎が確認された。南北の柱間寸法は10尺（約３m）である一方、東西の柱間寸法は15～16尺、20尺とかなり広い。建物内部にも柱穴があることから、この長舎は倉庫と推定される。

近江国府跡　政庁を囲む西領域と、中心建物を囲む東領域に分けられる。このような配置は伊勢国庁でも確認される。建物を囲む塀は別途造られている。西領域では前殿と後殿が前後に並び、前殿の両脇前方に東・西脇殿が対称に位置する。前殿、後殿、東・西脇殿は回廊によって連結する。特に東・西脇殿の北妻柱列は前殿北側柱列と柱筋を揃える。



①近江国府跡　②岡遺跡



③上人ヶ平遺跡　④五条野向イ遺跡　⑤五条野内垣内遺跡

第９図　日本の長舎関連遺跡２（近畿地方）（奈良文化財研究所2014）

久留倍官衙遺跡　三重県四日市北東部に位置する遺跡で、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。伊勢湾を臨む丘陵の頂上部から斜面にかけて位置している。飛鳥時代末から平安時代中期に運営された官衙は、大きく３期に分けられ、各期で造営方位や建物形態が異なる。墨書銘土器や木簡をはじめ蓋杯、蓋などが出土し、施釉土器も発見された。官衙関連の政庁は、飛鳥時代末から平安時代中期にわたる。桁行５間、梁行４間の政庁建物を中心に置き、その両脇に長舎が配置されており、その周囲を塀が巡る。中央には門が開く。後代には周囲に倉庫として使用された建物が位置する。政庁建物両脇の脇殿（SB444）は、長さ８間、幅２間で、柱間寸法が2.1 m 等間の建物である。

岡遺跡　水路によって区画された政庁、正倉、館などの施設が発見されたことから、奈良時代の栗太郡の官衙として知られる。古墳時代の歴代首長墓と小槻大社が付近に位置し、小槻氏の本拠地であったと推定される。中央の中心建物（SB01B）とこれを取り囲む長舎（SB05～07）、南門の配置はほかの建物群と異なる。特に、西方に位置する南北方向の長舎の造営方位は、東方と異なる。南門に取り付く塀は、造成や存続時期が若干異なると考えられる。

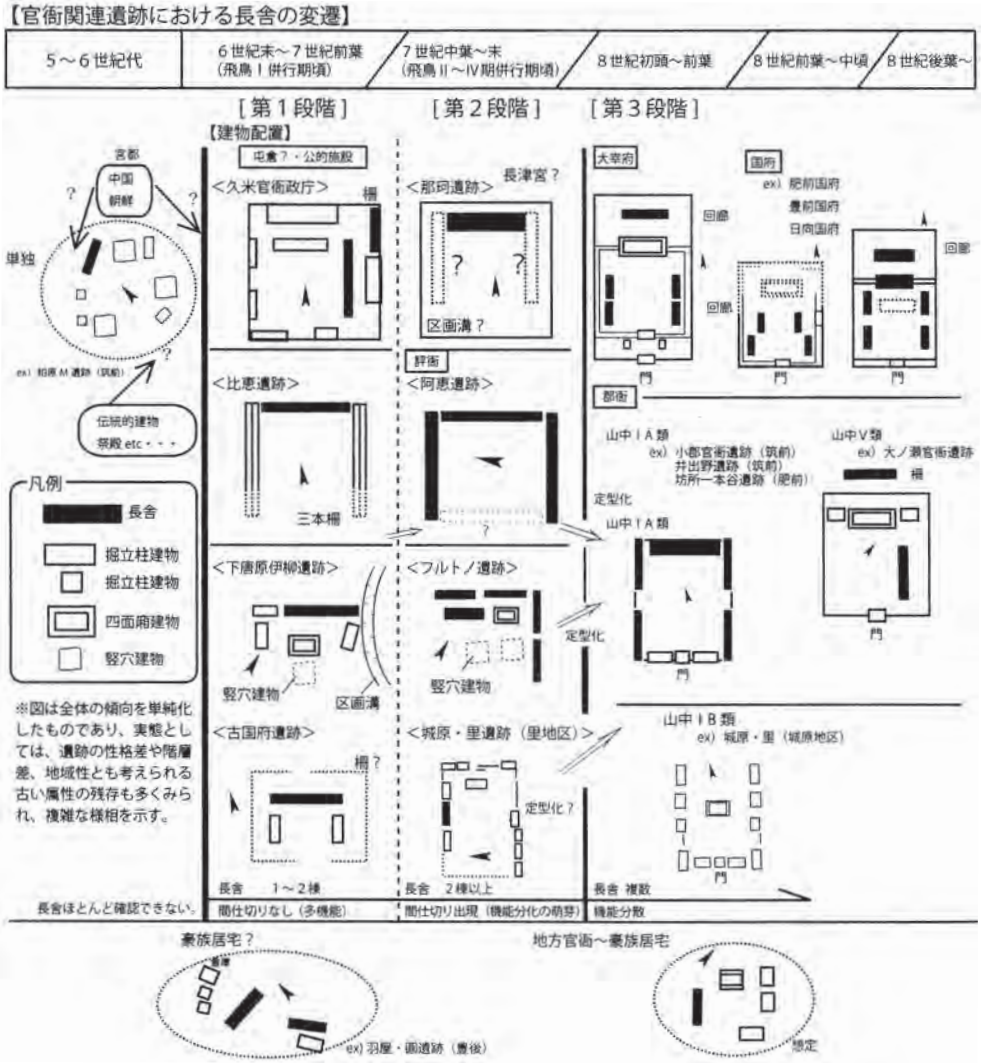
②九州地方（第10図）

大宰府正庁跡　大宰府の政務を執行する官衙で、東アジア諸国にもっとも隣接し、辺境の防衛や外交、交易の窓口として重要な役割を担った。調査の結果、３時期にわたる遺構が確認された。第１期は７世紀後半から８世紀初頭で掘立柱建物群が築かれた時期、第２期は８世紀初頭から10世紀中葉で礎石建物群が築かれた時期、第３期は10世紀中葉以降である。正殿を中心に周囲を回廊が取り囲み、回廊内部には東・西脇殿が南北に２棟ずつ並列する。正殿背後には後殿が位置する。

阿恵官衙遺跡　福岡県粕屋郡粕屋町にある官衙遺跡で、飛鳥時代から奈良時代の筑前国官衙である。調査の結果、政庁と正倉、道路遺構などが確認された。梁行２間の長舎は角張った「∩」字形を呈し、後方と東西両側に位置するが、造営方位は全体的に北へ振れる。西方は民家があるため確認できないが、遺存状態から、「ロ」字形に囲む可能性もある。

比恵遺跡　博多駅の南方にある低丘陵（標高57 m）上に位置する弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡である。６～７世紀に至ると、大型の高床式倉庫群が形成された。その配置や規模から、『日本書紀』に記される那津官家と関連する建物と推定される。桁行９間、梁行２間の中心建物を中心に、その両脇に梁行２間の長舎が配置されている。北方は民家があるため確認できないが、遺存状態から、北方には中心建物と正対する、東西に長い建物は存在しないとの見解もある。

筑後国府跡　筑後国を治める官庁で、政庁を中心に倉庫などが設置された。現在の久留米市合川町、朝妻町、御井町一帯にあたり、４時期にわたって７世紀末から約500年間余り



第10図　日本の長舎変遷図（九州地方：長直信2014）

存続した。政庁を中心に、その両脇に東・西脇殿が２棟ずつ並列する。

小郡官衙遺跡　福岡県小郡市にある古代官衙遺跡で、筑後国御原郡の郡家跡として知られる。1967年以後の調査結果、７世紀後半から８世紀後半にかけての３時期にわたる掘立柱建物などが確認された。２期の建物群は、南北方向の造営方位から東へ40°振れる。建物群は東・西・北の３群に分かれ、東側は「コ」字形に配置された郡庁とみられる建物、西側は厨、北側は倉と推定されている。比恵遺跡や阿恵遺跡と異なり、長舎は一つの建物ではなく２～３棟が分かれて位置する。政庁と推定される建物はいまだ確認されていない。

大ノ瀬官衙遺跡　周防灘に面する福岡県東端の築城郡に位置する古代官衙遺跡である。1995年度の調査により、東西約53ｍ、南北約59ｍの方形柵列に囲まれた内部から、複数

の建物が確認された。桁行７間、梁行４間の正殿と推定される建物を中心に、その東前方に南北12間、東西２間の長舎が配置される。正殿両脇には、各１棟の建物が存在する可能性もある。

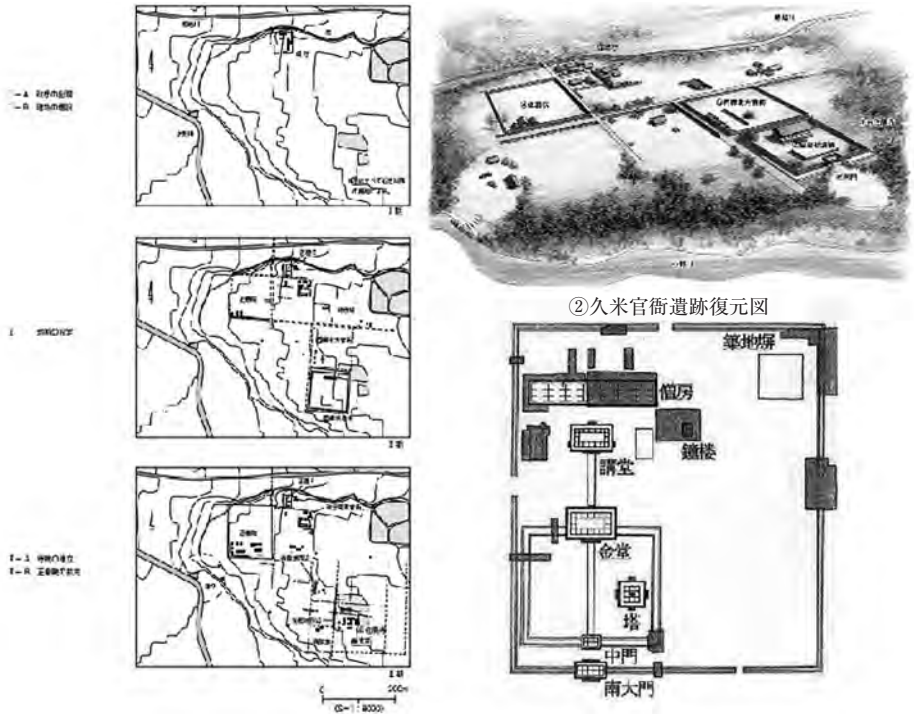
③中国・四国地方（第11図）

伯耆国府跡　鳥取県倉吉市西方の丘陵に位置する。国府関連遺跡としては、国庁跡、伯耆国分寺跡、法華寺畑遺跡、不入岡遺跡などがある。伯耆国庁跡は東西273ｍ、南北227ｍの規模で、内郭の政庁区域、外郭の官衙区域からなる。内郭には前殿、正殿、後殿が南北に並ぶ。政庁は大きく４時期にわたることが知られている。１～２期は正殿の前・背面に前殿と後殿があったが、３～４期には正殿前面の前殿がなくなるかわりに、石敷施設が設けられた。北に北方官衙、西に西方官衙も位置する。官衙関連施設の調査は未完了のため、全体的な様相を把握するのは難しい。正殿の前・背面に、極端といえるほど東西に長い前殿と後殿が配置される点が特異である。また、正殿両脇にある南北方向の長舎から一定の距離をおいた建物があり、楼閣とみられている。

不入岡遺跡　政庁のある丘陵末端部に位置し、法華寺畑遺跡から北西約１kmの距離にある。７世紀後半から９世紀にわたり50棟を超える掘立柱建物と木柵などが設けられた。３時期に分けられ、２期には、正殿の役割を担う中心建物の後方や両脇に長舎が配置された。ここから西に約50ｍの地点には、東西にやや長い建物が並んで位置する。３期には、東西方向の長舎が南北に10棟並び、かなり独特な建物配置をみせる。

古志本郷遺跡　７世紀末から８世紀初頭の官衙関連遺跡である。川沿いの道路工事区間を発掘調査した際に確認された。周辺地域に対する発掘調査がなされていないため、全体像は不明である。建物群の造営方位が異なるため、少なくとも２時期にわたって建物群が形成されたことが確認されている。このような変化は、郡庁の中心地や機能に変化が起きたことに起因すると考えられる。海岸に沿って形成された幹線道路の方向にあわせて長舎が配置されている。長舎とともに倉庫も多数発見され、交通の要衝に官衙の中心地が形成されたことが推察される。周辺地域に対する調査が進んでいない関係で官衙関連施設の規模や配置、構造の全体像は不明である。官衙の中心建物と関連する長舎のほかにも、一方向に長い建物が２棟も確認されている。このような建物は、工房関連の作業場である可能性が高い。

郡垣遺跡　７～８世紀の官衙関連遺跡である。民家が畑として耕作している地点で部分的なトレンチ調査を実施した結果、確認された。しかし、周辺地域に対する発掘調査がなされていないため、全体像の把握は難しい。東西や南北に長い長舎（SB１・２・32、SA16）が検出され、建物の構造と配置などから郡庁官衙関連建物と判断される。建物の造営方位は南北方向から約29°振れているが、これは周りの古代交通路と関係しているとみら



①久米官衙遺跡群　②久米官衙遺跡復元図　③讃岐国分寺跡配置図

第11図　日本の長舎関連遺跡３（中国・四国地方）（松山市教育委員会ほか2011、https : //www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kosodate/bunka/kokubunjiato/rekish_upR21210.html を改変）

れ、島根県の官衙建物で共通する現象である。

久米官衙遺跡群　1967年、来住廃寺の発掘調査がきっかけとなり遺跡の様相が判明した。久米官衙遺跡群は、来住廃寺をはじめとして回廊状遺構、回廊北方官衙、正庁、正倉院に分けられ、時期は３期に大別される。Ⅰ期は６世紀末葉から７世紀初頭で、正庁が建てられ運営された時期である。Ⅱ期は７世紀中葉から後半で、回廊状遺構や方格地割が造成された時期である。Ⅲ期は７世紀後半から８世紀で、正倉院が造られた時期である。正庁は来住台地北端に位置し、官衙の中心施設である。正庁は、中心建物である前殿と後殿と推定される建物と、その東方に南北に長い長舎が配置された構造である。後殿と東側長舎は、一重の塀で囲まれる。回廊状遺構は一辺約110ｍの方形回廊によって区画される。回廊には、２列の柱穴が並び、南面には門が開く。回廊内部の前方には「Ｌ」字形の塀が、後方には３間の大型正殿が位置している。回廊西北部には、ほかの区間に比べて柱穴が重複する箇所があるが、西北からの風に備えて柱を増やす過程で生じたとみられる。

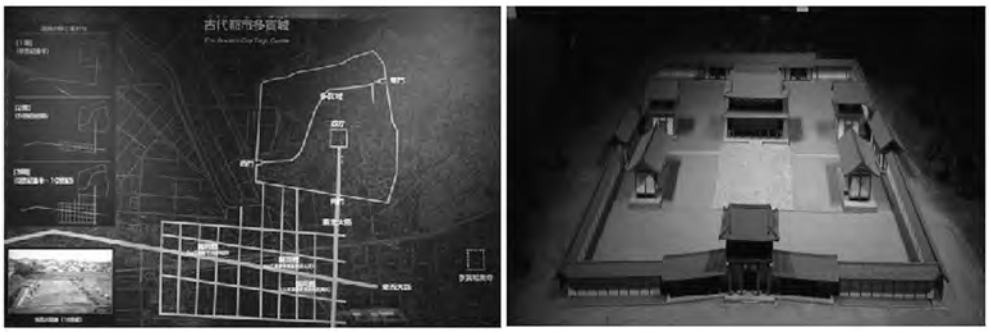
讃岐国府跡　讃岐国府は奈良時代に地方統治の目的のもと、南海道に設置された国府の一つである。平安時代に一部が縮小し、のちに廃止された。讃岐国府跡は約５～６kmの範囲に集中しており、立地上は陸路と海路を結ぶ交通の要衝地に位置している。讃岐国府の

位置は、古代道路や土地区画などにもとづき、大まかに開法寺跡を含んだ地域と考えられているが、その中心建物である正庁は確認されていない。第37次調査では、南北方向に長い建物が確認され、その東側からは２条の溝状遺構も発見された。建物全体の規模はあきらかではないが、遺存状況から倉庫の可能性がある。

讃岐国分寺跡　香川県高松市西部に位置し、四国八十八ヵ所札所の80番札所にあたる。塔は東に位置し、金堂は北にある。金堂の真南には中門が設けられ、金堂の左右は回廊が巡る。寺院の中心建物は西に偏っており、寺院全体は塀によって囲まれる。塀の規模は東西約220 m、南北約240 m である。塀内部に東側は民家が立ち並んでいるため、正確な建物配置はわからない。創建時期は、聖武天皇による地方国府の造成時期である８世紀中葉とみられる。創建当時の塔、金堂、僧房などは、現在礎石が残っているだけで、創建時の講堂は、現在本堂として使われている。伽藍配置は、南門－中門－金堂－講堂が南北に並び、金堂と中門を巡る区画内の東方に塔が配置される大官大寺式である。創建時の金堂と講堂の規模は、礎石の遺存状態から桁行７間、梁行４間で、吹き放ち構造である。僧房は桁行21間、梁行３間で、桁行は３間ごとに、７つの壁によって分割される。特に、中央の桁行３間、梁行３間の空間は、食堂など共同利用施設として活用されたと推定される。講堂を中心とした南北に長い長舎（掘立柱建物）と東西に長い長舎（僧房）の配置は、地方官衙や国府の中心建物の配置と類似する。僧房が７つの空間に区画される形態は、韓国の百済や新羅の一棟二室構造の建物からもうかがうことができる。ただし韓国では、建物内部での部屋と部屋との間の空間は、出入空間として活用されている点で異なる。

④東北地方（第12図）

秋田城跡　秋田城は出羽国の秋田に所在した古代の城柵で、現在は史跡として管理されている。８世紀当時の日本中央政府が東北地方の蝦夷を鎮圧するため、712年に出羽郡を出羽国に昇格させて秋田城を築いた。830年の大地震で一部が破壊し、以降数回にわたって反乱が起き、一部が被害を受けた。1050年を前後に、前九年の役の影響により衰退した。



①多賀城配置図　　②多賀城城柵

第12図　日本の長舎関連遺跡４（東北地方）（筆者撮影）

奈良時代におこなわれた渤海との交流の際に、渤海の使者が秋田城に泊まったという記録が伝わっている。このような点から、秋田城は渤海の使臣を迎え入れるための迎賓館として機能したとみられる。正殿を中心に、両脇に西・東脇殿が並ぶ。正殿などの中心施設は、Ⅰ期からⅥ期に至るまで大きく変化することはなかったが、柱構造は、Ⅰ～Ⅴ期までは掘立柱であったが、Ⅵ期には礎石に変わる。

多賀城跡　多賀城は宮城県多賀城市にある古代の城柵で、特別史跡に指定され管理されている。奈良時代から平安時代に陸奥国府と鎮守府が置かれ、11世紀半ばまで東北地方の政治、文化、軍事の中心地であった。多賀城は大和政権が蝦夷を制圧するため、その境界に設置した城柵である。724年に築かれ、８世紀初頭から10世紀中葉にかけて４期にわたって造営された。多賀城の造営とともにおこなわれた城柵、官衙、付属寺院の設置・整備は、律令制支配の強化を図るための措置と思われる。地方官衙の中核をなす政庁および周辺建物の配置は、益山王宮里遺跡の正殿と西長舎との配置関係と比較することができる。外郭は東辺約1000 m、西辺約700 m、南辺約880 m、北辺約860 m の築地塀や柵が巡る。外郭の中心からやや南方に東西約106 m、南北約170 m の築地塀で囲まれた政庁区域が位置する。正殿を中心に両脇に西・東脇殿２棟が南北に位置し、正殿後方には後殿が位置する。

２．鳥形土製品

（１）鳥関連遺物

銅剣の鎬に鳥足文様を施す例があるが、これは公人や使用集団の象徴として用いられた。慶北大学校所蔵品や扶余笠浦里、長水南陽里３号出土銅剣でみられる[25]。また、銅剣柄の装飾には鳥が表現されるものがあり、銅鏡にも鳥の姿が施されている。崇実大学校所蔵の剣把頭飾は、２羽の鴨が背中合わせの形で、慶山林堂Ｅ地区132号、平壌土城洞486号、大邱池山洞、伝平壌、大邱飛山洞などから出土した触角式銅剣の把頭飾（剣把頭飾）には、２羽の鳥が向かい合う装飾がある（第13図）。このような触角式銅剣は、吉林地域を中心に朝鮮半島や日本にも分布している。大邱坪里洞、永川漁隠洞、金海会峴里貝塚などで出

第13図　韓国における鳥関連金属遺物（복천박물관2006、국립김해박물관2004）

土した虺龍文鏡には、螭龍の上下に鳥が描かれており、金海内徳里19号木棺墓出土鳥文博局鏡や金海大成洞23号、伝良洞里出土品として知られる四神博局鏡には、四神や瑞獣とともに鳥が表現されている[26]。

固城東外洞遺跡の儀礼関連竪穴、霊光水洞の墓から鳥文青銅器が出土している（第13図）。固城東外洞遺跡の鳥文青銅器は３世紀以降のもので、２羽の鳥が向かい合っているのに対し、２世紀の霊光水洞の鳥文青銅器は、「山」字形で、飛んでいる鳥を表現している。このような青銅器は、倣製鏡や玉類などとともに墓から出土することから、儀器であり、被葬者は祭儀に関わる身分であったと推定される。

青銅器時代から三韓時代にかけては、住居跡、竪穴遺構、溝状遺構から確認されている。宝城金坪貝塚からは、鳥の頭と推定される土偶片が出土した。特に、この土偶片は鳥文青銅器に描かれた鳥の頭と酷似する[27]。

ところで、３～４世紀の半島南部地域では鳥を形象化した土器が出現する。馬韓の鳥形土器は簡略化された表現で、周溝墓、木棺墓、甕棺墓などの墳墓だけでなく、住居跡からも出土する[28]。これに対し、弁韓・辰韓の鳥形土器は鴨形土器が主流で、詳細で写実的に描写されている。

馬韓の鳥形土器は、鳥足文土器とともに馬韓を特徴づける遺物で、羅州龍虎、益山間村里、霊岩金渓里、高敞礼智里、舒川烏石里遺跡、海南郡谷里貝塚、全州松川洞など、馬韓の墳墓、貝塚、住居跡などから出土している。馬韓の鳥形土器は、逆三角形の胴部に上から圧着されたような形を呈する。胴上部には円筒形の管があり、両側に突き出た肩部分は片方が尖り、もう片方は注口のように孔が穿たれ、あたかも動物の頭と尾を形象化したような形である。底部には脚台は付かず、扁平底である。馬韓の鳥形土器に表現される鳥の

第14図　韓国における鳥関連遺物（국립김해박물관2004、복천박물관2006、국립나주박물관・국립나주문화재연구소・한국문화유산협회2020）

種類は確実ではないが、鴨である可能性が高い。霊光群洞Ｂ－３号墳出土土器の胴部に鴨の模様が刻まれており、同時期の弁韓・辰韓でも鴨形土器が製作されていたからである（第14図）。このように、鴨を表現する形態は馬韓と弁韓・辰韓で違いをみせるが、形態的なモチーフに大きな差はない。すなわち、円筒形の管や片方が尖り、もう片方は注口のように孔が穿たれる形態という要素が共通している。特に、水を入れる管と、これを注ぐ口があることから、儀礼において水と関連した道具として用いられたと推定される。

弁韓・辰韓では、鳥形土器が主に墳墓から出土する（第14図）。慶山林堂Ｅ１－３号、蔚山下岱46号、蔚山中山里ID－15号、蔚山大谷カ－５号、釜山福泉洞38号墳・86号墳、慶州舎羅里55号、金海大成洞周辺Ⅱ地区24号、大邱鳳舞洞、浦項玉城里73号墳、咸安末伊山34号墳など、大邱、慶山、慶州、蔚山、釜山、金海などの洛東江中・下流地域を中心に、３～５世紀の遺跡で確認される[29]。弁韓・辰韓の鳥形土器は、形態によって鴨形土器、鶏形土器、鳳凰形土器、瑞鳥形土器などと呼ばれ、瓦質と陶質に分けられる。

瓦質の鳥形土器は、鳥の形状をした頭に、長いくちばし、口、鼻を表現し、側面には円形の耳または目を付す。胴部には円筒形の注入口があり、尾には注出口が付く。特に、馬韓の鳥形土器とは異なり、脚台が付く。陶質の鳥形土器は、形態は瓦質とほぼ同じであるが、細部表現に若干の違いがある。翼は縮小あるいは省略され、全体的に小型である。羽根を描写、あるいは耳飾状の小型装飾具を付すなどの装飾性が高く、写実的で、形態も多彩である。

馬韓の鳥形土器が墳墓以外に住居跡や貝塚などからも出土する反面、弁韓・辰韓の鳥形土器は大部分が墓から出土する。このことから、古代人は鳥が死者の魂をあの世に導く存在として信じていたと推察される。

そして、甲冑にも鳥の羽根や鳥の形をあしらった例があり、４世紀以降の釜山福泉洞86号墳、金海大成洞２号墳のような大型木槨墓で出土する[30]。鳥や羽飾りで装飾した祭司長が、自身の政治力を誇示する意図で用いられたと考えられる。また、環頭に鳳凰が装飾される環頭大刀は、公州武寧王陵、慶州天馬塚、陜川玉田Ｍ３号墳などで出土している。鳳凰は古代中国の伝説に登場する想像上の鳥で、キリン、カメ、龍とともに、四霊または四瑞であり、天子を美化する象徴として認識されてきた[31]。このような龍鳳文環頭大刀は、５世紀後半から６世紀前半頃に主に百済、新羅、加耶の王陵級の墳墓から出土することから、王権を象徴する遺物とみられる。

一方、三国時代になると、鳥や鳥の羽根をモチーフにした遺物が登場する。先史時代の祭祀長が身に着けた鳥の羽根は、王権を象徴する金冠の垂飾に変わり、土器脚部や外面には、鳥全体、またはその一部をかたどった装飾が付される例もある。

慶州蓀谷洞遺跡Ｃ－１－２－２号石槨墓の周溝から出土した角杯脚部に付された土偶は、

有刺利器の鳥と形が近似する[32]。浦項鶴川里78号・237号墓出土長頸壺の胴部には、鳥が沈線で描かれている。また、柄を挿し込むソケット部を持ち、鉄板両側面に突起（刺）が付く有刺利器は、３～６世紀の加耶・新羅地域で多く出土する。この有刺利器にも鳥形の突起が装飾されている[33]。陜川玉田古墳群出土の鳥形装飾付有刺利器は、鉄板の端を切り取って鳥形を製作、あるいは別途製作した鳥形の鉄板を鋲で固定したものである（第13図）。鳥の形状は丸いくちばしに、尾は胴体より上を向く。咸安道項里遺跡から出土した鳥形装飾付有刺利器は、先端部の２羽の鳥は向かい合わせで配置し、両側面では、４羽の鳥が左右対称の位置に付されている。このような有刺利器で表現される鳥は、固城東外洞出土鳥文青銅器と類似し、鳥を崇拝していた古代人の思想が込められた象徴性の強い遺物として評価できる[34]。

鳥の冠羽で装飾した金・銀製冠飾は、高句麗、百済、新羅でみられる。高句麗の禹山下3560号で出土した金製冠飾は、鳥の羽根が写実的に表現されており、清岩里土城で出土した金冠は、細長方形の金板を捩じることで鳥の羽根を表現した。特に、清岩里土城出土金冠と類似する羽根表現は、義城塔里、伝忠南、皇南大塚南墳などからもみられる。また、慶州瑞鳳塚出土金冠からは、翼をたたんだ３羽の鳥の装飾が確認される。この鳥の胴体はふっくらし、頭には冠のような羽根が生えている。

そして梁山金鳥塚からは、金製の鳥足が２点発見され、蓋のつまみに鳥を装飾した青銅鐎斗も出土した。

鳥は食糧資源を超えた象徴性を持つ装飾物として利用されてきた[35]。鳥や鳥の羽根を形象化したり、これを用いた儀器が三国時代から多様に製作され、葬送儀礼に用いられてきた。鳥の形を写実的に表した事例としては、扶余陵山里廃寺から出土した百済金銅大香炉が挙げられる。香炉の蓋と胴部に複数の鳥が表現されている。最頂部には１羽の鳳凰がとまっており、その下に５羽の鳥がそれぞれ山頂にとまり、最頂部の鳳凰を見上げている。鳳凰は飛翔するかのように翼を広げており、長い尾とトサカ、くちばし、羽根などが写実的に表現されている。下の５羽の鳥は、様々な姿で、躍動感にあふれる。蓋下部には、長い尾の鳥と一本の角が生えた鳥が向かい合っている。香炉胴部の蓮の葉には、翼が生えた動物が表現されており、これは鳥類と推測される。

扶余宮南池からも鳥形木製品が出土しているが、足と尾はなく、翼と胴だけが彫刻されている（第14図）。特に尾の部分が「U」字形に掘り込まれていることから、杖のようなものに装着していた可能性がある[36]。ソウル夢村土城竪穴85－NE１－17出土遺物のなかにも木製の鳥が確認されている（第14図）。長さ９cmと小型で、何かに装着した痕跡がないことから、お守りや装飾品の用途で用いられたと推定される。

3．塑像[37]

塑像は、日韓をはじめとして中国でも多く出土している。しかしながら、完形で発見される例はほぼなく、仏像の名称や安置形態の推定が非常に難しい。しかも、火災による変形で、本来の製作方法、特に焼成の有無を判断するのは大変難しい。

（1）韓国の主要遺跡

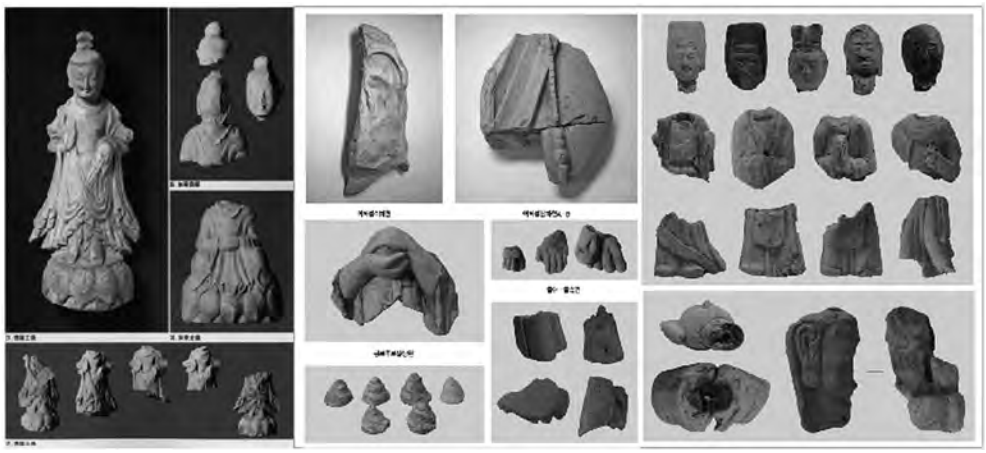
①高句麗（第15図）

平安南道平原郡徳浦里万徳山付近の元五里寺から塑像が出土しており、100数点の禅定印仏坐像と200数点の菩薩立像が残存する[38]。平壌市楽浪区域土城里からは陶笵の出土が知られている。

②百済（第16～17図）

扶余扶蘇山廃寺から出土した塑像が、百済で最初に知られた例である。1942年、米田美代治、藤澤一夫らによって塑像片が壁画片とともに発見された[39]。以後、藤澤一夫によって扶余旧衙里一帯の寺院で発掘調査がおこなわれ、大量の塑像が発見された[40]。1964年に扶余金剛寺および臨江寺、1971年には扶余青陽汪津里窯址から塑像が出土した。1979年には扶余定林寺の発掘調査で大量の塑像が出土し、人々の関心を集めた。1986年には青陽本義里窯址から塑造による大型の仏像台座が発見され、1995年には扶余陵山里廃寺の発掘調査で大量の塑像片が出土した。

扶余地域において、塑像が出土した代表的な遺跡として扶余定林寺を挙げることができる。その大部分が西回廊と南回廊隅の大土坑からで、赤色焼土、瓦片とともに発見された。土坑の規模は、南北長9.5 m、東西幅2.8 m、深さ約1.2 m で、ここから160数点の塑像が出土した。定林寺の塑像は大型品はなく、中・小型塑像や情景塑像の破片が主に出土した。



①平壌元五里寺（高句麗）　②扶余定林寺（百済）

第15図　韓国の塑像１（高句麗と百済）（飛鳥資料館1985、이병호2013）

①益山帝釈寺址廃棄遺跡出土塑像

②益山弥勒寺出土塑像

③益山弥勒寺出土土製螺髪

④益山王宮里遺跡出土土製螺髪

第16図　韓国の塑像２（百済）（이병호2013）

①扶余陵山里廃寺

②扶余扶蘇山廃寺

③扶余臨江寺

④扶余旧衙里寺

⑤青陽本義里瓦窯址

第17図　韓国の塑像３（百済）

（円光大学校博物館2006、国立扶余文化財研究所2019、이병호2013、国立扶余文化財研究所2008）

韓国では塑像は、益山地域で2003～2004年にかけておこなわれた帝釈寺址廃棄遺跡の試掘調査で発見されるまでは、それほど関心を持たれなかった[41]。実際は、1980年におこなわれた益山弥勒寺の発掘調査においても、塑像片と磚仏片が少量ではあるが確認されてはいた。益山帝釈寺址廃棄遺跡で出土した塑像は、天部像、悪鬼像などの新たな資料が発見されたことで、多くの関心が寄せられた。しかしながら、仏頭像の出土は少なく破片が多かったため、尊像名を比定するまでには至らない場合が多かった。2016年におこなわれた

①慶州四天王寺　②慶州錫杖寺　③慶州皇龍寺　④慶州陵寺塔

第18図　韓国の塑像４（新羅）（国立慶州文化財研究所2012）

益山帝釈寺址廃棄遺跡の発掘調査でも大量の塑像が出土し、塑像廃棄過程における新たな資料が確認された。益山王宮里遺跡からも塑造螺髪が１点出土した[42]。

益山帝釈寺址廃棄遺跡は、2003～2004年におこなわれた２度にわたる試掘調査で、塑像（仏・菩薩・天部像類、神将像類、悪鬼・動物像類）、５種類の蓮華文軒丸瓦、壁体片（包壁体、灰壁体など）、葺き土などが大量に出土したことで、瓦窯ではなく「帝釈寺址廃棄遺跡」であることが判明した[43]。出土した塑像は、仏・菩薩・天部像類、神将像類、悪鬼・動物像類、そのほかに大別されるが、大部分が小片であるため、塑像の正確な形状や型式の把握は難しい。

③新羅（第18図）

慶州地域において塑像が出土した代表的な遺跡は、四天王寺、皇龍寺、錫杖寺、陵只塔などを挙げることができる[44]。四天王寺から出土した塑像として、緑釉神将壁磚がある。

慶州皇龍寺では、中門付近から14点の塑像片が出土した[45]。そのすべてに白色の彩色痕が残る。形態や製作技法などから、扶余定林寺や益山帝釈寺址廃棄遺跡のものと酷似する。皇龍寺でも四天王寺の緑釉神将壁磚に似た形態の力士像壁磚が出土している。

慶州錫杖寺でおこなわれた1986年、1992年の発掘調査では、「縁起法頌」銘磚をはじめとして数十点の塔像文磚とともに多数の塑像が出土した。このなかには、神将像や菩薩像と推定される塑像も含まれていた。

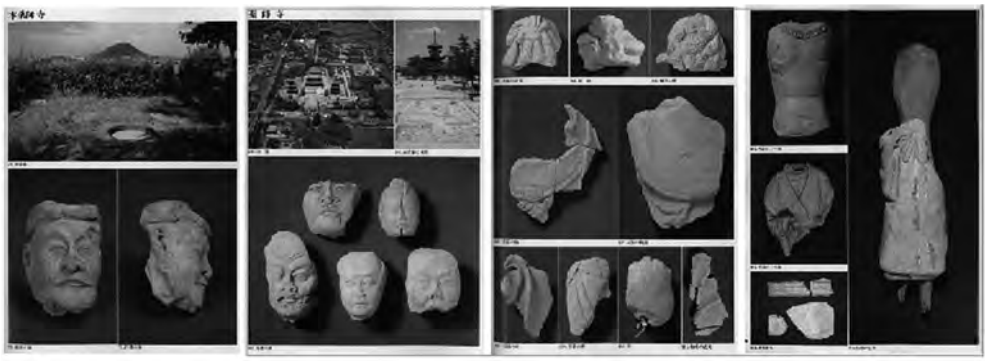
慶州陵只塔で出土した塑造仏像は、長台石を積み上げた６段の方壇形石塔基底部の基壇、東西南北四面に、１躯ずつ据えられていたとみられる。４躯の塑像仏像は高さが2.5m に達すると推定され、部位別に成形し、焼成した後に組み合わせて製作されたと推定される。

（２）日本の主要遺跡

①川原寺と川原寺裏山遺跡（第19図）

川原寺は飛鳥時代の天武期に造営され、飛鳥寺、大官大寺とともに３大寺院として知られている[46]。飛鳥寺と異なり、創建目的や発願者の記録は伝わっていない。伽藍配置は、

第19図　日本の塑像１（川原寺および川原寺裏山遺跡）（飛鳥資料館1985）



①本薬師寺（飛鳥時代）　②薬師寺（奈良時代）

第20図　日本の塑像２（本薬師寺および薬師寺）（飛鳥資料館1985）

中門を通ると東に塔が、西に西金堂があり、その後方に、中金堂と講堂が順に配置された一塔二金堂式で、回廊が中門と中金堂を巡る。講堂の周りを囲むように僧房があり、その内部に経蔵と鐘楼が位置する。

1974年１月、関西大学が寺院裏に位置する板蓋神社の断崖面の発掘調査をおこなった際、大量の三尊磚仏（長さ22.5 cm、幅17.5 cm、厚さ2.5 cm）と大量の塑像片が出土した。これにより、この地点（川原寺裏山遺跡）は、川原寺が火災で焼失した後、その廃棄物を捨てた場所であることが確認された。

川原寺の裏に位置する板蓋神社西斜面の土坑からは、多数の磚仏と緑釉片、如来・菩薩・天部・俗形・獣などの塑像片が出土した。これらは本来、川原寺の仏殿に安置されていたものであったと推定される。

天部像の胴体片のなかには、腕部分の芯材として、木芯ではなく銅芯を用いたものもあり、数点が出土している。このような例は、益山帝釈寺址廃棄遺跡では確認されていない。天部像の肩や足片、菩薩像片のなかには、彩色されたものがある。益山帝釈寺址廃棄遺跡から出土した塑像には、菩薩像の手の破片があり、爪部分に彩色の痕跡が確認されている。

天部像の腰部分の破片のなかには、冑を身に着けた武人の形をした塑像がある。益山帝釈寺址廃棄遺跡からも肩甲や羽根が表現された塑像も確認されており、両者の関係を検討することができる。

川原寺裏山遺跡の塑像は、帝釈寺と帝釈寺址廃棄遺跡との関係を説明する上で重要な比較資料であるといえる。塑像の製作技法と関連しては、芯材に銅芯が確認されたことで、乾燥式あるいは焼成式の比較資料として重要である。ただ、磚仏の出土状況に違いがみられる。

②薬師寺（第20図）

奈良市に所在する寺院で、天武天皇９年（680）に天武天皇が皇后の病気治癒を祈願して藤原京に建立したが、平城京への遷都にともない、薬師寺も移転したことが知られている。これにより、飛鳥の薬師寺は本薬師寺、奈良の薬師寺は新薬師寺とも呼ばれる。ところが、1990年代におこなわれた飛鳥本薬師寺の発掘調査により、２つの薬師寺が併存する時期もあったことが判明した。

新薬師寺の塑像は、西塔周辺、回廊東南隅、中門などの発掘調査で出土した[47]。東塔からも伝世品とみられる塑像が160点以上出土している。東塔出土の主な塑像として、立像、坐像および頭部片、動物形の塑像などがある。特に、俗形の心木１点がほぼ完形で残存しており、焼成式ではなく乾燥式塑像の製作技法がうかがえる遺物である。

塑像は、侍者の顔、菩薩の宝髻、獅子の髪、菩薩の胸部、天部の上半身・胸部・耳部分・拳部分、如来の衣文などが注目される。胎土は精選された粘土に細かい砂粒が少量混じる。特に心木に塗る粘土と外面を仕上げる粘土の間には確固とした違いがあり、外面を仕上げる粘土はより精選されたものである。川原寺裏山遺跡出土例と同様、心木として銅芯が用いられたことが天部像の拳部分で確認される。このことから、塑像のもっとも中心となる部分には木芯を用い、手、腕、肩などは銅芯を用いる場合があったと考えられる。

③馬場南遺跡

馬場南遺跡は奈良時代の８世紀中葉から後葉にかけての遺跡で、平城宮北方の低い山の斜面から、塔、礼堂、仏堂と推定される複数の建物遺構が確認された。遺跡からは「神雄寺」、「神尾寺」銘の墨書土器が出土し、神雄寺との関連がうかがえる。また、『万葉集』の歌が記された木簡も出土し注目される。

塑像は、仏堂と推定される礎石建物の中心部から、一定の範囲にわたり大量に出土した。出土状況から、須弥壇のような壇状施設に安置されていたものが、火災で破損したと推定される。磚仏片、塑像の顔・頭・鼻部分の破片が大量に出土した。特に、塑像の顔部分の瞳からはガラス成分が溶けて流れた痕跡が確認された。同様の痕跡は、益山帝釈寺址廃棄遺跡で出土した塑造悪鬼像、川原寺裏山遺跡で出土した迦楼羅頭部からも確認されている。

塑像の製作技法は乾燥式と考えられ、胎土は薬師寺出土の塑像と酷似する。また、薬師寺、川原寺裏山遺跡などでみられた銅芯も確認された。出土した塑像は小片であり、尊像名が確定できないものが大部分である。特に、鼻と推定される塑像片が大量に確認されたことから、8世紀代における塑像の尊像がもつ特徴を把握する上での重要な資料である。

馬場南遺跡の塑像は、芯材の形態や製作方式、銅芯の使用、胎土などにおいて（平城）薬師寺と極めて類似する特徴をみせている。さらに馬場南遺跡は、恭仁京と関連して注目を集めているだけでなく、仏堂と推定される礎石建物から塑像が出土したことで、塑像の安置形態を知る重要な比較資料として評価される。

④定林寺跡（第21図）

定林寺跡は明日香村立部の西に広がる丘陵に位置する[48]。寺域内からは塔跡が確認され、鎌倉時代に築かれた講堂の跡も残るが、中門や回廊などは不明である。伽藍配置は、西に塔、東に金堂を配置した、法隆寺式に類似すると考えられる。

塑像は塔心礎石の被覆土から発見された。火災により赤橙色を呈する菩薩像の顔面部には、髪の毛が表現され、花飾りの宝冠が残る。ほかにも、表採した数点の塑像片があるが、正確な形状はわからない。

定林寺跡から出土した塑像は、日本で出土する既存の塑像とは異なる胎土を用いている。このような様相は、益山帝釈寺址廃棄遺跡の塑像と類似する。

⑤斎尾廃寺（第21図）

斎尾廃寺は、鳥取県東伯郡琴浦町槻下斎尾に位置する奈良時代の寺院である[49]。1933年に発掘調査がおこなわれ、西に塔、東に金堂、北に講堂が位置する伽藍配置が確認された。

金堂から東に10ｍほど離れた地点から、磚仏、塑像が大量に出土した。塑像がかなり大型であることから、金堂は1尺ほどの塑像が安置された大仏殿であったと推測される。塑像には如来像の顔、菩薩像の唇、菩薩像の宝髻、螺髪、足の破片などがあり、韓国や日本で出土する既存の塑像に比べて大型であるのが特徴である。

⑥本薬師寺および雪野寺跡（第20～21図）

本薬師寺から出土した侍者の顔には、軽く閉じた目、大きな団子鼻、横に広がる細長い口などが表現されている[50]。頭部には頭巾のようなものを被る。雪野寺跡から出土した童子像は、顔の表現が特徴的である[51]。

⑦ 天花寺廃寺（第21図）

天花寺廃寺は三重県一志郡嬉野町天花寺字堀田に位置する寺院で、白鳳様式の軒平瓦と菱形磚仏が多量に出土した[52]。1979～1980年にかけて発掘調査がおこなわれ、東に塔、西に金堂が位置する伽藍配置が確認された。

寺院の造営は、瓦や土器から7世紀後葉から8世紀前葉に推定される。遺跡と接する北

①定林寺/橘寺/法隆寺（飛鳥～奈良時代）　②久米廃寺/天花寺廃寺（奈良時代）　③斉尾廃寺（奈良時代）　④雪野寺（奈良時代）

第21図　日本の塑像３（定林寺など）（飛鳥資料館1985）

山麓には天花寺古窯跡が位置しており、瓦や須恵器を生産していたとみられる。

塔の東からは、螺髪とともに坐像の左膝片が発見された。火災により甚だしく歪み、赤茶色を呈する。調査団は、この塑像は火災以前に窯で焼成されたものだと考えた。つまり、天花寺廃寺から出土した塑像は、乾燥式ではなく、焼成式である。よって、塑像はすべてが乾燥式ではなく、焼成式塑像が存在する可能性についても検討すべきであろう。くわえて菱形磚仏は独特な遺物で、寺院内での安置形態について検討が必要である。

⑧上淀廃寺

上淀廃寺は飛鳥時代末の７世紀末頃に建立された寺院である。法隆寺とならび、多くの仏教壁画片が出土した。伽藍配置は、南中央に位置する中門を基準に、西に金堂、東に３基の木塔を並べる独特な配置をとっている。金堂の規模は、長さ（東西）14.8ｍ、幅（南北）12.4ｍで、基壇は瓦積で二重基壇の構造をとる。金堂内部からは壁画片とともに多量の塑像片が発見された。このことから、塑像は金堂に安置されていたと考えられる。木塔は一辺約10ｍで、基壇は金堂と同様に瓦積の二重基壇である。特に、中央木塔の心礎石からは舎利孔が発見された。

金堂周辺から出土した5394点の壁画片は、２種類に大別される。Ⅰ類型は釈迦牟尼が神将と菩薩天などに説法する姿に推測される。塑像は、金堂と南塔の周辺で3,800数点が出土し、金堂の周辺からは、半丈六丈級の如来像の螺髪とみられる塑像が発見され、塔周辺からは、二～三丈級天部像の破片とみられる塑像が主に出土した。

特異な伽藍配置、壁画片、塑像片などの出土遺物から、重要な寺院と評価されるが、金堂背後をはじめとして境内の調査は完了していないため、寺域全体の規模を把握できていないという実情がある。塑像の製作技法、尊像名、安置場所などについては、韓国例との比較研究が必要である。特に、供養者像と命名された塑像は、中国の洛陽永寧寺から出土した供養者像とは異なるが、韓国出土の仏弟子や羅漢像などとの類似点が観察される。

Ⅴ．長舎と鳥形土製品の現況と特徴

１．長舎

宗廟のような礼制建築物は韓国においても中国と同様に方形に近く、宮殿や寺院、祭祀関連遺跡から確認される。また、ソウル風納土城や夢村土城、公州公山城などでは長舎が確認されていない。ただ、平壌安鶴宮では、偃師商城の宮殿のように長方形の中心建物を回廊式の建物、すなわち長舎が取り囲む構造や、中心建物両脇に接して長方形の建物が取り付く構造がみられる。しかし平壌安鶴宮の築造時期については、依然として論議が続いている。

韓国におけるもっとも典型的な長舎配置は、講堂を中心として、その両脇に東・西建物が南北方向に位置する形式で、７世紀代の扶余定林寺、益山帝釈寺と弥勒寺など、百済泗沘期の寺院で出現する。これに先立つ６世紀代の扶余東南里廃寺、陵山里廃寺では、長舎形態の講堂両脇に長方形建物が並列、または講堂から離れて講堂長軸に対して直交して配置される。また、553年創建の慶州皇龍寺では、長舎形態の講堂両脇に長舎や長方形建物が並列、または内側に折れて講堂に取り付き、周囲を囲む構造が登場する。このような構造は、近くは平壌の安鶴宮、遠くは偃師商城の宮殿でみることができる。

慶州皇龍寺の講堂と東西の長舎は、百済泗沘期の寺院に比べて奥行がかなり狭く、九州地方の６世紀末から７世紀代の長舎と類似する。創建当時には並列する３棟の長舎を中心に、両端で内側へ折れる構造は、６世紀末から７世紀代の九州地方の比恵遺跡、阿恵遺跡などと酷似するが、百済ではみられない構造である。古代日韓において、長舎をめぐる文化交流は、複雑な様相を呈し変化してきたことがわかる。

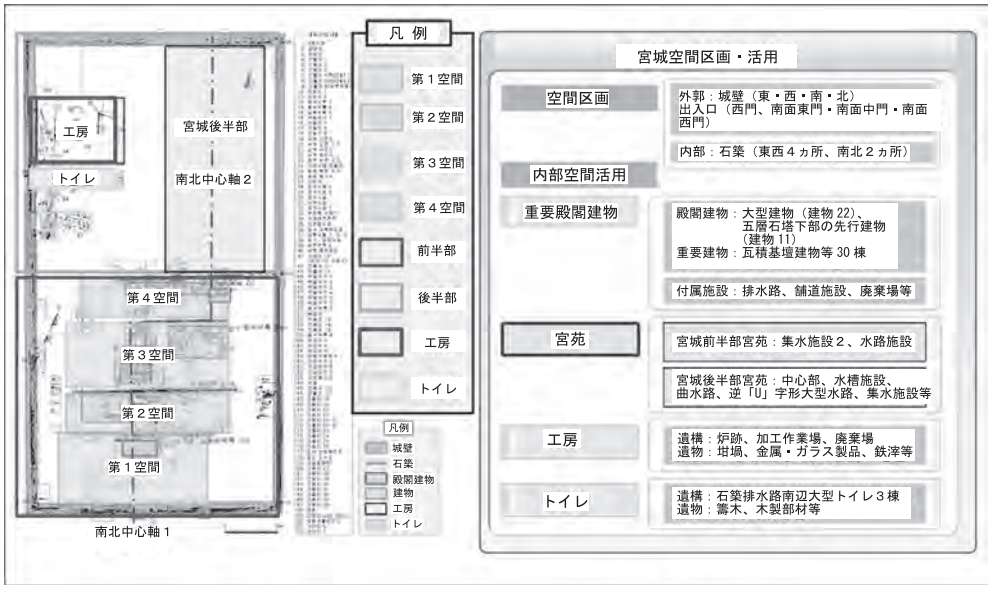
益山地域における長舎は、百済泗沘期の宮城である王宮里遺跡、寺院の帝釈寺と弥勒寺でみられる。王宮里遺跡では、宮城前半部にあたる第１～４空間と後半部にあたる北東部の後苑、北西部の工房でそれぞれ確認された。

（１）現況

①益山王宮里遺跡（第22～30図）

宮城前半部の第１空間南西方で、南北に長く延びる建物42を中心に、その北に厨房と建物41が南北に並んで配置される（第23図）。長舎建物42は、遺存する礎石や基壇石などから、南北10間（27.5 m）、東西１間（2.75 m）の規模に推定される。硯片などの出土遺物から、古代都城における朝堂院のような建物の可能性が指摘されたが、厨房が近くに位置することから、倉庫や食堂、あるいは宴会空間である可能性が高いと考えられる。

建物42より標高が高い地点からも、礎石や基壇、排水と関連した石材が検出されたことから、ほかにも建物が存在した可能性が提起された。また、南北に並列する建物42－厨



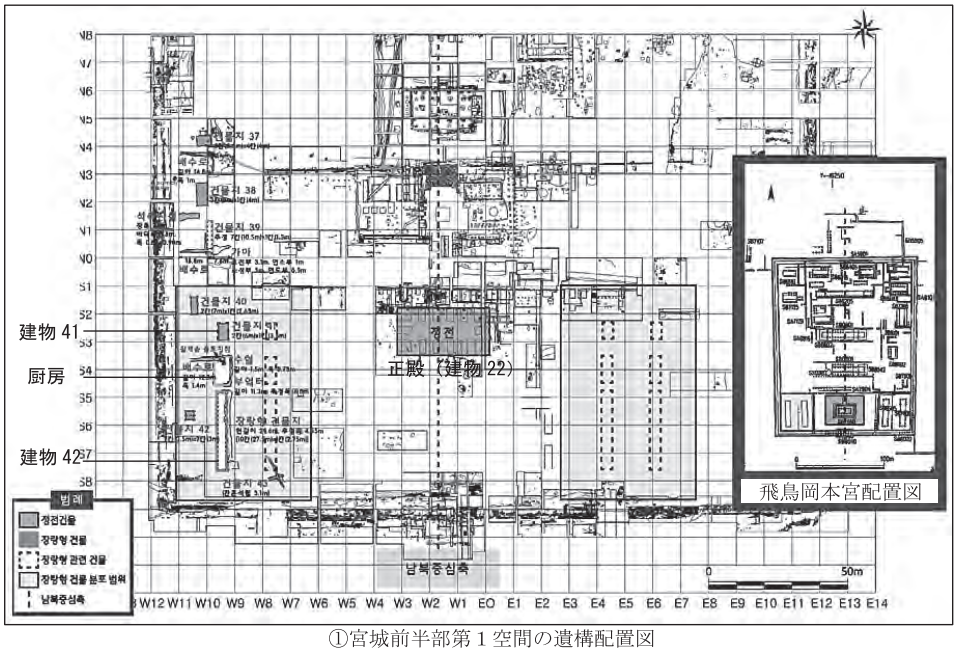
第22図　益山王宮里遺跡における宮城空間区画・活用図（전용호2015）

房－建物41の東には、正殿と推定される間口７間（31 m）、奥行４間（15 m）の建物22が位置する。このような建物配置は、日本の飛鳥宮、難波宮、大津宮と類似することから、相互の関連性も指摘されている。

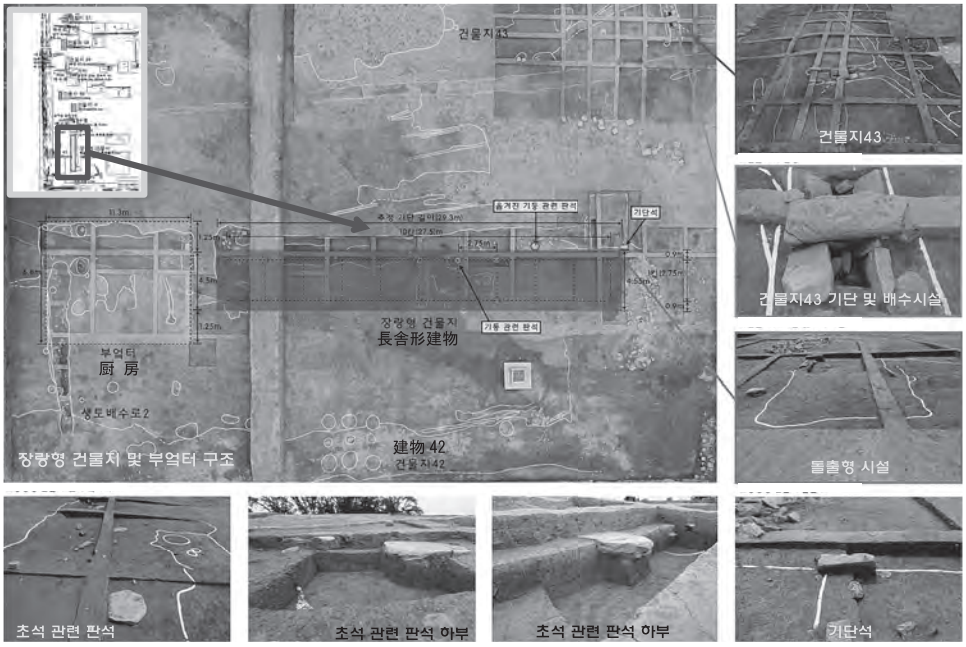
しかしながら、益山王宮里遺跡では、正殿と推定される建物22の東方からは、西方でみられる長舎建物42－厨房－建物41と対称をなす建物は確認されておらず、飛鳥宮正殿東側の長舎を区切る掘立柱塀のような区画施設も発見されていない。ただし、西方の長舎建物42－厨房－建物41は、正殿である建物22より標高が約１m 以上低いため、これらの間には石垣のような段状施設が存在した可能性も考えられる。

さらには、建物の機能や性格については、日本でも正殿両脇の長舎を朝堂院や朝集殿と推定するが、これを直接的に立証する根拠は定かではない。このことから、王宮里遺跡の正殿西方にある長舎建物41は、隣接する厨房と関連する倉庫、あるいは食堂や宴会空間である可能性も充分に考えられる。

宮城の第２空間には、建物４と５の東に南北方向に長い建物６が位置する（第24図）。建物６は奥行１間の長舎と、並列する２列の塀からなる。間口１間の長舎と２列の塀のうち、西側の塀は造営方位が建物６と一致するが、東側の塀は若干異なる。しかし、建物６の北西方に位置する建物４・５と、その北の東西石築２は、東側の塀と軸を同じくする反面、長舎と西側の塀とは異なる。このような造営方位の違いは、時期差によるものと考えられる。建物６は、宮城前半部の第２空間に位置する建物１～２、４～５などの中心施設を保護する境界の役割を果たした建物と推定される。



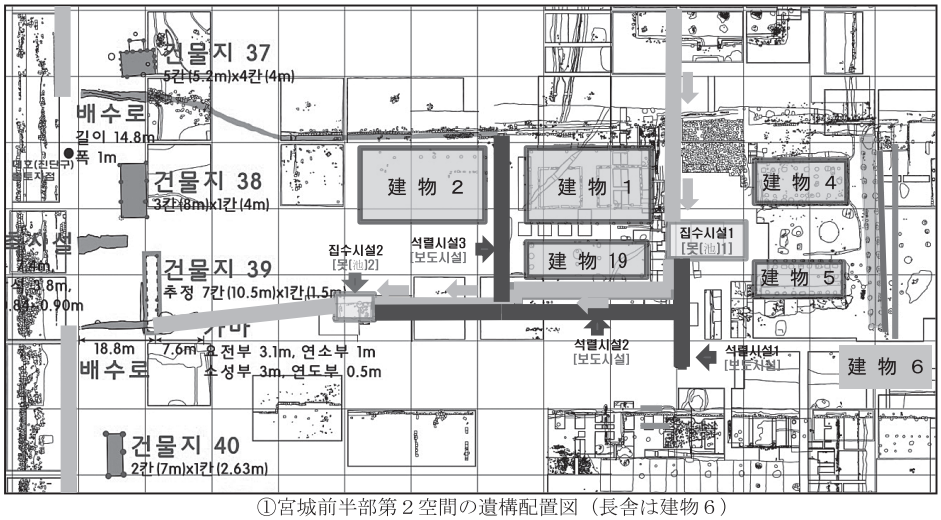
①宮城前半部第１空間の遺構配置図



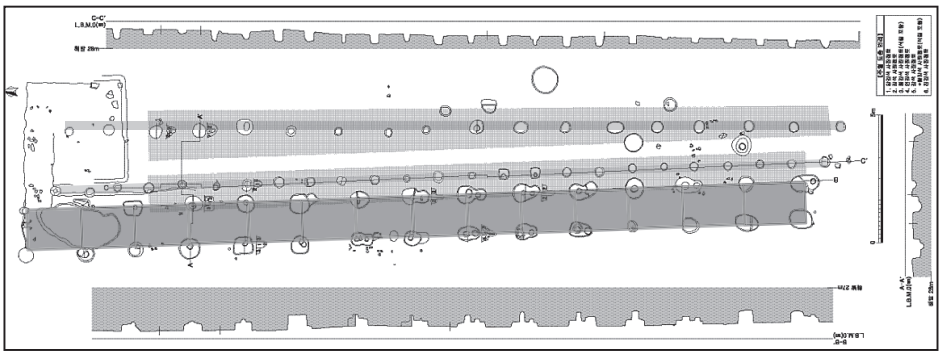
②建物 42 検出状況

第23図　益山王宮里遺跡における宮城前半部第１空間の長舎（国立扶余文化財研究所2015）

宮城前半部の第３空間は、既存の南北石築１を中心に東西に分けて論じられており（第25図）、東部は宮城領域、西部は武王の死後、宮城中心部を取り壊して寺院を建てたと考えられてきた[53]。さらに南北石築１は、東西石築１～４や南北石築２に比べて築造技法や石材などに違いがあり、宮城を取り壊し寺院を造営する時点で築かれたと考えられている。



①宮城前半部第２空間の遺構配置図（長舎は建物６）

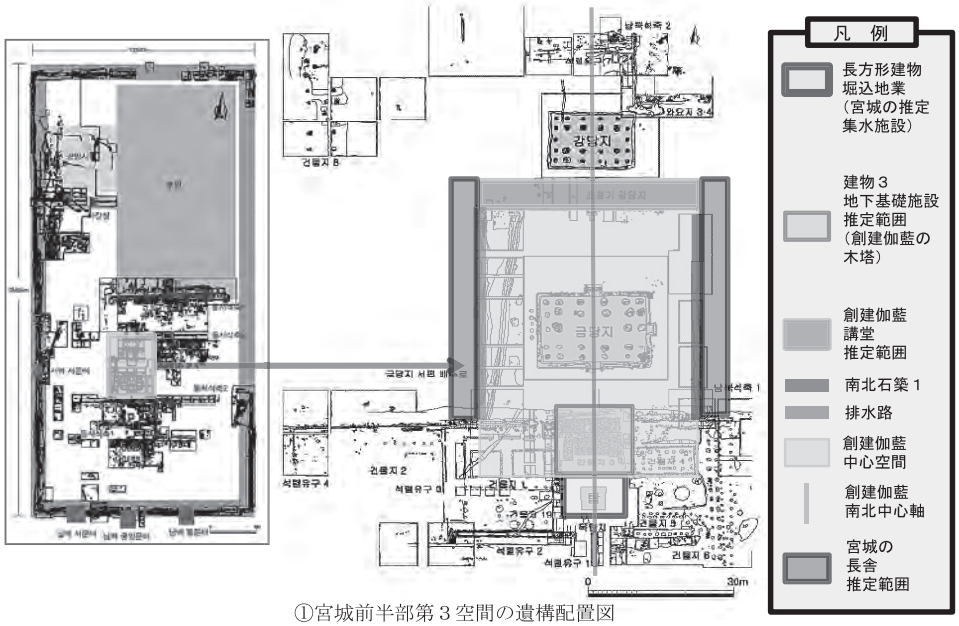


②建物６遺構図

第24図　益山王宮里遺跡における宮城前半部第２空間の長舎（国立扶余文化財研究所2008・2015）

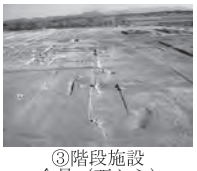
ところで、金堂東方にある南北石築１と対称をなす西方に、南北方向の排水溝が２基確認された。この二つの施設（東方の南北石築１と西方の排水溝２列）の北方では、３ヵ所の階段施設を備えた創建伽藍の講堂が確認された。各階段施設の間隔は16.66 m で、左右の階段からそれぞれ8.4 m、6.4 m 離れた地点から、講堂の裏込めが確認された。これにより、講堂東西の長さは、少なくとも50.14 m であることが推定された。また、講堂周辺から、講堂にともなうとみられる直径30～40 cm の円形礎石が３～４基発見された。

南北石築１の前面からは、地山から掘り込まれた流水痕跡のある排水溝も確認されており、東西石築１～４や南北石築２とは大きく異なる。南北石築１は、残存長が約30 m と短い上にほかの石築と異なり、直線ではなく、蛇行する（第26図）。反面、東西石築１～４や南北石築２の前面は、地面を掘り１～２段の石段を積み上げ堅く締めた後、部分的に石築の石材を加工する際に出た割石片を敷いて補強している。つまり、石築前面は緩やかな傾斜をつけて自然に排水されるように処理しており、人為的に地面を掘り排水溝を設けていない。

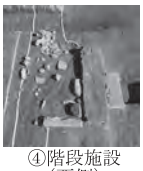


①宮城前半部第３空間の遺構配置図

②講堂南辺階段施設周辺全景
（航空撮影）



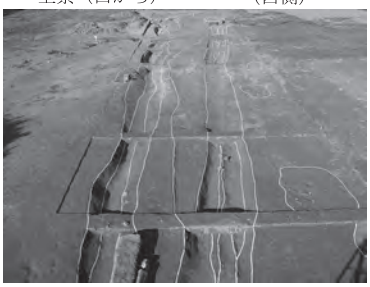
③階段施設
全景（西から）



④階段施設
（西側）

⑤階段施設
（中央）

⑥階段施設
（東側）



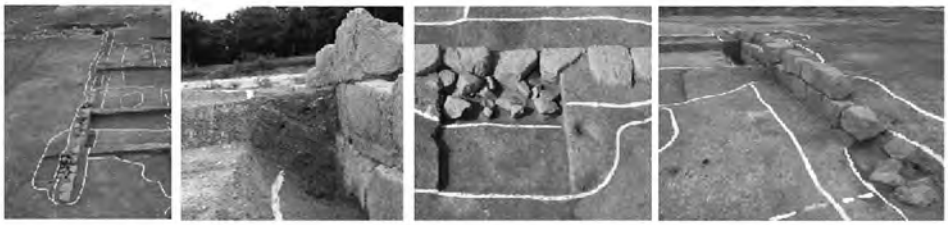
⑦金堂西辺地山堀込排水路全景
（南から）

⑧金堂東辺南北石築１
全景（南から）

第25図　益山王宮里遺跡における宮城前半部第３空間の長舎（国立扶余文化財研究所2008）

以上より、南北石築１は、当初は金堂西方にある排水溝のように地山から掘り込まれた排水溝であり、のちに石を積み上げて石垣として機能させるとともに、石積排水溝につくり替えたと推察される。石築前面に堆積した瓦片も、その堆積状況からみると、金堂からの崩落とは考えにくい。むしろ、石築背面に存在した建物からの崩落である可能性が高い。そして南北石築１背面からは、基壇抜取穴とみられる南北方向に長い竪穴も確認された。また、既に講堂と考えられてきた建物南東方に位置する建物14周囲からも、円形礎石２基と基壇に関連する石材も発見された。このような痕跡や礎石は、南北石築１の後方に長舎

①南北石築１（東→西：全景、前面の堆積状況、裏込め部分、石築状況）



②南北石築２（東→西：全景、前面の堆積状況、裏込め部分、石築状況）

③東西石築２（東→西：全景、前面の堆積状況、裏込め部分、石築状況）

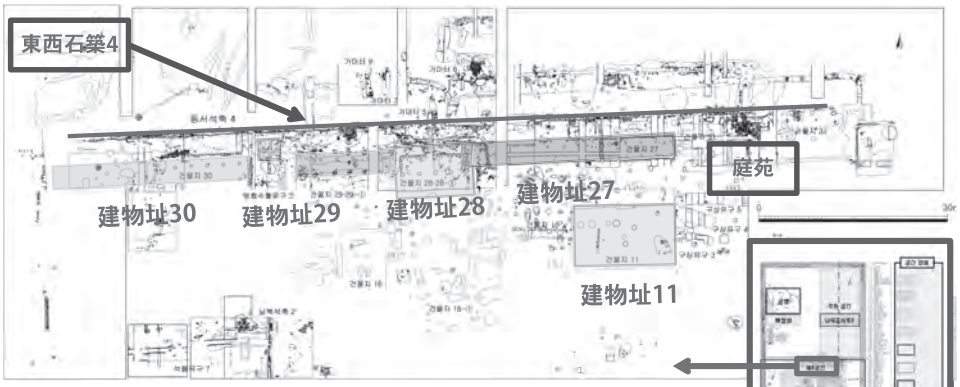
④東西石築１前面の堆積状況　　⑤東西石築４前面の堆積状況

第26図　益山王宮里遺跡における南北石築１の比較資料（国立扶余文化財研究所2008）

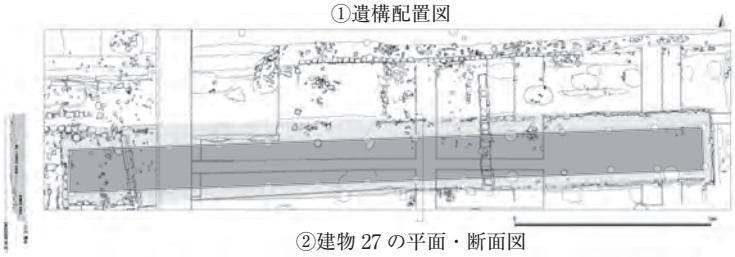
が存在した可能性を示す資料であると考えられる。

講堂前面の東方には、南北石築１に並行する長舎とともに、講堂前面の西方にも、南北石築１と対称をなす位置、つまり金堂西方の地山から掘り込まれた排水溝と並行する長舎が存在した可能性もある。金堂東・西方の排水溝は、講堂前面の東西に位置する長舎の側溝として設けられたとみることができ、これら建物は、木塔（建物３）と金堂を中心に置く寺院の造営前は、宮城と関連した施設であった可能性も十分に考えられる。

中央の長舎（創建期の講堂）を中心に東西の排水溝に沿って長舎（推定）が配置され、これに取り囲まれた場所は、内庭とみることができる。このような長舎配置は、中国における古代宮殿の宗廟や慶州皇龍寺の創建期の配置に類似する。ただ、金堂は内庭と推定される空間の後方ではなく、前方にやや偏って位置するため、宮城前半部の第３空間にある建物は正殿とみるよりは、寺院関連の施設とみるのが合理的だと考えられる。残念ながら、金堂の東・西方の排水溝を側溝として利用した建物は、のちの寺院造成過程で破壊された

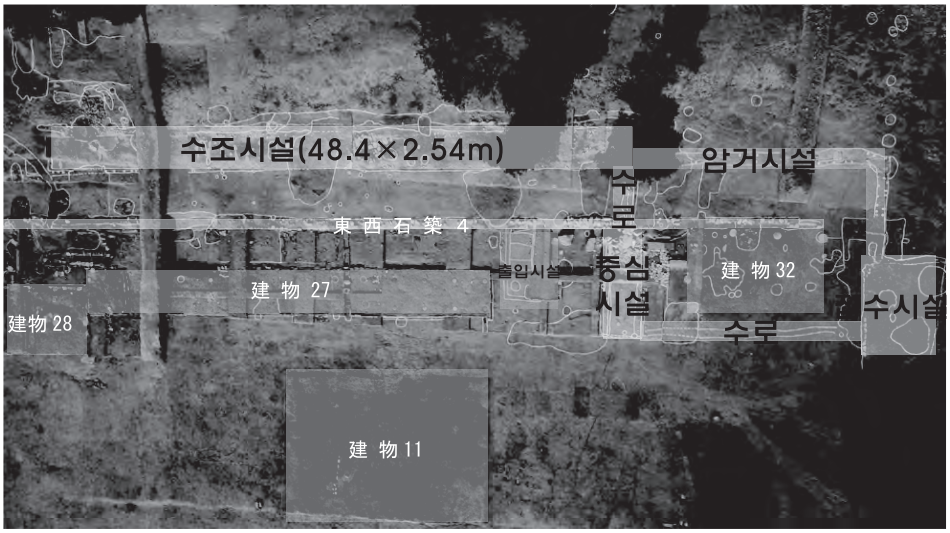


①遺構配置図



②建物 27 の平面・断面図

③建物27全景



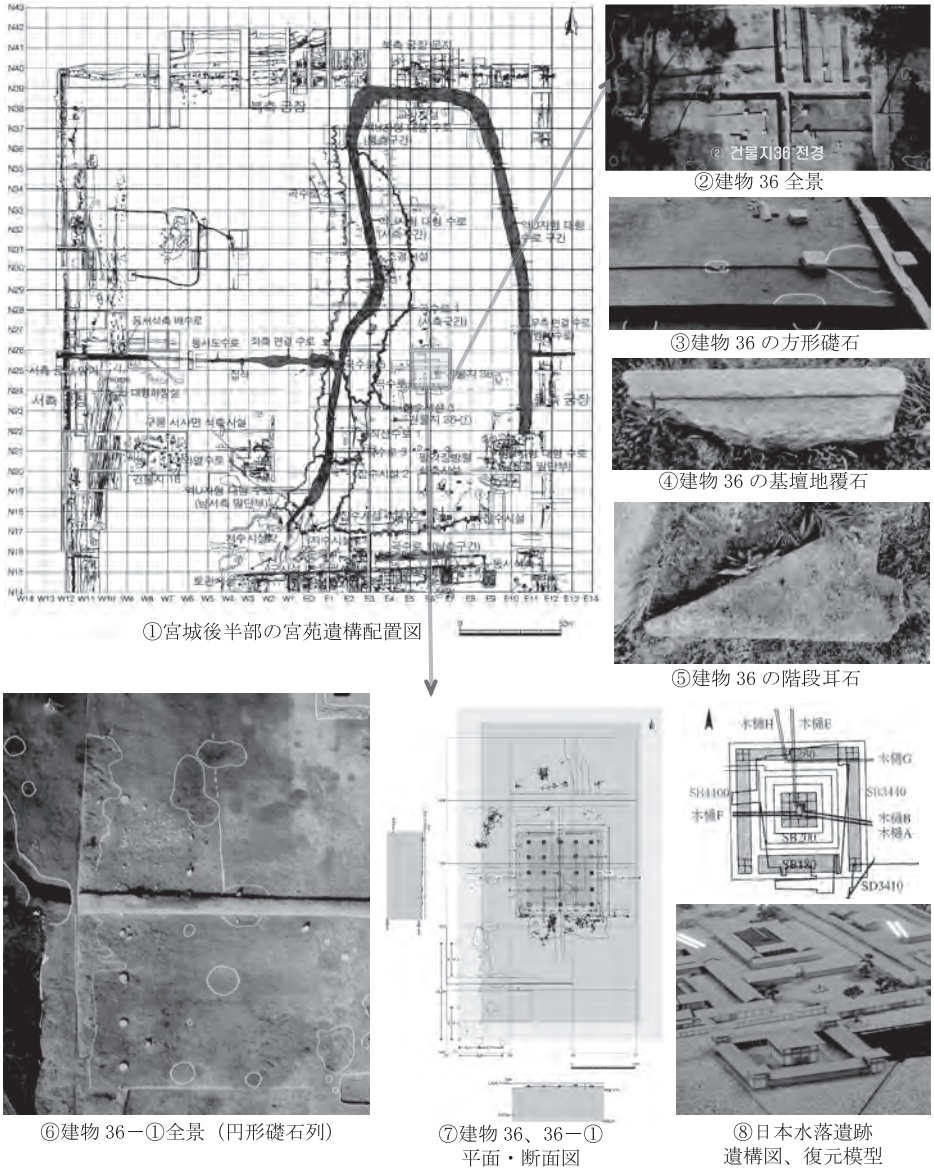
③宮城前半部第 4 空間の宮苑周辺遺構配置図（細部）

第27図　益山王宮里遺跡における宮城前半部第 4 空間の長舎（国立扶余文化財研究所2008・2010）

ためにその痕跡をみることができない。しかしながら、これまで創建期の講堂とみられてきた長舎は、寺院造営前は、王宮と関連する建物であった可能性は依然としてある。金堂は、南北石築 1 や創建期の講堂に比べて低所にあり、従来の中国、韓国、日本での長舎配置において、正殿などの中心建物の位置に比べて、前方に大きく偏っていることから、同一用途の建物とみるのは難しい。しかし、金堂の位置に王宮と関連する建物が存在した可

能性を完全に排除するものではない。

宮城前半部の第４空間では、東西石築４に沿って、東の庭園から西に向かって建物27、建物28、建物29、建物30が位置する（第27図）。間口４間（10 m）、奥行２間（５m）の建物28を中心に、西には間口６間（11.8 m）、奥行１間（２m）の建物29が、東には間口13間（32.3 m）、奥行１間（2.2 m）の建物27が横一列に並ぶ。建物29から西にやや離れた地点に、間口10間（28.6 m）、奥行１間（2.5 m）の建物30も並ぶことが確認された。このよう

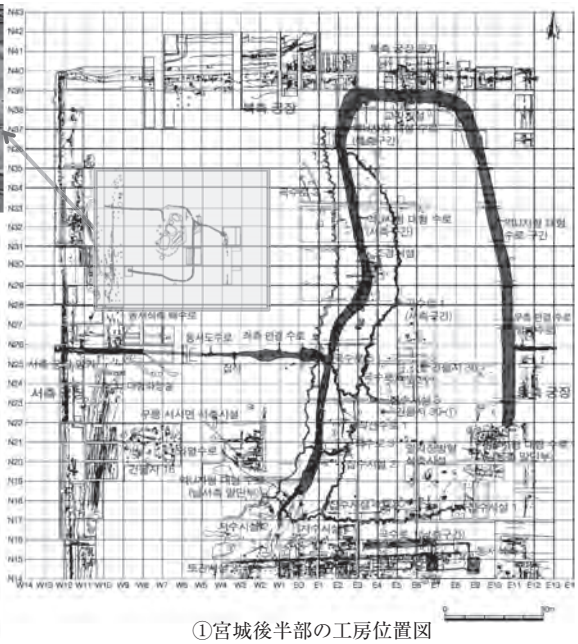


第28図　益山王宮里遺跡における宮城後半部の宮苑の長舎
（国立扶余文化財研究所2015、筆者撮影、奈良文化財研究所2014）

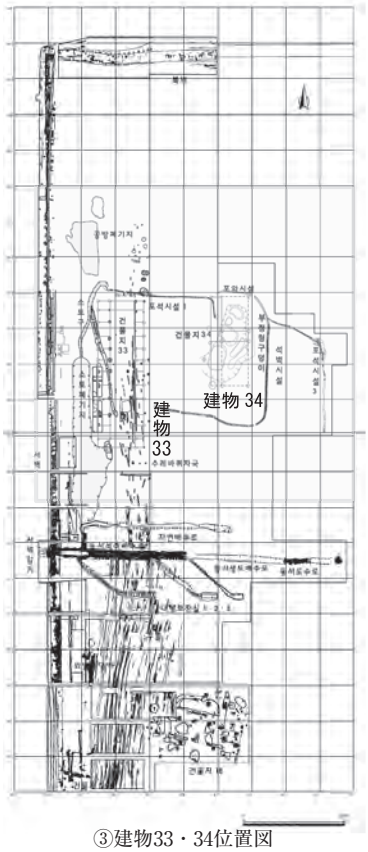
な長舎配置は、平壌安鶴宮や慶州臨海殿の北方や東南方で確認され、宮苑付近で集中的にみられる傾向がある。このような点から、王宮里遺跡の宮城前半部第４空間に位置する長舎は、宮城内の饗宴空間領域にある食堂や宴会関連施設として使用されたと推定される。

宮城後半部の東北方に位置する後苑や西北方の工房からも長舎は確認された。後苑は逆「U」字形の大型水路に囲まれており、中央には間口４間（14 m）、奥行４間（14 m）の建物36が位置する（第28図）。建物36の南西のやや低い地点には、柱間寸法が2.45 m の円形礎石６基が確認され、ここから東に約3.1 m の地点には、礎石抜取穴があった。これらの点から、円形の礎石列は建物36を取り囲む回廊形の建物と推定される。すなわち、中心建

②宮城後半部北西部の工房

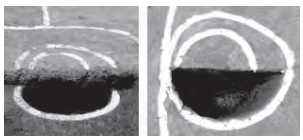


①宮城後半部の工房位置図



③建物33・34位置図

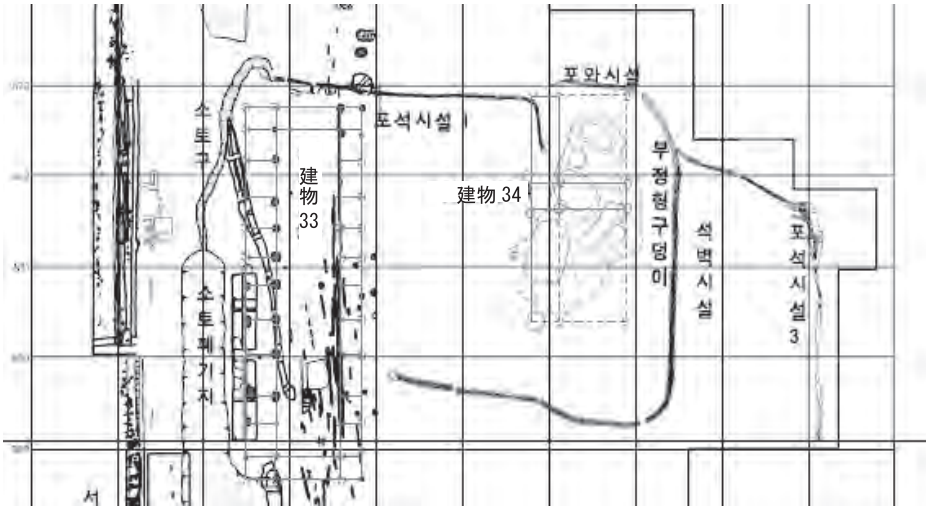
④建物33全景（北から）



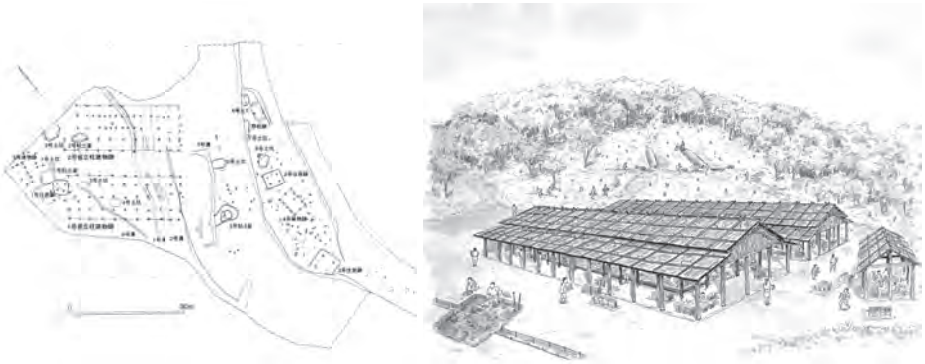
⑤建物33の柱穴

⑥建物33柱穴全景（北から）

第29図　益山王宮里遺跡における宮城後半部の工房の長舎（国立扶余文化財研究所2006・2015）



①益山王宮里遺跡の建物 33・34 位置図



②堂がへり遺跡の大型建物周辺遺構配置図と復元図

第30図　益山王宮里遺跡における宮城後半部の工房・長舎の比較資料
（国立扶余文化財研究所2006、築城町教育委員会1998）

物を取り囲む長舎の存在をみることができる。

この建物は後苑領域の中央にありながら、標高がもっとも高い地点に位置する。中心建物の平面形や礎石が方形であることから、後苑領域において非常に重要な建物であると考えられる。その機能や性格の断定は難しいが、宮の後苑領域で重要な儀礼がおこなわれた場所と推察される。これに類似する規模や形態を有する建物は、日本の水落遺跡でみられる。水落遺跡は、梁行 2 間の長舎が取り囲み、その中央に桁行 4 間、梁行 4 間の建物が位置する。つまり王宮里遺跡建物36を取り囲む長舎も、内・外部空間を区分、遮断する役割をしていたと考えられる。

宮城後半部の西北部からは、金属やガラス生産に関連した作業に必要な地下防湿施設とともに、各種道具や材料を廃棄する溝状施設が確認された（第29～30図）。このような施設に囲まれた空間に 2 棟の長舎（建物33・34）が東・西方向に並んで配置される。西方の

建物33は遺存状態が比較的良好なため、その規模を把握することができるが、東方の建物34の遺存状態は良くない。建物33は方形の穴を穿ち、柱を建てる掘立柱建物で、規模は南北12間（41.8 m）、東西３間（11.9 m）である。２棟の長舎は、形態が京都府上人ケ平遺跡、福岡県堂がへり遺跡と類似するが、これらは瓦生産と関連する工房だと考えられている（第30図）。福岡県堂がへり遺跡で確認された大型掘立柱建物１・２号の規模は、10間×２間（29.5 m×11.5 m、30.0 m×11.7 m）で、柱間寸法は3.2m 等間である。この建物は８世紀後半、豊前国分寺の瓦を製作、乾燥する施設であったと推定されている。したがって、王宮里遺跡で宮城後半部の西北部から確認された２棟の長舎は、金属やガラス製品の加工と関連する工房であると推定される。

②益山帝釈寺と弥勒寺（第31図）

益山帝釈寺と弥勒寺は、百済泗沘期寺院における長舎の典型的な形態を示す代表例である。長舎配置は、中心建物両脇に南北方向に配置される。講堂前方には、東西両側に南北に長い東・西建物や僧房が位置し、回廊と取り付く。後方には北僧房が講堂と並んで位置する。益山帝釈寺と弥勒寺は、東・西建物や僧房が回廊に取り付く形態に差異をみせる。益山帝釈寺は、扶余王興寺や定林寺と同様に、回廊が直線的に延びて取り付くのに対し、益山弥勒寺は、内側に折れて建物に取り付く。

百済泗沘期の寺院では、長舎の形態や配置は時期によって異なる。長幅比が２：１以上の典型的な長舎といえる講堂周辺の建物は、初期は方形に近い形態であったが、のちに典型的な長舎へと変化している。６世紀中葉に造成された扶余軍守里廃寺や陵山里廃寺では、長舎が講堂両脇に取り付く構造、あるいは若干前方に離れ、講堂の長軸に直交して配置される構造で、典型的な長舎とはいいがたい。ところが、６世紀後葉から７世紀前葉の扶余定林寺、益山帝釈寺と弥勒寺では、典型的な長舎とみることができる建物が配されている。後者の寺院では、百済滅亡を前後に、講堂後方にも北僧房が建てられた。

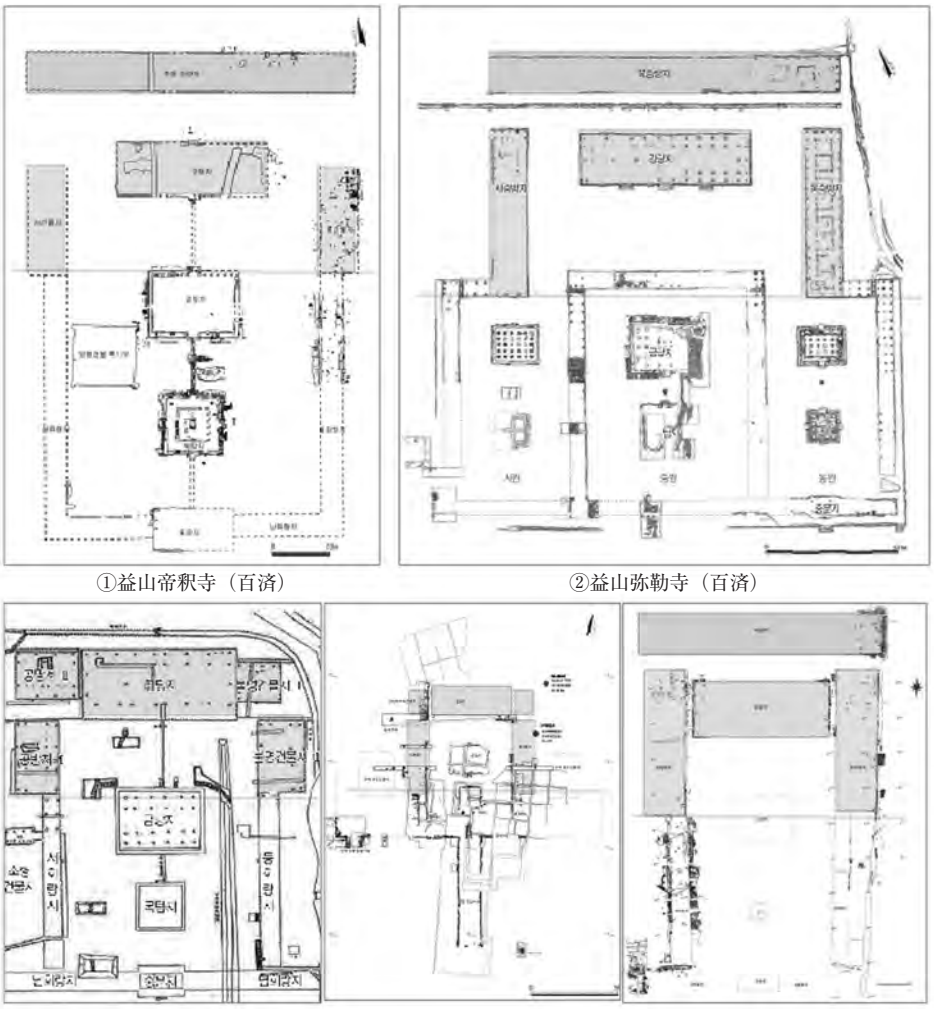
ところで、扶余王興寺はやや異なる様相を呈している。扶余定林寺、益山帝釈寺と弥勒寺は、講堂両脇の長舎（既存の東・西建物や僧房）が、金堂の中央や基壇北付近から講堂の基壇北付近までに位置するが、扶余王興寺は、木塔中央から講堂までの位置にある。このような長舎の形態と配置の違いは、その機能や性格と関連する。

講堂両脇の長舎が金堂中央、または後方付近まで及ぶ構造は、朝鮮時代の郷校や書院の講学空間に似た機能や性格が関連づけられるが、扶余王興寺のように木塔中央の位置まで及ぶ構造は、朝鮮時代の郷校や書院における「祭祀（祭享）＋講学」空間が融合した機能や性格と関連する。塔と金堂は講堂と異なり、儀礼や祭祀に関連する領域だからである。

一方で、扶余陵山里廃寺や軍守里廃寺のように、講堂両脇の建物が典型的な長舎ではない場合は、僧房のような講学空間と関連づけるのは難しい。むしろ、寺院として使われる

以前は儀礼や祭祀空間であり、のちに工房やほかの機能へと変化していったと考えられる。このような変化の過程は、慶州皇龍寺や益山王宮里遺跡で創建期の講堂と考えられてきた３ヵ所の階段施設を備えた建物からも垣間見ることができる。

寺院において、儀礼・祭祀空間と講学空間が明確に区別されている事例としては、益山弥勒寺を挙げることができる。中院は別途の回廊によって区切られており、東院と西院では、南から延びる回廊が内側に折れて僧房に取り付く。また、中院の木塔と金堂を取り囲む回廊において、回廊北方で講堂側に開く門は確認されなかった。これは塔と金堂を中心とした空間でおこなわれる儀礼や祭祀領域と、講堂を中心とした空間でおこなわれる講学領域を分離するための意図的な構造であるとみることができる。日本においても、６～８世紀代の寺院は塔と金堂が回廊によって区切られ、講堂と分離される事例が多い。飛鳥寺



①益山帝釈寺（百済）　②益山弥勒寺（百済）

③扶余陵山里廃寺（百済）　④扶余王興寺（百済）　⑤扶余定林寺（百済）

第31図　益山帝釈寺と弥勒寺における長舎の比較資料（国立扶余文化財研究所2012）

では回廊が塔と三金堂を取り囲み、その外部に講堂が位置する。

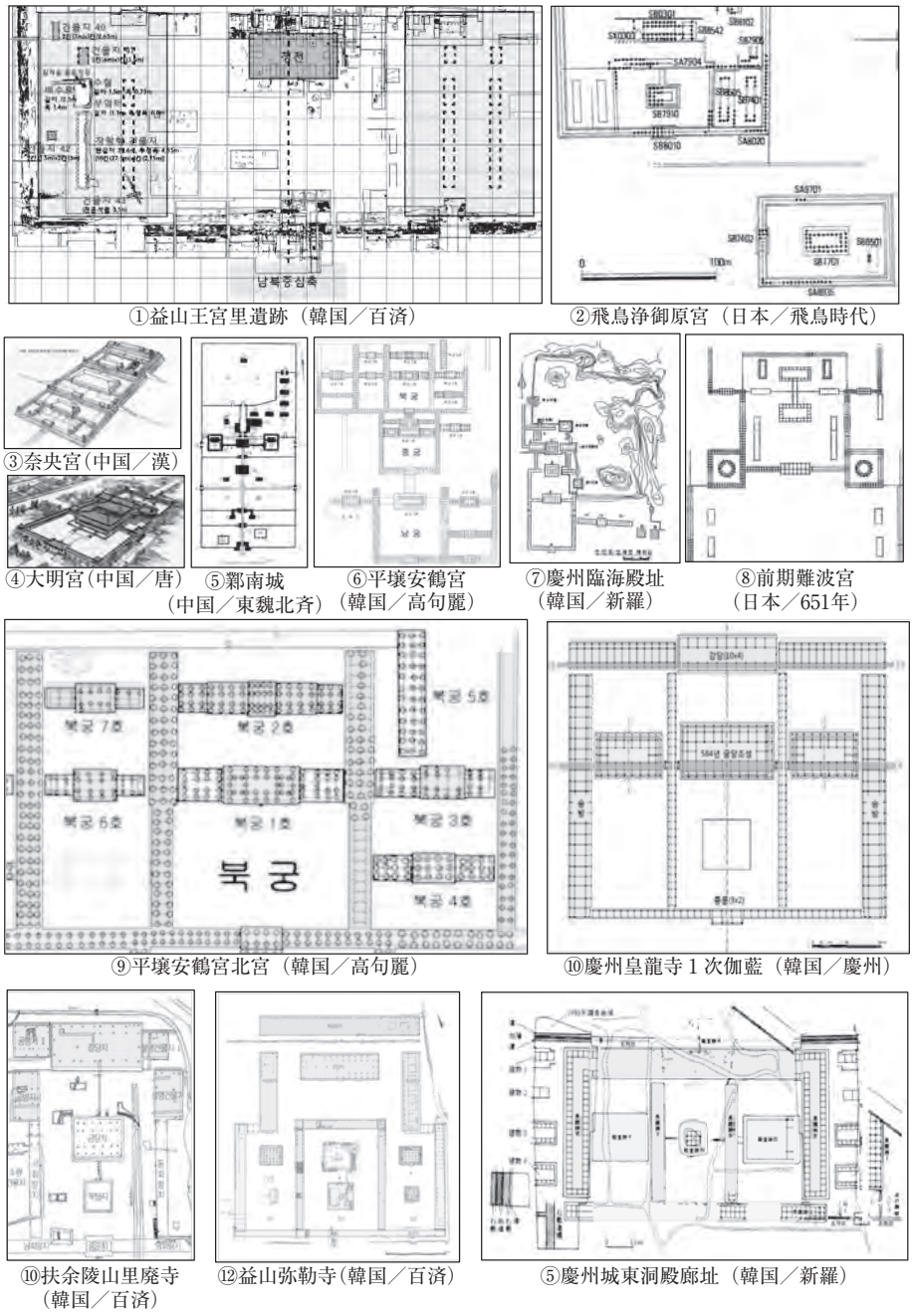
（2）特徴

王宮である益山王宮里遺跡では、様々な類型の長舎が複数地点で確認された。益山王宮里遺跡の長舎は、古代中国や高句麗の宮城の影響のもとで独自の変貌を遂げ、のちに新羅や日本の宮城、地方官衙にも影響を及ぼした。宮城前半部の第１空間は、日本の都城における正殿を中心とした朝堂院に似た構造であるのに対し、宮城前半部の第３空間は、内裏と関連する祭祀構造である可能性がうかがえる。特に、これまで創建伽藍の講堂とみなされてきた３ヵ所の階段施設を備えた建物は、前面東西の地山から掘り込まれた排水溝との関係から、寺院建立前の宮城段階にともなう建物である可能性もある。また、庭園や後苑においても、平壌安鶴宮や慶州臨海殿に似た長舎がみられ、食堂や宴会空間と関連する施設であると考えられる。

寺院である益山帝釈寺と弥勒寺は、講学空間の機能や性格を有する長舎と、その建物配置をみせている。このような構造は、６世紀代の扶余地域の寺院と関連があり、その時期的変遷のなかで捉えることができる。ただ、益山弥勒寺では寺院の中心建物である塔と金堂を回廊が取り囲むか、あるいは長舎との取付部手前で内側に折れることで長舎が立ち並ぶ別の空間が設けられている。すなわち、儀礼と祭祀空間、言い換えれば、祭祀（祭享）空間と講学空間が区分されている。

長舎の観点において、益山地域を含む百済と新羅ではやや異なる様相もみられる（第32図）。新羅からは、百済にはない独特な長舎と配置が確認された。慶州皇龍寺は、長舎が講堂両脇に南北方向に置かれる構造ではなく、講堂と金堂の東西に長軸を揃えて並列する。このような配置は、百済の王宮である益山王宮里遺跡で確認されてはいるが、百済泗沘期の寺院では、長舎ではなく、長幅比の小さい建物が講堂両脇に位置することはあるものの、長舎は主に講堂に対して直交する南北方向に長軸を置き、東・西回廊に取り付く形で配置される。

そして新羅では、中国の四合院や宗廟に類似する建物も慶州瞻星台南建物址（皇南洞123－２番地遺跡）から確認された。中央の１号建物を中心に、両脇には南北に長い長舎が並列する。これについては、権威建築、すなわち官庁の一部、または新羅王室の祭儀関連の建築物とみる見解が提起された。また、慶州城東洞殿廊という独特な構造をもつ遺跡もある。中央の間口３間、奥行３間の建物とその両脇にある２棟の殿堂との間、そしてその周囲を長舎が囲む構造が確認された。これは副宮、離宮、または内裏的な意義を持つという見解、さらには明堂のような礼制建築物と評価する議論もなされた。2014年には、慶州月城のＣ地区で、中央に北－南方向に並列する間口16間、奥行２間の３号建物と、間口７間、奥行２間の11号建物を塀が取り囲む構造も確認され、統一新羅時代後期の官庁跡と



第32図　益山地域における長舎の比較資料（国立扶余文化財研究所2012・2015、奈良文化財研究所2014、국립문화재연구소2005・2010、田有泰1983、李康根2013）

把握された。

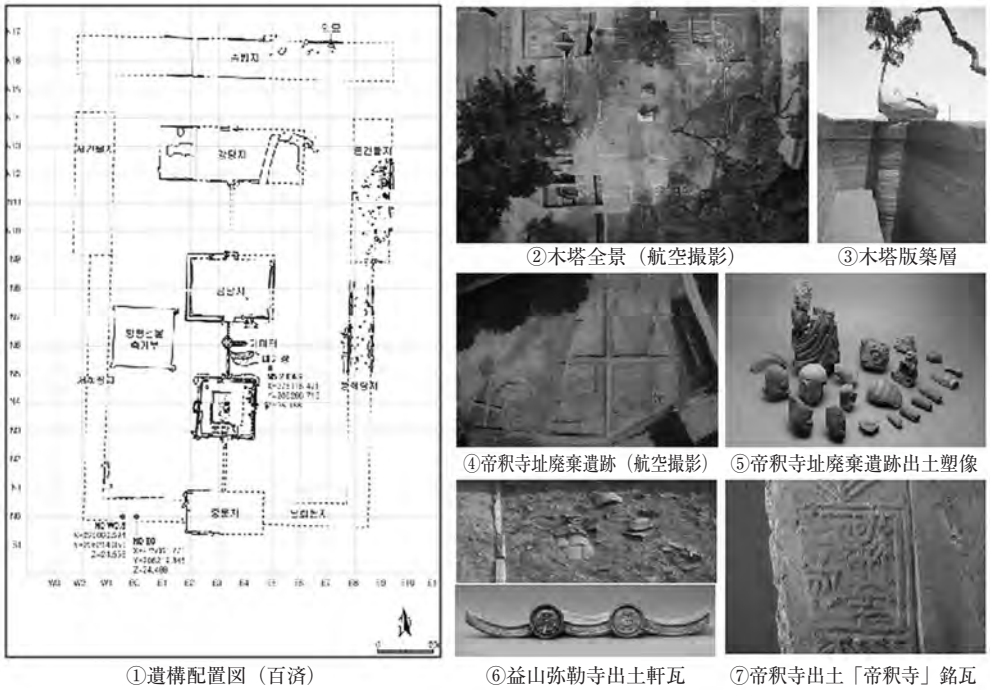
長舎を中心とした建物配置から、益山地域の王宮や寺院の内部空間をみると、その空間が持つ意味を新たに認識することができる。益山王宮里遺跡における、正殿と推定される

大型建物と南北に延びる長舎間の建物配置は、別々にみれば大きな意味はない。しかしこのような配置は、日本の飛鳥宮や難波宮においても類似した様相が確認されている。つまり、日本の宮殿における中心空間の建物配置類型が、百済泗沘期にも存在していたことがわかる。慶州皇龍寺址は一塔三金堂の伽藍配置で、金堂両脇にまた異なる金堂が位置し、創建伽藍は、講堂両脇にほぼ規模の長舎が位置していた。このような建物配置は、百済の宮城や寺院ではみられない（第32図）。むしろ、平壌安鶴宮のような宮城との関連性がより多くみられる。これは慶州臨海殿も同様である。一方で慶州城東洞殿廊は、これまでにもその機能や性格について多くの説があったが、長舎の観点からは、益山弥勒寺とのより深い関連性がみられる。基本的に内部空間が三つに区画されており、その空間を長舎が取り囲む。そうでありながらも、各時代、各地域によって類似性や相違点も存在する。外部の文化をそのまま受容するのではなく、各々の地域的特性にあわせて新たな文化を創造したことが、長舎からも確認される。

2．鳥形土製品

（1）現況

本稿で取り上げる鳥形土製品は、益山帝釈寺で出土した。益山帝釈寺[54]は、弥勒寺とともに百済第30代の武王代（紀元後600～641年）に造営された王室の寺院跡として知られてきた（第33図）。『観世音応験記』には帝釈寺の造営に関する文献記録があり、百済武広王



①遺構配置図（百済）　②木塔全景（航空撮影）　③木塔版築層　④帝釈寺址廃棄遺跡（航空撮影）　⑤帝釈寺址廃棄遺跡出土塑像　⑥益山弥勒寺出土軒瓦　⑦帝釈寺出土「帝釈寺」銘瓦

第33図　益山帝釈寺の遺構配置図・遺構・出土遺物（国立扶余文化財研究所2011・2013・2019）

（武王）が枳慕密地（益山の旧地名）に遷都し帝釈精舎を建てたが、貞観13年（639、武王40年）に落雷によって仏堂、七層木塔、廊房がすべて焼失したとある。この記録から、帝釈寺は百済武王代には七層木塔、仏堂、回廊、僧房などを備えた王室の寺院として存続していたことがわかる[55]。

益山帝釈寺の寺域中心部から北東約400 m の地点から、帝釈寺の火災で焼失したものを廃棄した場所も確認された。以前から、この地は地表面に焼き焦げた瓦片や壁体片などが多く露出していたことから「王宮里伝瓦窯址」と呼ばれていた。しかし2003～2004年におこなわれた２度にわたる円光大学博物館による試掘調査、さらには2016年の国立扶余文化財研究所による発掘調査では、塑像（仏・菩薩・天部像類、神将像類、悪鬼・動物像類）、５種類の蓮華文軒丸瓦、壁体片（包壁体、灰壁体など）、葺き土などが大量に出土し、「瓦窯址」ではなく「帝釈寺址廃棄遺跡」であることが判明した。

ところで、益山帝釈寺の寺域中心部にある東回廊の東面基壇外側から、翼の片方と胴体の一部が残る鳥形土製品１点が出土した（第34図）。全体的な形状と、背中や翼の羽根模様などから鳥を形象化したものだとみられているが、鳥の種類や土製品の機能および用途は不明であった。

鳥形土製品は、東回廊と東建物の取付部、地表面から約60 cm 下から出土した[56]。東回

①遺構配置図（百済）　②鳥形土製品出土状況　③東建物周辺全景

④鳥形土製品実測図　⑤鳥形土製品胴部側

⑥鳥形土製品翼の羽根表現　⑦鳥形土製品背側

第34図　益山帝釈寺における鳥形土製品関連図面・出土位置図・写真
（国立扶余文化財研究所2013）

廊と東建物は、礎石が一部残存するのみで、大部分は破壊されていた。鳥形土製品が発見された地点である東回廊の東側基壇と東建物の南側基壇石も大部分が破壊され、礎石の抜取痕跡がわずかに残る。基壇土も大部分が失われていた。

鳥形土製品が出土した東回廊と東建物の取付部周辺からは、百済期の刻印瓦・軒丸瓦・硯などをはじめとして、統一新羅時代の軒丸瓦・銘文瓦・各種土器などが出土した。このなかには、木塔と金堂間の参道を取り壊して造られた瓦窯と関連するトチン片も含まれていた。百済～統一新羅時代の刻印瓦、銘文瓦などの瓦磚類は、東回廊や東建物の屋根に葺かれていたもので、碗や瓶などの土器類は、東建物で使われた可能性がある。しかし、後代に民家が建てられるとともに、これら出土遺物と東回廊や東建物との直接的な関連を捉えづらくなってしまった。むしろ、東回廊や東建物から出土した遺物は、建物との関連ではなく、瓦窯と関連するトチンのように、他施設や建物で使われたものが廃棄過程で発見されたとみられる。

（2）特徴

鳥形土製品は胴体の背部分と翼の片方のみが残存し、胴の腹部と頭・足・尾といった大部分は欠損する（第34図）。残存長7.4 cm、残存幅8.3 cm、厚さ2.2 cm である。全長は15 cm前後で比較的小型品と推定される。胎土は多量の砂粒を含む。色調は灰青色、または灰褐色で、硬質である。

背部分は沈線で鳥の羽根を、翼部分は複数の沈線を縦方向に施すことで翼を表現している。特に翼は折りたたまずに、下に向けて広げている。胴体と翼をあわせた全体形は三角形に近い。背の反対側には剥離痕が明瞭に残る。また、尾の部分には別の粘土を接合した痕跡が観察された。翼内面の先端は、外面と同様に数条の沈線を施した部分が段をなし、比較的薄く仕上げられている。

鳥形土製品の詳細な特徴をまとめると次の通りである。

第一、鳥形土製品は、東回廊の東面基壇外周の旧地表上から、回廊から崩落した瓦片とともに出土した。ここは東回廊と東建物の取付部付近でもある。

第二、胴体に比べてかなり大きな翼をもち、翼や羽根が陰刻の沈線で写実的に表現されている。これまで、遺跡出土の鳥を形象化した遺物は、大部分がくちばし、足、翼などを強調し形象化したものであった。また、土器、甲冑、大刀、武器類など、ある部位に付けて装飾するもので、鳥の羽根を写実的に表現するものはなかった。

第三、粘土をつなぎ合わせて形作る成形技法が確認された。胴体－翼－尾を一度に粘土で作るのではなく、基本の骨組みとなる胴体に粘土を貼り付けて翼を作り、再度粘土を貼り付けて尾を作る。頭部は別途製作し、胴体と接合させたものではなく、頭部が胴体と一体的に欠損していることから、胴体と一体で作られたようである。このことから、頭部－

胴体－脚部までが一体として作られ、そこに翼、尾の順に成形していったとみられる。

第四、胴体－翼－尾の形や配置からは、地面や木にとまっている鳥ではなく、飛んでいる鳥が表現されている。翼は左右に大きく広げず、胴に沿って緩やかに広げていることから、飛んでいる鳥を形象化したものだと考えられる。なお、鳥の形状を彫刻したり、型作りの場合には、翼を大きく広げた形が作りやすいが、手づくねの場合はほぼ不可能である。

Ⅵ．長舎と鳥形土製品の機能と性格

１．長舎

長舎は奥行に対して非常に長い建物、あるいは、ほぼ同じ奥行で長さが異なる建物が立ち並ぶ形態で、特殊な機能や役割を担っていたと考えられる。長舎は時代や場所によって、建物そのものやほかの建物との関係、配置に違いをみせる。特に単独よりは、ほかの長舎建物と組み合わさり、空間に特殊な意味を付したりもする。

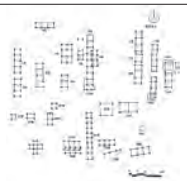
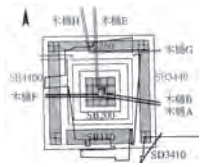
日韓において、長舎はおおよそ６世紀から宮城や寺院に登場する。ただし、日本では地域有力者の邸宅からも確認される。そして長舎は、７～８世紀からは日本の地方官衙で、中世以降は韓国の宗廟や日本の神社といった礼制建築物、中央の文廟（成均館）、地方の郷校や書院などの教育機関でも確認されるようになる。

（１）類型分類（第35図）

長舎を中心とする建物配置は、大型建物が単独で位置する類型（Ⅰ型）、等しい規模の建物が一方向に並ぶ類型（Ⅱ型）、中心建物両脇でその造営方位に直交、または並行して横に並列する類型（Ⅲ型）、中心建物の前・後・左・右を完全に取り囲む類型（Ⅳ型）、独立建物ではなく、建物間を連結、または建物を取り囲む類型（Ⅴ型）に分けられる。

それぞれの類型は、さらに細分化される。一方向に並んで位置する類型（Ⅱ型）は、さらに、左右両側に造営方位を東西に配置する類型（Ⅱａ型）と南北に配置する類型（Ⅱｂ型）に細分される。

長舎の類型分類のなかで、もっとも複雑で多様な様相を呈する型式は、中央に位置する中心建物の両脇で長舎が南北、または横一列に並んで位置するⅢ型である。中心建物両脇で長舎が横に並ぶ型式（Ⅲａ型）と、南北方向に置かれる型式（Ⅲｂ型）に区分される。そして、中央の長舎や両脇の長舎の数量や位置によっても区分される。中央の長舎が１棟（１型）、中央の長舎が２棟（２型）、両脇の長舎が２列以上（３型）というように細分される。都城内の王宮や地方官衙で、長舎が単独で存在する場合は正殿と称する。中央の長舎が近距離で前後に位置する場合は、前方の長廊を前殿、後方の長廊を後殿と称する。これと異なり、中央の長舎が両脇の長舎の前・後を揃えて位置する型式（カ型）、両脇の長舎が中央の長舎前面の柱筋と揃えたり、これよりも南に位置する型式（ナ型）、両脇の長

類型	特　徴	代表遺跡	遺構図
Ⅰ型	単独で存在	・滋賀県甲賀市東山遺跡 →４列の柱列の一部、 全体規模は不確実。 参考として提示。	
Ⅱ型	同様の規模で一辺の柱筋を揃えて位置。 長さ（Ⅱa 型）または幅（Ⅱb 型）で細分される。	・益山王宮里遺跡の工房建物 33・34（Ⅱa 型） ・京都府上人ヶ平遺跡 ・福岡県堂がへり遺跡 →瓦窯近接工房	
		・慶州瞻星台南辺建物址（Ⅱb 型） →建物の性格および周辺建物との配置関係が不明確。	
Ⅲ型	中心建物の左右両脇に垂直または並行して長舎が位置する。 細部形態により、多様な形態的変化がみられる。	・益山王宮里遺跡の正殿、西南辺建物 42（Ⅲb 型） ・慶州臨海殿址、平壌安鶴宮南宮庭園 ・三国時代寺院の講堂両脇 →宮苑、寺院の講堂	
		・益山王宮里遺跡の庭園建物 27 ～ 30（Ⅲa 型） ・６～８世紀における日韓宮城や地方国庁・官衙 →庭園等の殿閣建物周辺 ・韓国の６～８世紀の寺院 →講堂周辺東西の付属建物	
Ⅳ型	中心建物を長舎で前後、左右に囲む。 特殊な事例。	・益山王宮里遺跡の後苑建物 36・36－① ・奈良県石神遺跡、水落遺跡、飛鳥宮エビノコ郭 →祭祀／特殊空間として活用	
Ⅴ型	建物間を連結、あるいは建物周囲を囲む。	・６～８世紀における日韓宮城や地方国庁・官衙、寺院 →回廊	

第35図　６～８世紀における日韓長舎の類型（奈良文化財研究所2014、국립문화재연구소2010、国立扶余文化財研究所2008、江口編2014、甲賀市教育委員会2018）

舎が中央の長舎背面の柱筋と揃えたり、これよりも北に位置する型式（タ型）、中央の長舎が両脇の長舎の背面よりも南に置かれる型式（ラ型）がある。くわえて、中央と両脇の長舎配置が前後に置かれる型式（①型）、左右で２セットをなす型式（②型）もある。最後に、両脇の長舎が１棟の型式（㋕型）、長舎が２棟以上並ぶ型式（㋟型）に分けられる。以上の型式の組み合わせにより、多様な類型が確認される。

Ｖ類型は、内外を分けるという機能面では塀や城壁と類似するが、建物と建物をつなぐ通路という機能面で異なる。塀や城壁のように、門などの出入施設を除き、内外を完全に遮断するものであったかの判別は難しい。

長舎は、建物間の関係をはじめとして、丘陵や河川など地形条件によって様々に変化する。建物の性格や階層によっても、位置や配置に違いが生じる。左右両脇の長舎の奥行が１間ではなく２間になると、中央の長舎もほぼ同じ奥行になるか、あるいは、はるかに広くなる。中央と左右両脇の長舎の造営方位が全体的に振れている場合もある。

（２）時・空間的分布

韓国の長舎は三国時代に初めて王宮、寺院、山城などで出現する。そもそも韓国では、間口に対して奥行が広い建物が主流をなす。百済では、長舎は王宮より寺院で主に確認されており、回廊を除き、これに取り付く東・西付属建物が講堂両脇に配置される。一方、新羅では寺院の講堂、王宮の宮苑など、中心建物の両脇に東西方向に取り付く長舎も継続的に現れる。百済漢城期、熊津期、泗沘期の扶余において、王宮と推定される場所では、長舎はほとんど確認されていない。その反面、６世紀末から７世紀前半にわたり、百済泗沘期の王宮であった益山王宮里遺跡では、多様な形態の長舎が発見された。

日本では、６世紀末から７世紀前葉に九州地方における政治勢力の中心地で、中央に位置する長舎とこの両脇に取り付く長舎が登場する。７世紀中葉に至ると、近畿地方を中心に宮殿で長舎が本格的に使われるようになる。むしろ寺院では、講堂や回廊を除き、百済のような金堂・講堂両脇の東・西建物はほぼみられない。７世紀後葉から８世紀代にわたり、地方官衙で都城の宮殿から変形した正殿と東西脇殿を備えた長舎が比較的整然とした形で築かれるようになる。むしろ６世紀末から７世紀前葉に九州地方で登場した長舎も、地方の官衙で少しずつ変化しながら存続していた。

８世紀以降も、韓国では長舎が王宮や寺院、宗廟や文廟、書院や郷校などで変形した形態で使用されてきた。日本においても同様で、８世紀以降、長舎は都城の宮殿や地方官衙、寺院や神社などの宗教施設で継続的に用いられた。いまだ韓国では統一新羅時代以後の地方官衙関連遺跡は確認されておらず、その様相は不明確である。

６～８世紀代における日韓の長舎を中心とした建物配置とその空間の性格を考える上で注目すべき資料として、朝鮮時代に儒学を教育するとともに、国家の秩序と安定を図る代

表的な機関として、中央に設置された宗廟と文廟、地方に設置された郷校と書院を挙げることができる（第36図）。このなかで郷校は官学、書院は私学とみることができる[57]。これらは、建物配置から中心建物の両脇前方に南北に長い建物が配されることから、本稿で述べる長舎を中心とした建物配置において、その空間の意味を理解するにあたり重要な比較資料となりうる。儒学における賢人を祀り祭祀を執り行う「祭祀、または文廟空間」、孔子の教えを授けるために儒者を集めて講習をおこなう「講学空間」、「支援空間」に分けられている。これら建築物は、儒教で示された位階にしたがい、一定の規則にもとづいて造られている。平地では「前廟後学」にしたがって祭祀（祭享）空間が前方に、講学空間は後方に配置される。しかし、傾斜地では「前学後廟」によって講学空間が前方に、祭祀（祭享）空間が後方に位置する。祭祀（祭享）空間は大成殿を中心にして東西前方に東廡と西廡が、講学空間は明倫堂を中心に、東西前方に東斉と西斉が南北に配置されている。二つの空間の間には階段、門、塀からなる「過程的空間」が形成されており、これは両空間を区分しながらも、お互いを結びつけている。このような建物配置は一定の規範にもとづき定型化しているが、立地によって部分的に異なる。

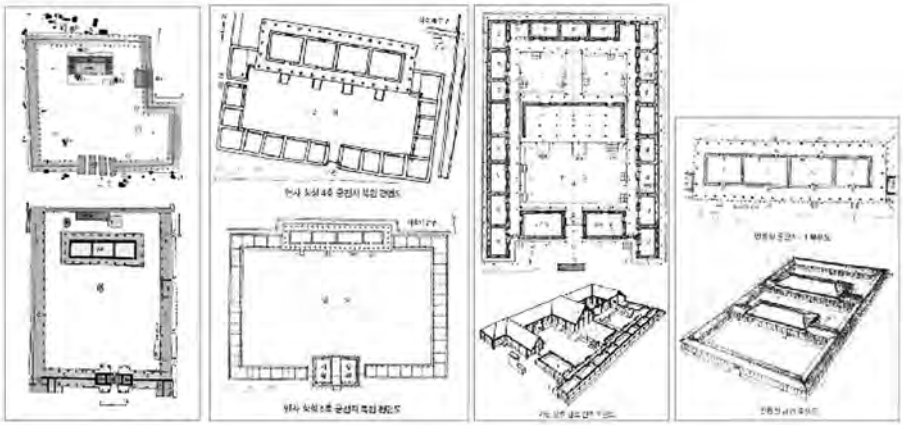
一方で、６～８世紀には王宮や寺院で「祭祀（祭享）空間」、「政務空間」、「講学空間」は異なる様相をみせる。時期や地域によって、空間がもつ性格は似るが、その建物配置は、やや異なって現れる。このような違いは、朝鮮時代の郷校や書院と同様に、立地などに起因するとともに、外部の文化の受容過程で独創性がくわわったためである。

結論的に、日韓における長舎は、主に王宮や寺院を中心に王が主管する儀礼や行事をおこなう「祭祀（祭享）空間」、業務を遂行する「政務空間」、学問や寝食のための「講学空間」、物品を保管する「倉庫や作業空間」の観点からアプローチすることができる。古代には、このような領域が一つの長舎で独立的、または複合的にみられ、中世を経て空間的に完全に分離する。

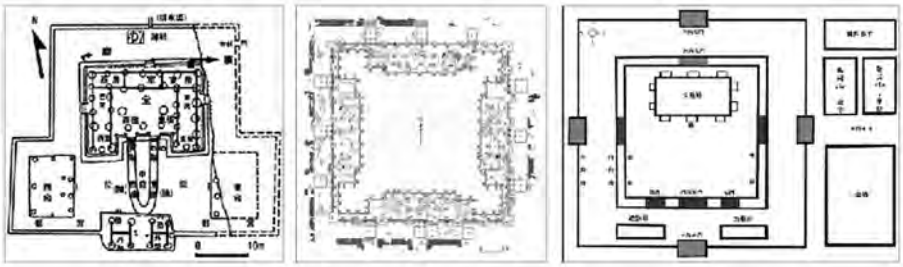
（３）起源と系統

日韓において６～８世紀に建てられた長舎の起源はどこであろうか。その答えは、中国の宮殿建築や四合院と呼ばれる伝統建築にみることができる。中国河南省偃師市西部の落水南岸に位置する夏、商、西周王朝の都城、二里頭遺跡の１・２号宮殿址も本稿で述べる長舎と関連して注目する必要がある（第36図）。２号宮殿址は回廊式建物によって囲まれた内部後方の中央に殿堂が位置する。殿堂の基壇は南北73ｍ、東西58ｍの長方形を呈する。殿堂前方には内庭が形成され、南には南北中心軸からやや東に偏った位置に大門も設けられている。二里頭遺跡の宮殿は、中国宮殿建築の嚆矢と目されている。

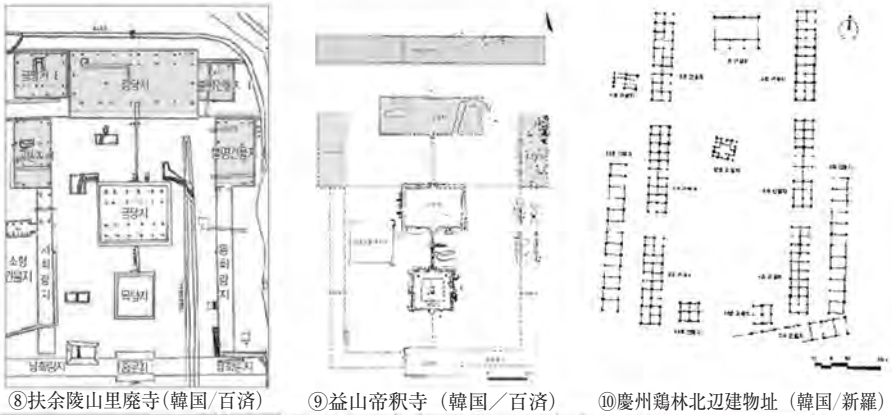
二里頭遺跡とともに、夏、商、西周王朝の都城である偃師商城の宮殿遺跡も重要である（第36図）。なかでも５号宮殿址は、宮城東方に位置する４号宮殿址から北に約10ｍの地



①二頭里遺跡1・2号宮殿址(中国/夏) ②偃師商城4・5号宮殿址(中国/商) ③岐山鳳雛建物址(中国/西周) ④黄陂盤龍城1号宮殿址(中国/西周)



⑤扶風雲塘西周宗廟(中国/西周) ⑥漢長安城南郊礼制建築群3号(中国/後漢) ⑦唐代宗廟平面構造推定復元図



⑧扶余陵山里廃寺(韓国/百済) ⑨益山帝釈寺（韓国／百済） ⑩慶州鶏林北辺建物址（韓国/新羅）

⑪ソウル宗廟(『国朝五礼儀』宗廟殿図) ⑫ソウル文廟（韓国／朝鮮） ⑬永川郷校（韓国/朝鮮）

第36図　韓国の長舎比較資料（김영재2014、許宏2014、朴淳発2013、국립문화재연구소2000・2005・2010、国立扶余文化財研究所2012、조상순2011、都龍昊1986）

点にある。北面に接する主殿は東西54 m、南北約14.6 m の規模である。回廊式建物が中央の主殿を囲んでおり、主殿前方の中央には大門が設置されている。この内側には内庭が形成されている。回廊式建物の基壇は6～7 m 幅で、大門は桁行5間、梁行3間の規模である。建物は、宮城内での位置や構造から、宗廟とみられる。

一方、中国伝統建築の典型といえる四合院にも注目しなければならない（第36図）。四合院は中央が公共活動の場であり、これを東・西・南・北に囲む構造である。ここでの中心空間は内庭と呼ばれる。四合院の初期形態をもっともよく示す事例としては、陝西省岐山県鳳雛寸に位置する西周時代の宮殿遺跡を挙げることができる。規模は南北45.2 m、東西32.5 m である。建物は南北中軸線に対して対称をなし、南から影壁、大門、中庭、殿堂、後庭、後室の順に配置され、その外周を回廊式建物が取り囲む。内庭後方にある殿堂は、間口6間（17.2 m）、奥行3間（6.1 m）である。殿堂と後室は回廊式建物によってつながる。漢代の画像磚や三国時代の家形明器でも、中央に内庭を置き、四方を長舎が囲む構造が確認される。このような点から、四合院は中国の三国時代には既にある程度定着していたことがうかがえる。隋代と唐代の絵画作品や明器からも四合院の型式をうかがうことができる。

中国の伝統家屋として定着した四合院を通じて、中国人にとって住宅は、防御性を持つ機能的産物であるとみる見解[58]が提示されたことがある。このような外部と断絶した建物配置と内庭は、砂やほこりが多いため、外部と遮断し、内部に採光と通風を取り入れる措置との見方もある。何よりも中庭の空間を確保するため、建物の対称的配置が好まれたとみられる[59]。

以上のように、中国古代宮城の建築物は中央の中心建物を回廊式建物、すなわち長舎で取り囲み、内部に内庭を設ける構造である。内庭では王が主管する儀礼や行事がおこなわれたとみられる。後代になるにつれて、中心建物は全体的な規模、特に奥行が広くなり、長舎に取り付かずに単独で存在するようになる。そして、中心建物両脇に位置する長舎も、これから離れた位置に置かれるようになった。宗廟のような礼制建築物も、秦・漢を経て唐代になると、内部の部屋配置は変わらないが、方形に近い建築物が単独で配置されたり、中心建物を中央に置き、その両側に建物を配する型式へと変化した。代表的な事例としては、扶風雲塘の西周宗廟や春秋・秦の宗廟である馬家庄1号建物址、後漢の王莽九廟、『大唐郊祀録』に記された唐の宗廟を挙げることができる。反面、四合院のような住宅は、依然として中軸線上に重要建物が位置し、これを長舎や長方形建物が取り囲んでいる。

（4）機能と性格

長舎は、形態や配置によって多様な機能や性格を有しているため、その型式も大きく異なる。単独で存在する（Ⅰ型）、または等しい規模で一方向に並ぶ長舎（Ⅱ型）は、大部

分が倉庫や作業場として使用される。そして中心建物の左右両脇横一列に取り付く長舎（Ⅲa型）は、宮殿や寺院の主要建物や施設の前方、または東西に取り付く食堂や宴会場などのような付属施設として活用される。これに対して、中心建物の両脇に南北方向に置かれる長舎（Ⅲb型）は、宮殿の朝堂院や朝集殿、内裏の正殿空間、官衙の脇殿、祭祀（祭享）や講学空間、寺院の僧房として活用される。中央建物を中心に前・後・左・右を完全に取り囲む長舎（Ⅳ型）は、迎賓館や饗宴空間とみられる。独立建物やこれに取り付かず、建物間を連結、または建物を取り囲む長舎（Ⅴ型）は、回廊や翼廊としての機能を有する。

これまでの研究で、長舎とその配置による機能や性格については、ほぼ把握されてきた。長舎の観点で論じることがなかっただけである。ただ、中心建物両脇で並列する、または垂直に配置される長舎は、その機能や性格が空間によって多岐にわたり、いまだ長舎個々の機能や性格を紐解くことに困難をともなう場合がある。

長舎は、日韓において類似点もあれば相違点もある。各地域で独自に変貌を遂げているからである。長舎は奥行に比べて極端な長さがある建物であるために、王宮や寺院で特殊な機能や性格と関連する。全般的に、長舎は儀礼や祭祀などをおこなう祭祀（祭享）空間と王宮の正殿や寺院の講堂のような業務遂行のための政務空間、学問、寝食のための講学空間、食堂や宴会などの饗宴空間、工房関連の作業空間として使用されてきた。特に６～８世紀代には、祭祀（祭享）空間と政務空間、講学空間が王宮や寺院で空間的に区分され、また時間的な変化を遂げてきた。中世を経て、宗廟のような特殊な施設として拡大し、また、書院や郷校のように、ほぼ同一構造が二重に空間を分けて設置されることもあった。それとともに建物の幅が長さに比べて大きくなり、典型的な長舎型式は弱まっていった。すなわち、長幅比が大きな建物は、構造的な安定性や空間的な活用の側面で多くの問題を抱えていたためである。

このような６～８世紀の日韓における長舎の建物配置を通じて、益山王宮里遺跡が占める位相や意味についても新たにアプローチすることができる。百済泗沘期の王宮である益山王宮里遺跡では、宮城前半部と後半部の複数地点で長舎とみられる建物が確認されており、その機能や性格は大きく異なっていた。

宮城前半部の第１と第３空間では、正殿を中心として西に、南北方向に置かれた長舎が確認され、これは日本の古代宮城で日常政務をおこなう宮殿の正殿や内裏の正殿空間と類似する機能や性格を持つと考えられる（第37図）。本稿で筆者は、宮城前半部の第３空間で創建期の講堂と考えられてきた３ヵ所の階段施設を備えた長舎は、前方東西両側に位置する地山から掘り込まれた排水溝との関係から、寺院の講堂として使われる前は王宮と関連した建物である可能性を指摘した。その機能や性格についても内裏の正殿あるいは宗廟

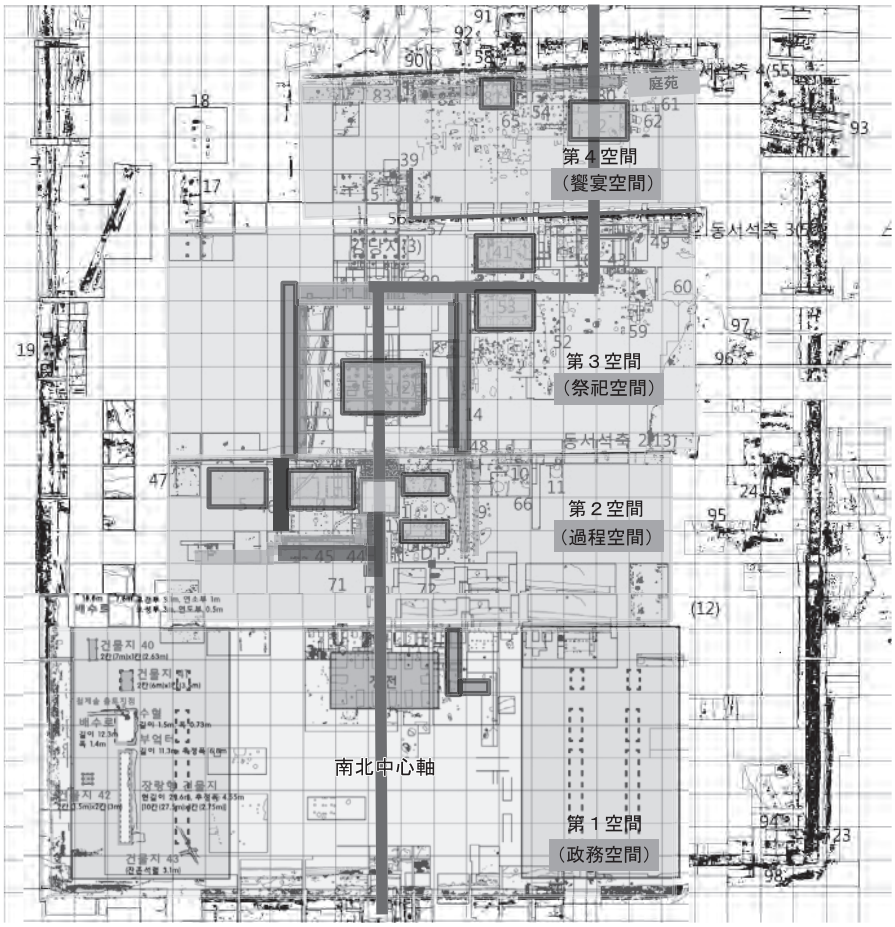
のような礼制建築物として、祭祀と関連した「祭祀（祭享）空間」とみることができる。しかしながら、これについてはより慎重な検討が要求される。

宮城前半部の第４空間では中心建物の左右両脇に取り付く長舎が確認され、これは饗宴空間である宮苑にある食堂や宴会場などの付属施設とみられる。宮城前半部の第２空間と後半部の後苑では、独立建物を囲む長舎が確認された。この長舎は、宮城内部で重要な位置を占める建物を外部から遮断、または保護する塀と類似した機能を果たす施設として活用された。特に第２空間は、朝鮮時代の郷校や書院で中核をなす「講学空間」と「祭祀（祭享）空間」間をつなぐとともに、これらを支援する「媒介、または支援空間」とみることができる。最後に、宮城後半部の西北部では、同一規模で一方向に並ぶ長舎（Ⅱ型）が確認され、これは作業場とみられる。

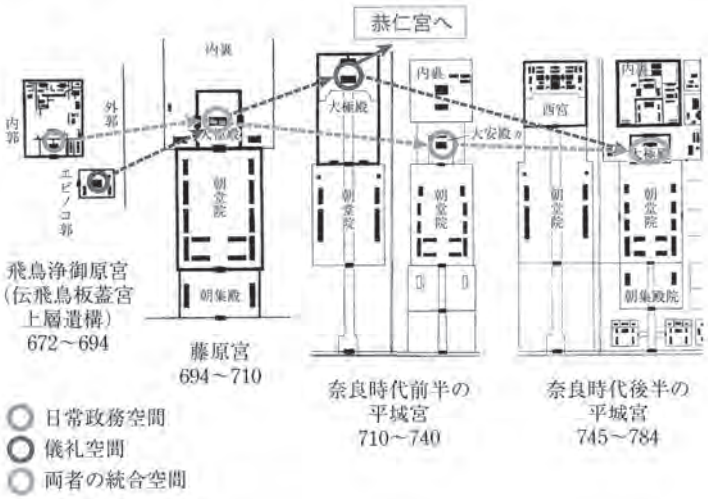
前稿で筆者は、益山王宮里遺跡における宮城前半部の空間について朝鮮時代宮廷の空間構成に鑑み、「第１空間を外朝、第２空間を水と関連した祭祀空間、第３空間を治朝、第４空間を宴朝」に設定した[60]。しかし、本稿で長舎を中心にした建物配置について論議を重ねたことで、異なる空間設定を指摘するに至った。このような結果を導き出す過程において、益山王宮里遺跡の宮城（第37図）と石神遺跡を饗宴施設として捉えた小田裕樹の研究[61]が大いに役立った。

益山王宮里遺跡の第１空間や、飛鳥宮正殿を中心とした長舎配置は、ほかの東アジア地域の宮殿型式とは異なる。正殿と、朝堂院の機能や性格をもつ長舎がともに存在するが、これらは宮内にありながらも前方に大きく偏って配置されている。すなわち、外朝と治朝が一つの領域内に存在するために、王が主管する国家的儀礼や行事がおこなわれる空間として「政務空間」という用語がより適していると考える。このような意味で、筆者の「政務空間」は、日本の大極殿を中心に宮都構造の変遷を示した渡辺晃宏[62]が用いる「政務空間」とはやや異なる（第37図）。渡辺晃宏のいう政務空間は、特定の時期や場所で祭祀（祭享）の機能や性格をもつこともあると考えるからである。益山王宮里遺跡では、「政務空間」と「祭祀（祭享）空間」は区分されている。

そして益山王宮里遺跡の第４空間にみられる、庭園を中心にした東西方向に延びる長舎も、一般的に古代庭園研究では遊戯または遊楽空間とみなすことがあるが、その解釈だけでは、やや不十分である。第４空間の中央にはほかの建物に比べて大型で長方形の建物28があり、これを中心に両脇に長舎３棟が横に並ぶだけでなく、庭園前方には東西の長さ×南北の幅が16.4 m×12.56 m である建物11も位置している。このような点で、宮城前半部の第４空間には、いまだ不明な部分もあるが、庭園と関連した多様な姿をみせていたと推測される。したがって筆者は、遊戯や遊楽という用語よりは、日本の石神遺跡を論じる際にしばしば言及される「饗宴」という用語を用いる。石神遺跡からも方形の蓮池をはじめ



①益山王宮里遺跡における宮城前半部空間図画模式図



②日本古代都城における大極殿の変遷（渡辺晃宏2019：p.35、図25）

第37図　益山王宮里遺跡における宮城前半部の空間区画と比較資料

（国立扶余文化財研究所2015、渡辺2019）

として多様な庭園関連施設が確認されているからである。

既存の益山王宮里遺跡における宮城空間の区画や活用に関して、本稿との大きな違いは、「祭祀（祭享）空間」を宮城前半部の第２空間ではなく、第３空間とした点であろう。第３空間で、これまで創建伽藍の講堂とみなされてきた建物を宮城関連建物とした場合、第３空間や第２空間が持つ機能と性格が異なってくる。そして第２空間には、王宮塔（益山王宮里五重石塔）直下の長方形の集水施設は水と関連するとともに、宮城の南北中心軸線上に位置することから、宮城でおこなわれた水と関連した祭祀施設とする説[63]が提起された。最近では、長方形の集水施設を祭祀機能をあわせもつ宮苑とみなす見解[64]もある。この宮苑は、平壌安鶴宮の南宮３号宮殿付近にある庭園と比較された。長方形の集水施設は、礫敷きによる外装の石垣積水路へとつながり、その周囲には加工・整形した石材を敷いた歩道施設が巡る。さらに、大壺を地面に埋めた、また別の集水施設とも連結している。

長方形の集水施設を中心に、西方には一棟二室構造の建物２棟（建物１・２）が東西方向に、東方には長方形の建物２棟が南北に並んで位置する。東方の長方形建物は、一部が掘立柱構造で、ここからさらに東方には南北に長い長舎が配置されている。すなわち、王宮里遺跡宮城前半部の第２空間では、水と関連した祭祀機能や性格を持つ宮苑が中心をなし、その周囲に独特な構造の建物が東西、あるいは南北に配置されている。このなかで、長方形の集水施設周辺の建物は水関連の祭祀が中心をなす宮苑に限定した解釈は難しい。むしろ、これら建物は宮城前半部の第１の「政務空間」、第３の「祭祀（祭享）空間」に携わる人々の宿所や必要物品を保管する倉庫であった可能性もある。すなわち、「政務空間」と「祭祀（祭享）空間」をつなぐとともに、これらを支援する「過程空間」であった（第37図）。

このように、益山王宮里遺跡を長舎を中心にした建物配置の観点から論じると、その機能や性格、さらには建物が位置する空間が新たにみえてくる。ただ、より正確な究明には資料的制約や多くの問題点も依然として残る。これらについては、より緻密に検討しなければならない。

２．鳥形土製品（第38～40図）

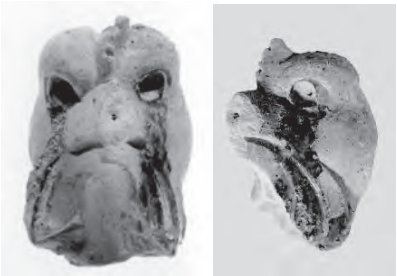
（１）機能と性格

益山帝釈寺の鳥形土製品と直接的に比較しうる資料としては、益山弥勒寺出土の鳥形土製品１点、慶州財買井址出土の鳥形土製品、康津月南寺１号建物出土の鳥形土製品２点を挙げることができる（第38図）。日本の資料としては、川原寺裏山遺跡出土の迦楼羅頭部の塑像片１点を挙げることができる（第38図）。

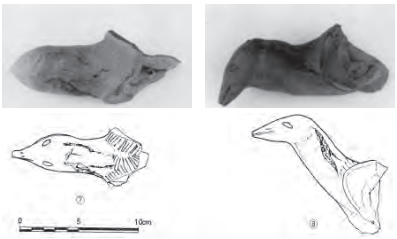
益山弥勒寺の鳥形土製品片は、寺域南辺に後代造られた南回廊西南部にある高麗時代の井戸周辺から、磁器片とともに発見された（第38図）、頭部と首部分の一部が残存し、焼

①益山帝釈寺鳥形土製品(韓国/百済)

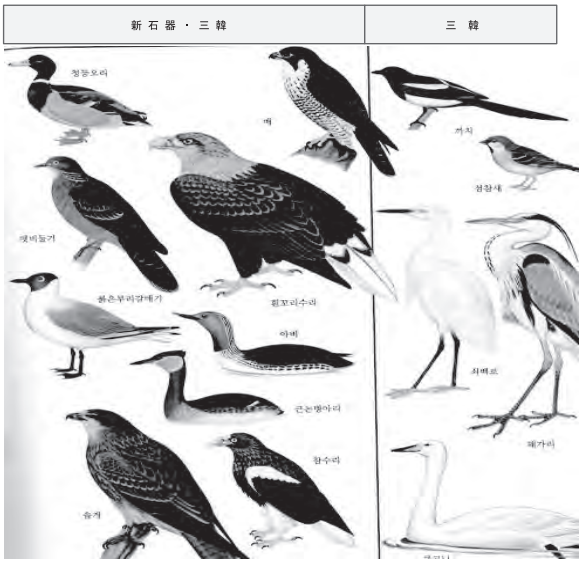
②帝釈寺鳥形土製品復元(左：腹部、右：背部)



③川原寺裏山遺跡塑像（日本／飛鳥時代）



④益山弥勒寺鳥形土製品(韓国／高霊)



⑤韓国新石器～三韓時代の貝塚から確認される鳥類

⑥康津月南寺鳥形土製品
(韓国／高麗)

⑦慶州財買井址鳥形土製品
(韓国／統一新羅)

⑧益山弥勒寺/大邱時至洞馬形土製品

⑨扶余旧衙里寺塑像
(韓国／百済)

⑩光州元曉寺象形塑像
(韓国／統一新羅)

⑪ガルーダ旗をもつ女性
(紀元前1世紀)

⑫中国雲南石窟第12窟迦楼羅像

⑬奈良興福寺
迦楼羅像

⑭韓国石窟庵
迦楼羅像

⑮慶州南山里寺塔
迦楼羅像

第38図　益山帝釈寺出土鳥形土製品に関する比較資料（国立扶余文化財研究所1996・2013、이병호2013、국립김해박물관2004、국립나주박물관・국립나주문화재연구소・한국문화유산협회2020、복천박물관2006、飛鳥資料館1985、장혜원2004、국립창원문화재연구소2003）

成は硬質で、灰青色を呈する。陰刻の沈線があり、くちばしが表現されている。小さな穴で表現された鼻の穴もある。首と背部分には細い沈線で羽根が表現されている。翼の左右には容器に付着した痕もみられるが明確ではない。大部分が高麗時代の遺物と共伴するが、これより古い時期の可能性もある。

慶州財買井址は、慶州市校洞に位置する金庾信生家の井戸跡であり、最大径180cm、深さ570cm の井戸周辺から鳥形土製品をはじめとして鹿頭形土製品、紡錘車、円形土製品などが出土した（第38図）。鳥形土製品は高さ3.8 cm で、とまっている鳥の頭部と胴体、翼が粗雑に処理されている。これは、井戸関連の祭祀と関係するとみられる。

康津月南寺は月出山南麓に位置する平地伽藍で、高麗時代の僧侶真覚国師（1178～1234）によって創建されたという記録が伝わる。伽藍配置は、中門－双塔－金堂－講堂が南北一直線に並ぶ構造である。調査の結果によると、統一新羅時代の双塔伽藍として、7世紀末から8世紀末に造営されたと推定される。特に6世紀後半から7世紀代の百済の瓦当が出土し注目されている。双塔と金堂は周囲を回廊が囲む。その外側で講堂を中心にして両脇に翼廊が取り付き、そこから垂直に折れて長く延びる僧房が配置される。鳥形土製品は、1号建物の西回廊から出土した（第38図）。残存長は19.6 cm で、頭部が欠損する。翼の羽根は沈線で簡略に表現されている。灰青色を呈し、硬質である。

川原寺裏山遺跡から出土した迦楼羅頭部の塑像片1点は、頭部のみが残存し（第38図）、残存高9.2 cm、幅5.9 cm である。鳥のくちばしと目が表現され、目からはガラス成分が溶けて流れた痕跡が残る。目にガラスを嵌めた痕跡は、益山帝釈寺址廃棄遺跡から出土した塑造悪鬼像からも確認されている。この遺物は形状が鶏に似ることから、迦楼羅の頭部ではなく、鶏形塑像[65]とみる見解もある。

益山帝釈寺の鳥形土製品は、胎土や、翼や背の羽根を陰刻の沈線で表現する技法などが、木塔北東方にある廃棄土坑や廃棄遺跡から出土した塑像とは大きく異なる。色調や焼成度から、火災による毀損は確認されない。このような点では、益山弥勒寺や康津月南寺出土の高麗時代の鳥形土製品と酷似する。しかしながら、背の羽根や翼を広げる形状には大きな違いがある。翼の形は、論山麻田里遺跡の青銅器時代の木組井戸や扶余宮南池出土の鳥形木製品を連想させる。

従来、韓国において出土した鳥形土器や土製品は大部分が鴨や雁などで、出土状況から祭祀関連遺物と考えられてきた。しかし、帝釈寺の鳥形土製品は翼や羽根の形状が鷲に似ており、猛禽類である可能性が高い（第38図）。

益山帝釈寺の鳥形土製品は、形態や製作技法の面で、帝釈寺の寺域中心部や廃棄遺跡から出土した塑像や統一新羅時代から高麗時代の鳥形土製品とは異なる。既存の塑像とは翼や羽根を表現する技法において異なり、ほかの土製品に比べて胴体よりも広げた翼が強調

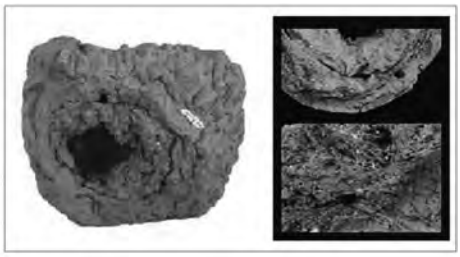
されていることから、鷹や鷲などの猛禽類を表現するという点もある（第39図）。馬や象など、動物形土製品や一部の塑像が丸くずんぐりしているのに対して、翼や羽根が比較的精巧に表現されている。

このような点から、日本の川原寺裏山遺跡出土の迦楼羅塑像片は、鳥形であり注目される。迦楼羅（Garuda）は仏法を守護する八部神衆の一つで、顔は鷲に似ており、蛇や龍を食らう姿やそれらを手に掴む姿で表現されることが多い。代表的な事例としては、石窟庵前室の迦楼羅像を挙げることができるが、この迦楼羅は左手に三枝槍を持ち、翼がついた冑を被っている。鳥形の迦楼羅像は、中国雲岡石窟第12窟や広元皇澤寺第26窟、奈良の興福寺、慶州の石窟庵や南山里寺塔などで確認されている（第38図）。特に、中国雲岡石窟第12窟の前室西壁２・３層の壁龕に浮彫された迦楼羅像（第38図⑫）は、翼を大きく広げた姿をしている。

一般的に仏教彫刻の迦楼羅像は、鷲の顔や、龍や蛇などを踏みつける姿、翼を大きく広げた姿などで表現される。このような点は、益山帝釈寺の鳥形土製品と関連づけることができる。特に、翼や羽根の形から鷹や鷲のような猛禽類をモチーフにしている点でも関連をみせる。

以上を整理すると、益山帝釈寺の鳥形土製品は、韓国において、古代から人間界と天上界をつなぐ対象として鳥を形象化した宗教的な象徴物であるとともに、仏教における八部神衆の一つ、迦楼羅像と関連する塑像である可能性も排除できない。翼や羽根を表現する

①帝釈寺出土鳥形土製品内外面



②帝釈寺址廃棄遺跡出土塑像の製作技法関連資料

③帝釈寺址廃棄遺跡出土塑像（百済）

④慶州四天王寺出土塑像（新羅）

⑤川原寺裏山遺跡出土塑像

第39図　益山帝釈寺出土鳥形土製品の製作技法に関する比較資料

（国立扶余文化財研究所2013、円光大学校博物館2006、国立慶州文化財研究所2012、飛鳥資料館1985）

方式は、これまで廃棄遺跡で確認されてきた塑像とは異なり、その製作時期は、639年の火災後に造成された２次伽藍、あるいは木塔と金堂が完全に廃棄されて以降の３次伽藍に比定することができる。

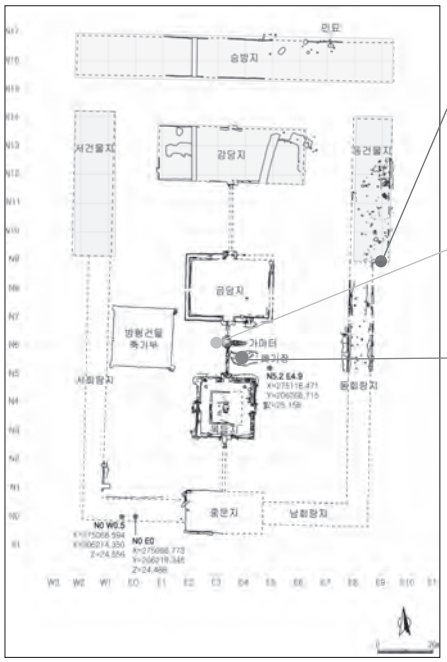
（２）安置場所からみた長舎との関係

鳥形土製品の安置場所もやはり、639年の火災以降に廃棄遺跡や木塔北東の廃棄土坑から発見された塑像とは異なっていたと推定される。木塔と金堂間の参道を取り壊して瓦窯を構築し、ここから木塔に近い地点では廃棄土坑も確認された（第40図）。この廃棄土坑からは、塑像をはじめとして金銅製風鐸、常平通宝などが発見された（第40図）。廃棄土坑はその位置や出土遺物から、窯とともに木塔や金堂の廃棄後に造営されたと推定される。その時期は、「帝釈寺」銘文瓦が製作される、３次伽藍が運営された高麗時代である。廃棄土坑出土塑像は639年の火災時に廃棄されたものではなく、２次伽藍の造成時期に製作され、木塔と金堂の撤去後に廃棄された。このことから、２次伽藍においても塑像が製作され安置されたことが推測される。

木塔ではなく金堂のみで忍冬唐草文軒平瓦が出土したことから、益山帝釈寺の２次伽藍の中心建物は金堂であり、鳥形土製品や木塔と金堂間の廃棄土坑出土塑像は、木塔ではなく金堂に安置されていたと推定される[66]。ところが、鳥形土製品は廃棄土坑ではなく、東回廊と東建物の取付部周辺から出土した。鳥形土製品は、祭祀と関連する宗教的な象徴物や塑像であるため、僧房のような空間に保管、あるいは安置されていたとは考えにくい。したがって鳥形土製品は、寺院内で祭祀（祭享）空間として使用された中心建物でおこなう祭祀に用いるために、東建物に保管、または中心建物で塑像として安置されたものが東建物に一時的に保管され、それが発見されたと推測される。

益山帝釈寺は、創建伽藍の１次伽藍では木塔が中心建物であったが、639年の火災以降から統一新羅末あるいは高麗時代初期、木塔と金堂間に瓦窯と廃棄土坑が設けられた２次伽藍では、金堂が中心建物であった。寺域内において木塔と金堂の廃棄後に造営された３次伽藍では講堂が中心建物であるなど、伽藍の変遷にともない中心建物も変化した（第40図）。よって、講堂両脇の長舎である東・西建物の機能や性格も変化している。東・西建物は、創建伽藍では僧房の「講学空間」、２～３次伽藍では、祭祀や儀礼関連用品を保管する「祭祀（祭享）空間」に変化し活用された。２～３次伽藍では、講学空間は２次伽藍時に講堂後方に造営された僧房が代替した。講堂は残存状態が良くないため、建物の中心軸を確定するのは難しい。ただ、比較的良好な遺存状態の西基壇や北西・南西基壇からみると、木塔と金堂の中心軸は同一で、同一時期に築造された可能性が高い。しかし、講堂後方に位置する北僧房は東西中心軸が木塔－金堂と異なっており、築造時期の違いをみせている。

したがって、鳥形土製品を塑像とみなす場合には、安置場所は金堂で、製作時期は百済末、祭祀と関連した宗教的象徴物とみなす場合には、使用場所は講堂で、製作時期は高麗時代とみることができる。鳥形土製品の安置や使用、保管場所について長舎を中心とした建物配置とともに考察すると、その機能や性格を新たに理解することができる。益山帝釈寺から出土した鳥形土製品は残存状態が良くない上、関連遺物と比較・検討する上でも非常に独特な形態であるため、明確な断定は難しい。ただ、残存状態や製作技法などを考慮すれば、百済末の塑像である可能性が高いと考えられる。



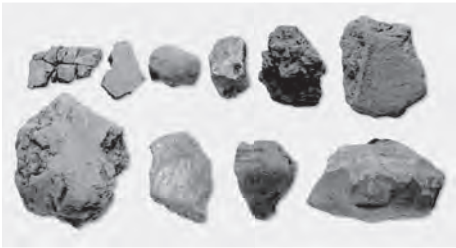
①遺構配置図

②鳥形土製品（百済）

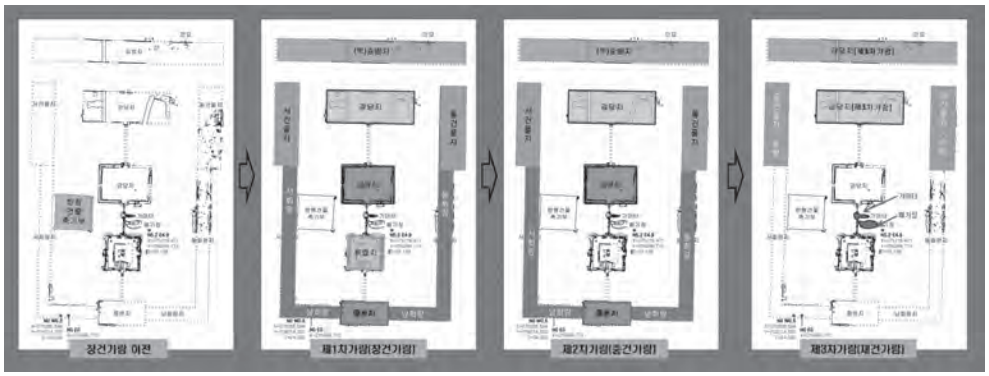
③帝釈寺瓦窯跡(統一新羅～高麗)

④廃棄土坑(統一新羅～高麗)

⑤廃棄土坑出土風鐸片(百済)



⑥帝釈寺廃棄土坑出土塑像



⑦益山帝釈寺伽藍変遷図（전용호2017）

第40図　益山帝釈寺窯跡・廃棄土坑と伽藍変遷図（国立扶余文化財研究所2011・2013、전용호2017）

Ⅶ. まとめ

以上のように、2016～2020年の第４次日韓共同研究の一環として、６～８世紀における日韓の宮城および寺院関連遺跡から確認される「長舎を中心にした建物配置」と「塑像」について比較・検討をおこない、益山地域の長舎と鳥形土製品について述べてきた。

日本における長舎に関する議論は、奈良文化財研究所を中心に多くの研究者が参加することで比較的多くの成果が得られてきた。その反面、韓国では宮城の宮殿建物、寺院の塔や金堂といった中心建物の調査や研究が集中的におこなわれてきた。そのため、扶余、益山、慶州地域の宮城や寺院関連遺跡では「長舎」の存在は以前から確認されていたものの、論じられることはほぼなかった。

益山地域の王宮や寺院を長舎の観点からアプローチすると、建物が持つ意味を新たに認識することができる。王宮である益山王宮里遺跡では、多様な類型の長舎が空間をたがえて現れる。益山王宮里遺跡の長舎は古代中国や高句麗の宮城に影響を受け、独自的な変貌を遂げ、のちに新羅や日本の宮城、地方官衙にも影響を及ぼした。

宮城前半部の第１空間と第３空間は、正殿を中心にして西方に南北方向に置かれた長舎が確認されており、日本の古代宮城で日常的な政務の場にあたる宮殿の正殿や内裏の正殿空間に似た機能や性格を持っている。創建期の講堂とみられてきた３ヵ所の階段施設を備えた長舎は、長舎前面の東西両側に延びる地山から掘り込まれた排水溝との関係から、寺院の講堂として使用される前は王宮と関連した建物である可能性がある。その機能や性格も、内裏の正殿や宗廟のような礼制建築物として、祭祀と関連した「祭祀（祭享）空間」とみることができる。

宮城前半部の第４空間では、中心建物の左右両脇に取り付く長舎が確認された。これは饗宴空間である宮苑に付属する食堂や宴会場などのような付属施設である。宮城前半部の第２空間と後半部の後苑では、独立建物を囲む長舎が確認された。これは、宮城内部で重要な位置を占める建物を外部から遮断、または保護する塀の機能を果たす施設として用いられた。特に第２空間は、朝鮮時代の郷校や書院で中核をなす「講学空間」と「祭祀（祭享）空間」を結ぶ「過程空間」とみることができる。最後に、宮城後半部の西北方からは、同一規模で一方向に並ぶ長舎（Ⅱ型）が確認され、これは作業場とみられる。

寺院である益山帝釈寺と弥勒寺では、講学空間の機能や性格を持つ長舎と建物配置をとる。このような構造は６世紀代の扶余地域の寺院と関連しており、同様の変遷をみせる。ただ、益山弥勒寺では、寺院の中心建物である塔と金堂を取り囲む回廊が長舎との取付部手前で内側に折れて取り付くことで、別の空間を設けている。すなわち儀礼と祭祀空間、言い換えれば祭祀（祭享）空間と講学空間を分けていたのである。

益山帝釈寺出土鳥形土製品は、益山地域だけでなく韓国でもその事例が少なく、その機能や性格の解明には多くの制約がある。益山帝釈寺の鳥形土製品は、韓国において、古代から人間界と天上界をつなぐ対象として、鳥を形象化した宗教的な象徴物でありながら、仏教における八部神衆の一つ、迦楼羅像と関連する塑像である可能性も排除できない。鳥形土製品を塑像とみなす場合には、その安置場所は金堂で、製作時期は百済末、祭祀と関連した宗教的象徴物とみなす場合には、その使用場所は講堂で、製作時期は高麗時代とみることができる。益山帝釈寺出土鳥形土製品は残存状態が良くなく、関連遺物との比較・検討の上でも大変独特な様相を呈しているため、それが何であるかという結論付けは難しい。ただ、残存状態や製作技法などを総合的に検討すると、百済末の塑像である可能性が高いと考えられる。

日韓において長舎は、中国の宮殿建築や四合院と呼ばれる伝統的な家屋の建築にその源流をみることができる。王宮や寺院で、王が主管する儀礼や行事をおこなう「祭祀（祭享）空間」、業務を遂行する「政務空間」、学問や寝食のための「講学空間」、物品を保管する「倉庫や作業空間」の観点からアプローチすることができる。古代はこのような領域が、一つの長舎で独立的または複合的に位置していたが、中世以降は空間を完全に分離して現れる。

韓国において、「塑像」と関連するもっとも重要な遺跡が扶余定林寺と益山帝釈寺である。両寺院には、金堂両脇の南北に長い長舎が東・西回廊に取り付くという配置形態に共通点がある。このような点から、６～８世紀の古代文化を解明する上で「長舎」と「塑像」は密接に関連している。さらに、この「長舎」と「塑像」は、日韓でやや異なる様相で展開することからも、これらの解明は６～８世紀の日韓文化像を捉える新たな鍵になると期待している。

註

1　用語については、本文で述べた通りである。筆者も益山王宮里遺跡の発掘調査に携わりながら、「回廊形建物」、「長廊形建物」、あるいは、「長廊」という用語を使用してきた（国立扶余文化財研究所『王宮里Ⅳ』、2008。国立扶余文化財研究所『王宮里Ⅹ』、2015年）。

2　国立扶余文化財研究所『王宮里Ⅹ』（前掲註１）。

3　배병선「익산 왕궁성과 백제 건축」『古代 東亞細亞 都城과 益山 王宮城（上）』、국립부여문화재연구소 편、2014年。

4　国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅲ』、2019年。

5　이병호「百済 泗沘時期 塑造像의 展開過程」『東垣学術論文集』第14輯、2013年。

6　한나래「백제 사찰 부속건물지의 유형과 성격」『고문화』80、2012年。한나래「신라 사찰 강당 좌우 건물지의 유형과 성격－백제와의 비교를 중심으로－」『韓国古代史探究』12、2012年。

7　既存の研究では、長舎それ自体が単体で扱われてきた。そのことが、長舎という建物を正しく理解す

るのに大きな弊害となっていたといえよう。むしろ長舎を中心にした建物配置が、この建物の意味と性格を理解する上で有益である。よって、本研究は、「長舎」よりは「長舎を中心にした建物配置」に焦点を当てている。

8 鳥形土製品は、塑像が大量に出土した寺院の長舎付近から出土している。日韓両国出土塑像のうち、鳥形土製品を対象としてその形態や製作技法などを比較し、また、検討可能な資料を収集するために調査・研究することが必要だと判断した。よって、研究対象は「鳥形土製品」に限定するのではなく、「塑像」に範囲を広げた。

9 日本では、地方官衙の調査や研究が活発であり、なおかつ長舎は継続的に確認されている。一方の韓国では、６～８世紀の都、もしくはそれに準ずる重要な地域を除いては、官庁建物に対する調査や研究はほとんど実施されていなかった。ただし、統一新羅時代の九州五小京の位置や規模、構造などに対する断片的な調査や研究はおこなわれているのが現状である。今後、三国～統一新羅時代の地方官衙についての調査と研究が本格的におこなわれることを期待したい。

10 奈良文化財研究所『長舎と官衙の建物配置』報告編および資料編、第17回古代官衙・集落研究会、2014年。

11 배병선「익산 왕궁성과 백제 건축」（前掲註３）。전용호「익산 왕궁성의 구조에 대한 연구 성과와 논쟁점」『馬韓・百済文化』第25輯、원광대학교 마한・백제문화연구소 편、2015年。한나래「백제 사찰 부속건물지의 유형과 성격」（前掲註６）。

12 前掲註10。

13 大林 潤「九州における長舎の出現と展開』『長舎と官衙の建物配置』報告編、第17回古代官衙・集落研究会、奈良文化財研究所、2014年、p.173。大橋泰夫「長舎と官衙研究の現状と課題」『長舎と官衙の建物配置』報告編、第17回古代官衙・集落研究会、奈良文化財研究所、2014年。

14 국립김해박물관『영혼의 전달자』、2004年、p.30。

15 前掲註14、p.30。

16 前掲註14、p.30。

17 前掲註14、p.30。

18 前掲註５。

19 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』、1985年。関西大学考古学研究室 国際シンポジウム実行委員会『国際シンポジウム 飛鳥・川原寺裏山遺跡と東アジア資料集』、2012年。

20 前掲註５。

21 国立慶州文化財研究所『사천왕사 녹유신장벽전』、2012年。

22 前掲註５。

23 本稿では、日韓において長舎が確認された遺跡の現況と特徴について、以下の資料を参考にした。これ以外は、日本での現地調査を通じて得た成果をまとめた。국립문화재연구소『건축유적　발굴조사 자료집－고대궁궐Ⅰ（고구려・백제・신라）』、2010年。国立慶州文化財研究所『慶州 月城 基礎学術調査 報告書Ⅰ』、2010年。国立扶余文化財研究所『동아시아 고대사지 비교연구（Ⅲ）－강당지・승방지・부속건물지・문지・회랑－』、2012年。奈良文化財研究所『長舎と官衙の建物配置』（前掲註10）。

24 국립문화재연구소『건축유적 발굴조사 자료집－고대궁궐Ⅰ（고구려・백제・신라）』（前掲註23）。

25 前掲註14、p.31。

26 前掲註14、p.34。

27 前掲註14、p.34。

28 前掲註14、p.59。

29 前掲註14、p.73。
30 前掲註14、p.93。
31 前掲註14、p.102。
32 前掲註14、p.106。
33 前掲註14、p.109。
34 前掲註14、p.109。
35 前掲註14、p.109。
36 前掲註14、p.122。
37 本稿では、塑像が確認された日韓の遺跡の現況と特徴について、以下の資料を参考にしたことを明記しておく。これ以外の資料は、日本での現地調査を通じて得た成果をまとめた。国立慶州文化財研究所『사천왕사 녹유신장벽전』(前掲註21)。国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅲ』、2019年。奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。西川杏太郎『塑像』日本の美術 No.255、至文堂、1987年。関西大学文学部考古学研究室 国際シンポジウム実行委員会『国際シンポジウム飛鳥、川原寺裏山遺跡と東アジア』(前掲註19)。이병호「百済 泗沘時期 塑造像의 展開過程」(前掲註５)。梁銀景「百済帝釈寺出土塑造像의 分析과 木塔址를 통한 奉安原形 推定」『湖西考古学』23、2010年。
38 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。国立慶州文化財研究所『사천왕사 녹유신장벽전』(前掲註21)。이병호「百済 泗沘時期 塑造像의 展開過程」(前掲註５)。
39 이병호「百済 泗沘時期 塑造像의 展開過程」(前掲註５)。
40 이병호「扶余 定林寺址 出土 塑造像의 製作技法과 奉安場所」『美術資料』72・73合集、2005年。이병호「百済 泗沘時期 塑造像의 展開過程」(前掲註５)。
41 国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅲ』(前掲註４)。원광대학교박물관『益山王宮里伝瓦窯址（帝釈寺廃棄場)』、2007年。
42 国立扶余文化財研究所『王宮里Ⅵ』、2008年。
43 원광대학교박물관『益山王宮里伝瓦窯址（帝釈寺廃棄場)』(前掲註41)。
44 国立慶州文化財研究所『사천왕사 녹유신장벽전』(前掲註21)。
45 国立慶州文化財研究所『사천왕사 녹유신장벽전』(前掲註21)。
46 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。
47 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。
48 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。
49 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。
50 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。
51 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。
52 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館『日本と韓国の塑像』(前掲註19)。
53 전용호「익산 왕궁성의 구조에 대한 연구 성과와 논쟁점」(前掲註11)。
54 益山帝釈寺の調査状況や研究成果については、以下の資料を参照した。国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅰ』、2011年。国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅱ』、2013年。国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅲ』(前掲註37)。전용호「익산 제석사지 출토수막새에 대한 일고찰」『歴史学研究』第68輯、호남고고학회 편、2017年。
55 国立扶余文化財研究所『帝釈寺址　발굴조사보고서Ⅰ』(前掲註54)。国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅱ』(前掲註54)。
56 国立扶余文化財研究所『帝釈寺址 발굴조사보고서Ⅱ』(前掲註54)、p.97。

57　李在憲・都龍昊「韓國敎育建築 空間構成因子의 二元的 相補性에 關한 研究」『淸州大學校産業科學研究』第７巻、2016年。

58　최장순「중국 사합원의 생성과 발전과정에 관한 연구」『韓国農村建築学会論文』第７巻１号（通巻19号）、2005年。

59　前掲註58、p.119。

60　전용호「익산 왕궁성의 구조에 대한 연구 성과와 논쟁점」（前掲註11）。

61　小田裕樹「饗宴施設の構造と長舎」『長舎と官衙の建物配置』報告編、第17回 古代官衙・集落研究会報告書、奈良文化財研究所編、2014年。

62　渡辺晃宏「平城宮の歴史的位置－遷都とその契機－」『藤原から平城へ－平城遷都の謎を解く』、奈良文化財研究所編、2019年、p.35。

63　전용호「익산 왕궁성의 구조에 대한 연구 성과와 논쟁점」（前掲註11）。

64　전용호「익산 왕궁리 유적 궁원（宮苑）을 중심으로 살펴본 동아시아 궁원」『Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture』Vol.17、한국전통조경학회 편、2019年。

65　前掲註５。

66　筆者は、益山帝釈寺の２次伽藍では木塔は再建されず、火災で被害を受けた木塔を象徴的な場所としてそのまま保存した可能性もあるとみている。先述したように、塑像は廃棄遺跡以外では、木塔北東に位置する廃棄土坑からも発見されている。２次伽藍を造営する際に木塔を再建したとすれば、その近くに廃棄土坑を設けることはしなかっただろう。くわえて、もっとも華やかで優れた芸術性が現れる忍冬唐草文軒平瓦は金堂でしか発見されていないこともその理由である。

参考文献

１．報告書と図録

慶州文化財研究所『殿廊址・南古壘発掘調査報告書』、1995年。

국립나주박물관・국립나주문화재연구소・한국문화유산협회『2017～2019 호남고고학 성과전, 땅속 울림 역사 풀림 전시 알림』、2020年。

국립문화재연구소『중국 고대도성 조사보고서』、2005年。

국립문화재연구소『서울 경기도의 향교건축』、2000年。

国立扶余文化財研究所『弥勒寺 遺蹟発掘調査報告書Ⅱ』、1996年。

国立扶余文化財研究所『王宮의 工房Ⅰ－金属編』、2006年。

国立扶余文化財研究所『扶余官北里百済遺蹟 発掘報告Ⅲ』、2009年。

国立扶余文化財研究所『王宮里Ⅶ』、2010年。

国立扶余文化財研究所『古代 東亞細亞 都城과 益山 王宮城 上・下』、2014年。

国立扶余文化財研究所『왕궁리－익산 왕궁리 유적－』、2015년도（제26차）학술조사자료、2015年。

国立扶余文化財研究所『王宮里ＸⅠ』、2019年。

국립창원문하재연구소『중국의 석굴』、2003年。

문화재관리국『雁鴨池 発掘調査報告書』、1978年。

문화재연구소『月城垓字 発掘調査報告書Ⅰ』、1990年。

김선기・조상미・임영호『익산 제석사지 시굴조사 보고서』、원광대학교 마한・백제문화연구소、1994年。

文化財管理局 文化財研究所『弥勒寺 遺蹟発掘調査報告書Ⅰ』、1989年。

복천박물관『선사・고대의 제사 풍요와 안녕의 기원』、2006年。

橿原市教育委員会「五條野向イ遺跡の調査」『平成10年度 奈良県内 市町村埋蔵文化財 発掘調査報告会資料』、奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会、1999年。

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮 発掘調査報告Ⅳ 飛鳥水落遺跡の調査』奈良国立文化財研究所 学報第55冊、1995年。
奈良文化財研究所「水落遺跡の調査-第165次（西区）」『奈良文化財研究所紀要2012』、2012年。
（財）京都府埋蔵文化財研究センター『上人ヶ平遺跡』京都府遺跡調査報告書 第15冊、1991年。
甲賀市教育委員会『紫香楽宮跡関連遺跡 発掘調査概報－甲賀市・宮町遺跡－』甲賀市文化財報告書 第Ⅰ、2008年。
甲賀市教育委員会『東山遺跡 第３次発掘調査』、2018年。
滋賀県教育委員会『史跡近江国衙跡 発掘調査報告』、滋賀県文化財調査報告書第６冊、1977年。
滋賀県教育委員会『史跡近江国庁跡 附惣山遺跡・青江遺跡調査整備事業報告書Ⅰ』、2002年。
滋賀県教育委員会『史跡近江国庁跡 附惣山遺跡・青江遺跡調査整備事業報告書Ⅱ』、2004年。
築城町教育委員会『船迫窯跡群（茶臼山東窯跡群・堂がへり遺跡・堂がへり窯跡群・宇土窯跡）』、1998年。
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター『史跡久米官衙遺跡群』、2011年。

２．論文その他

김영재「중국 고대도성계획에서 宗廟・社稷의 배치와 그 의미－商代에서 秦代까지：종묘・사직의 성격과 위치변화를 중심으로－」『大韓建築学会連合論文集』16권２호（통권60호）、2014年。
김용민「益山王宮城의 造営과 空間区画에 대한 考察」『고대도시와 왕권』제12회 백제연구 국제학술대회 발표논문、2004年。
김용민「益山王宮城発掘成果와 그 性格」『馬韓・百済文化』第17輯、2007年。
김주성「７세기 백제에서의 익산 위상의 변화」『익산 왕궁리유적－발굴20년의 성과와 의의』、국립부여문화재연구소 편、2009年。
김선기『익산 금마저의 백제문화』、서경문화사、2012年。
都龍昊「朝鮮時代鄕校・書院建築의 空間構成에 関한 研究」清州大学校大学院建築工学科碩士学位論文、1986年。
朴淳発「東아시아 都城史에서 본 益山王宮里遺蹟」『익산 왕궁리유적－발굴20년의 성과와 의의－』、국립부여문화재연구소 편、2009年。
朴淳発『백제의 도성』、충남대학교출판부 편、2010年。
朴淳発「중국 고대 도성 廟壇의 기원과 전개」『한국고대사연구』71、2013年。
朴淳発「동아시아 도성사에서 본 백제도성」『古代東亞細亞都城과 益山王宮城（上）』、국립부여문화재연구소 편、2014年。
배병선「왕궁리유적 백제 건물지의 구조분석」『익산 왕궁리유적－발굴20년의 성과와 의의』、국립부여문화재연구소 편、2009年。
서정화「고대 종묘제도의 左廟右社와 前朝後寝설에 대한 일고찰」『東洋古典研究』第62輯、2016年。
신성곤「宗廟制度의 탄생－宗廟의 공간과 배치를 중심으로－」『동아시아문화연구』제57집、2014年。
梁銀景「南京出土南朝塑造像의 製作技法과 生産体系」『百済研究』第58輯、2013年。
양정석「新羅王京中心区域儀礼関連建築群에 대한 검토」『역사와 담론』제68집、2013年。
어창선「경주 월성Ｃ지구（중앙지역） 통일신라시대 건물지 검토」『제40회 한국고고학전국대회자료집』、韓国考古学会編、2016年。
오정・노미선「중국 태양숭배사상의 시각적 표현연구－새형상을 중심으로－」『Archives od design research』2014. 02、vol27、no.1、2013年。
李康根「朝鮮王朝의 神殿宗廟」『미술사학연구』1997. 12、1997年。
李康根「城東洞殿廊址의 성격에 대한 再照明」『先史와 古代』第38号、2013年。

이은석「황룡사 건립과 신라 왕경의 조성」『황룡사지 발굴조사40주년 기념 국제학술대회 발표자료집』、2016年。

장혜원「石窟庵 八部衆像 研究」동국대학교 대학원 미술사학과 석사학위논문、2004年。

전용호「왕궁리유적의 최근 발굴성과－공간구획 및 활용방식을 중심으로」『익산 왕궁리유적－발굴20년의 성과와 의의－』、국립부여문화재연구소 편、2009年。

田有泰「안압지와 임해전 복원」『문화재』 제16호、1983年。

조상순「창건과 수리 조선시대 종묘의 건축적 고찰」『서울학연구』43、2011年。

池炳穆「익산 왕궁리유적의 성격에 대한 시론－성곽유구를 중심으로－」『사학연구』58・59합집、1999年。

채미향「중국 사합원의 형성과정과 공간구성에 관한 연구」강원대학교 산업대학원 건축학과 건축계획전공 석사학위논문、2007年。

최맹식「왕궁리유적 발굴의 최근성과」『마한백제문화』14、1999年。

최맹식「익산 왕궁리유적의 성격」『익산의 선사와 고대문화』、2003年。

최완규「고대 익산과 왕궁성」『익산 왕궁리유적－발굴20년의 성과와 의의』、국립부여문화재연구소 편、2009年。

최완규「동아시아 도성사에서 본 백제도성」『古代東亞細亞都城과 益山王宮城（上)』、국립부여문화재연구소 편、2014年。

許 宏 지음（김용성 옮김)『중국 고대 성시의 발생과 전개』、진인진、2014年。

青木 敬「石神遺跡（第21次）の調査」『奈良文化財研究所紀要2009』、2009年。

江口 桂（編)『古代官衙』考古調査ハンドブック11、ニューサイエンス社、2014年。

鈴木一議「近畿地方における長舎の出現と展開」『長舎と官衙の建物配置』報告編、第17回古代官衙・集落研究会報告書、奈良文化財研究所編、2014年。

長 直信、2014、『長舎の構造的検討』、『長舎と官衙の建物配置』報告編、第17回古代官衙・集落研究会報告書、奈良文化財研究所編、2014年。

林部 均「일본 고대의 왕궁・왕도의 형성」『古代東亞細亞都城과 益山王宮城（上)』、국립부여문화재연구소 편、2014年。

익산 지역 장랑지(長廊址)와 새 모양 토제품(土製品)에 대한 연구
－6～8세기 한일 궁성 건물 배치 양상과 사찰 출토 소조상과 비교와 검토를 중심으로－

전 용 호

요 지 한국과 일본에서 장랑지는 중국의 궁전 건축이나 사합원이라고 불리는 전통 건축과 관련되어 있다. 이는 왕궁이나 사찰을 중심으로 왕이 주관하는 의례나 행사를 위한 '제사(향) 공간', 업무를 수행하는 '정무 공간', 학문이나 숙식(宿食)을 위한 '강학 공간', 물품을 보관하는 '창고나 작업 공간'과 활용되어 왔다. 고대에는 이런 영역이 한 장랑지에서 독립적으로, 혹은 복합적으로 나타나다가, 중세를 거치면서 완벽하게 공간상으로 분리된 양상으로 나타난다.

익산 지역의 왕궁이나 사찰을 장랑지라는 관점으로 접근하면 건물이 지닌 의미를 새롭게 볼 수 있다. 왕궁인 익산 왕궁리 유적에서는 여러 유형의 장랑지가 공간을 달리하여 나타난다. 익산 왕궁리 유적의 장랑지는 고대 중국이나 고구려의 궁성의 영향을 받아 독특한 면모를 보이고 있으며 나중에 신라나 일본의 궁성이나 지방 관아에도 영향을 끼쳤다.

익산 제석사지에서 출토된 새 모양 토제품은 잔존 상태가 좋지 못하고 관련 유물과의 비교와 검토에서 상당히 독특한 면모를 보이고 있어 무엇이라 단정하기가 상당히 어렵다. 다만 잔존 형태나 제작 기법 등을 종합적으로 고려하면 백제말의 소조상일 가능성이 좀 더 높은 것으로 판단된다.

한국에서 '소조상'과 관련해서 가장 중요한 대상이 바로 부여 정림사지와 익산 제석사지를 들 수 있다. 이들 사이에는 금당 좌우 양쪽에 남북으로 긴 장랑지가 동 · 서회랑에 접하고 있다는 공통점이 있다. 이런 점에서 6～8세기의 고대 문화상을 밝히는데 '장랑지'와 '소조상'은 아주 밀접하게 관련되어 있다. 또한 이 둘은 한국과 일본에서 좀 다른 양상으로 전개되기도 한다. 이런 실타래를 잘 풀어낸다면, '장랑지'와 '소조상'은 6～8세기 한일의 문화상을 파악할 수 있는 새로운 열쇠가 되리라 기대해 본다.

주제어 : 장랑지, 건물 배치, 새 모양 토제품, 소조상, 봉안, 기원과 계통, 문화상

A Study on Jangrangji and bird-shaped terracotta in Iksan: Focusing on palace building layout and clay figure excavated from temple in the 6th and 8th centuries

Jeon Yongho

Abstracts: In Korea and Japan, Jangrangji is observed in the palace architecture or traditional building called "Siheyuan"(courtyard house) of China. Jangrangji has been utilized as a "ceremonial space" for conducting ceremonies or events organized by the king, a "state affairs or lecture space" for conducting state affairs, study or accommodation, and a "warehouse or work space" for storing items. In ancient times, these spaces appeared either independently or in complex within one Jangrangji site, and developed as an entirely separate space during Middle Ages.

From a perspective of Jangrangji, the meaning of the palace or temple constructed in Iksan region can be seen in the new light. There appear various types of Janrangji in different spaces in Wanggung-ri Palace Site in Iksan. Influenced by royal palaces of ancient China and Goguryeo, they had unique features and later affected royal palaces or provincial government offices in Silla and Japan.

A bird-shaped terracotta excavated from Jeseoksaji Temple Site in Iksan is in poor condition and has very distinct features compared to other related artifacts, and thus it is difficult to say what it is. Considering the shape of remaining part and production technique comprehensively, it is more likely to be a clay figure made at the end of Baekje period.

The most important site in relation to "clay figure" in Korea includes Jeongrimsaji Temple Site in Buyeo and Jeseoksaji Temple Site in Iksan. The both temples have a common structure where the long jangrangji buildings spanning in the north and south are adjacent to the corridors on the east and west side of the shrine hall. In this respect, "jangrangji" and "clay figure" are closely related, revealing the characteristics of ancient culture between the 6th and 8th centuries. But they were developed differently in Korea and Japan. If this question is unraveled, "jangrangji" and "clay figure" will present a new key to understanding the cultures of Korea and Japan in the 6th and 8th centuries.

Keywords: Jangrangji, building layout, bird-shape terracotta, clay figure, enshrine, origin and genealogy, culture